
IS インフィニット・ストラトス～破滅を喰らう漆黒の月～

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス／破滅を喰らう漆黒の月／

【Nコード】

N6607T

【作者名】

黒翼

【あらすじ】

異世界に飛ばされた暴王。その世界で何を喰らうのか、そして何を変えるのか。

※また衝動的に始めてしまった……。オリ展開、独自解釈などがあるかもしれません。駄文です。

プロローグ（前書き）

二作目です。

よければ見てください。

プロローグ

「ここは……?」

『ここはお前の意識の中だ。 夜科^{よしな}アゲハ』

「お前は07号! 何でいるんだ! 未来は変わったはずだろ!？」

『確かに変わった。 だが、問題が起きた』

「問題、だと?」

『お前が消したクアト ネヴァスが私達の世界とは別の世界に出現し、その世界が破滅の危機に陥った』

「お前は世界を救う気なんてなかったはずだけど?」

『お前に感化されたのだろう』

「そうですか。 で、俺にどうしろと?」

『お前にはその世界に行ってもらい、破滅の未来を変えて欲しい』

「ってことは、また俺は行方不明扱いになるんじゃないか!」

『安心しろ。 そのことに関してはお前がノヴァの力を一時的に使えなくはなれば大丈夫だ』

「どういうことだ?」

『お前の力を借りてこの世界のお前はそのまま別の世界にお前を送る』

「つまり、どういうことだ？」

『理解しろ。つまり、この世界にはお前のコピーを残し、別の世界にお前が行くんだ。コピーといったが両方本物のお前だ』

「なんとなくわかった」

『まずはお前だ。私の力では一度に複数人送ることはできない』

「俺以外に誰が来るんだ？」

『別世界の状況で誰を送るかを決める』

「わかった。あ、後その世界ってのはどんなところだ？」

『女尊男卑の世界だ』

「は？」

『その世界で必要な力は私が特別に用意してやった。もう行け』

「ちょ、おい、待て！ってマジかよ!？」

プロローグ（後書き）

無理矢理ですかね？

アンケートを行う予定ですのでよければご協力お願いしますm（

）m

C A L L. 1 ? 飛ばされた先に? (前書き)

タイトルはPSYRENっぽくしてみました。
1話目です。

CALL 1 ? 飛ばされた先に?

Side アゲハ

「ってマジかよ!?!」

意識が戻ったと思ったらなぜか俺は空にいた。

「07号覚えておけよ!」

無駄に叫ぶ。 ってか落ちる。

「これってやばくねえか?」

上空何メートルだ?

マジでどうする? このままだと確実に死ぬ。

「博打だ! ライズ全開!」

《PSI波動を感知。 『暴王』^{メルゼズ} 起動します》

「は?」

謎のメッセージが流れた後、俺の体に漆黒のアーマーが纏われる。

「なんだこれ!?!」

ズドオオオオオン!!

そのまま落下し、地面に落ちた。 その後の記憶がない。

「ここは……」

俺が目を覚ますと見覚えのない天井だった。 ……当たり前だけど。

「どうやら起きたようだな」

「誰だ？」

「私は織斑千冬。　ここの教師だ」

「俺は夜科アゲハだ」

「お前に聞きたいのは敵意があるのかだ」

「敵意は一応ない」

「一応だと？」

「あなたが俺の目的に害をなすものだったら容赦はしない」

「……目的？　なんだそれは」

「言っても理解できないだろ。　俺はこの世界のことは何一つ知らないし。　あ、一つだけ知ってた

っけ。　『女尊男卑』の世界ってことぐらいか」

「この世界のことを知らないとはどういうことだ？」

「俺は別世界の人間だ。　俺が理解できる異常なことはあなたには理解できない」

「別世界だと？　貴様は何を……」

「この世界のことを教えてくれ。　俺には目的がある」

「まあいい。　このISは貴様のものか？」

渡されたのは黒の指輪。

「……ISってなに？」

「ISを知らないとは本当にこの世界の人間ではないようだな」

だからISってなに？

「ISとは正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマル

チフォーム・スーツのことだ。問題はISが女性にしか動かせないことだ」

「だから『女が偉い』……ね」

「このISは返す。それとお前は編入してもらう」

「は？」

何の流れだ？

「編入ってどこに？」

「ここ、IS学園にだ」

「俺、一切ISの知識がないんですけど」

「これから覚えてもらうから安心しろ」

「安心できないんですけど!?!」

「馬鹿の相手はなれている」

あなたに姉貴の面影を見た……

「つてか、ISって女にしか使えないんだったら俺しか男いねえじやん!」

「私の弟がいるから安心しろ」

「は、はぁ……」

サイレン世界よりもなんか不安なんですけど!?!?

「後で参考書を渡す。内容は二週間で覚えろ」

「たぶん無理」

「無理ではない。やれ」

なんていう不条理だ!

「明日、またここに来る。これを着ておけ」

渡されたのは白い服。制服かなんかか?

「はぁ」

サイレン世界よりも辛い生活になりそうな気が……。

S i d e ｾ アゲ ｾ o u t

S i d e ｾ 千冬 ｾ

あの I S、『暴王^{メルゼス}』と言ったか。解析したが、ふざけた I S だ。

第三世代型の I S を軽く超えるスペック。

暴王の名を持つ剣。その剣の性能は『暮桜』や『白式』の『零落
白夜』を上回る。

エネルギーを吸収し膨張するだど？ しかもそれを『零落白夜』と
違いリスクがない。

剣以外にもその能力を持つ。

あの I S は化け物だ。

そして俺を持っていた夜科アゲハと言う少年。

あるとき目は殺しに躊躇いを持たない目だった。

あいつは別の世界から来たと言っていた。 なにかあるようだな…
…。

しばらく監視をするべきか……。

金銭面などの問題もあるな。 問題は山積みだな……。

S
i
d
e
〜
千
冬
〜
o
u
t

CALL 1

？飛ばされた先に？（後書き）

千冬さんⅡフブキ。

我ながら合っていると思う。

なんか似てない？

感想・アドバイスお願いします。

CALL 2 ?初陣?

Side アゲハ

翌日、渡された制服を着て待っていると織斑千冬が来た。

「織斑さん? 千冬さん? なんて呼べばいいんだ?」

「ここでは織斑先生と呼べ」

ここの教師だって言ってたな。

「織斑先生、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「で、俺はどうすれば?」

「私について来い。 お前のクラスは1年1組。 私の弟もいる」

「わかりました」

俺は織斑先生についていった。

「私が呼んだら入ってこい」

「わかりました」

織斑先生は教室に入っていた。

改めてこの格好を見ると、似合っているのか？

なんか嫌だなー。 サイレン世界で死に掛けたことがあったけど、アレとは違う絶望感だなー。

でも俺以外にも男がいるならまだいいかー。 そういえば、雨宮たちは元気かなー。

「夜科、入れ」

前の世界のことも考えていると呼ばれた。

「失礼しまーす」

入った瞬間に俺に視線が集まる。

うわー。 本当に女ばっかだー。

ふと、教卓の前の席にいる男に目がいく。

コイツが織斑先生の弟か。

「夜科アゲハです。 よろしく。 ちなみにISの知識は一切ないので俺に聞かないでください」

一応頭を下げておく。 すると沈黙が走る教室。

（あれ？ なんかマズった？）

「「「「「「「「き」「」「」「」

「きゅ。」

「「「「「「「「キャアアアアアアアアアッ!!」「」「」

うるさっ!

クラスの女子のほとんどが叫んだ。

「男子だ!」

「しかもイケメン!」

「カッコイイ!」

「ISについて私が教えてあげる!」

「でも物足りない」

……………。

「誰だ! 今物足りないって言ったやつは!」

俺が叫ぶ。 はっ! つい条件反射で。

「気にしてるんだ……」

「俺を哀れむな!」

「うるさい！」

俺の頭に何かが落ちてくる。

「ライズ」

反射的にライズを使う。

「え？」

「いつの間に？」

俺は今教室の後ろにいる。教卓からライズを使って移動したのだ。

「千冬姉の出席簿アタックを……」

パシンッ！

男の頭に出席簿が落ちる。さっきのは出席簿だったのか。ってか、出席簿の音じゃないよな……。

「織斑先生だ。馬鹿者。夜科、今のはなんだ？」

「昨日言った理解できないことですよ」

「そうか。夜科は空いている席に座れ。それでは、一時間目はグラウンドで実習だ。遅れるなよ。それと織斑、夜科を案内しろ」

「わ、わかりました……」

まだ痛みを引きずっているようだった。

「それでは、解散!」

俺は男の元に行く。

「お前が織斑先生の弟?」

「ああ。俺は織斑一夏だ。お前が降って来たのを見つけたのは俺たちだぜ?」

「そうなのか。それより移動しなくていいのか?」

「そうだな。歩きながらも話ができるしな」

俺は一夏の案内で更衣室に行き、渡されたISスーツとやらを着た。更衣室に行く前に女子が話していたり、話しかけられたり大変だった。

で、グラウンドに着いた。女子の視線が……。

「今からオルコットと夜科に模擬戦をしてもらう」

「はあ!?!」

なんて事を言い出すんだ!

俺、まともにIS使ったことないんですけど！ しかも起動の仕方
もわかんねえけど！

「夜科さんはISを持っているんですか？」

金髪ロールの女子が聞いてくる。

「ああ。 実戦どころか起動もまともにしていないがな」

「そうですの……」

「俺はどうすればいいんだ？」

「知識がないんだったな。 ISに意識を集中しろ」

「こうか？」

俺のISらしい漆黒の指輪に意識を集中する。 すると、俺に漆黒
のアーマーが纏わりつく。

「『暴王』……」

バーストの感覚で暴王が発動した。

「やれるのか……？」

「オルコット、準備はいいか？」

「はい！」

「では、始め！」

織斑先生の号令で戦闘が始まる。

相手はセシリア・オルコット、ISはブルー・ティアーズと言うらしい。

ブルーティアーズと呼ばれるビット兵器で射撃をしてくるセシリア。

「『メルゼズ・ディスクバージョン暴王・円盤Ver』」

俺の手にメルゼズ・ドア円盤型の暴王の月が出現する。

そして、ビットから撃たれたレーザーは暴王に当たった瞬間、消えた。

「なっ!?!」

「メルゼズ・ランス暴王の流星」

円盤Verを消し、暴王の流星を撃つ。

コイツはPSI波動から別の何かに変わったようだ。

「その程度の攻撃……」

「こいつは初弾速度は遅いが何かに反応して加速する」

ランス流星はセシリアに向かって加速する。

「くう……」

流星がセシリアにかする。

「そして、ホーミングは二回だ」

セシリアを通過した流星は再びセシリアに向かって直進する。

油断したセシリアに流星が直撃する。そして、セシリアの肩を貫いた。

「止めだ」

俺は再び暴王の流星を発動する。

「止め！」

織斑先生の声が響く。

「なぜです？」

「お前はオルコットの肩を貫いたのを見なかったのか？」

「見ましたけど、それが何か？」

「夜科、貴様はオルコットを殺す気か？」

「仕方がないだろ。これが俺の、『メルゼス・ドア暴王の月』の闘い方だ。そもそも、初めてまともに起動するのにコイツの性能の何一つわかってない状況で俺に闘わせたのが悪い」

「それは悪かったな。　だが、ここは学校だ。　殺しは御法度だ」

「わかりました」

死の世界から平和すぎる世界に飛んだしな。　一日では抜けんか…。
…。

「セシリア・オルコット、大丈夫か？　悪かったな」

「いえ、気にしないでくださいませ」

「気にしないでって言われてもな……」

気にするっての。

「医務室にでも連れて行きたいが、俺、このことわかんねえしな……。
一夏、案内してくんない？」

「ん？　別にいいぞ。　ああでも織斑先生の許可が……」

「構わん。行って来い」

「許可も出たことだし、行くか」

「は、はい」

ん？　なんだか嬉しそうな声だったような……。　ま、いっか。

「オルコットさん？　一夏が来るって聞いてから嬉しそうな声出さ

なかった？」

「な、なんのことですよ！？」

「いや、そんな気がしただけだ」

俺はオルコットをお姫様抱っこをし、一夏ををつれて移動をした。

S i d e 〱 ア ゲ ハ 〱 o u t

CALL. 2 ?初陣? (後書き)

暴王はやっぱりチートです。

簡単にはエネルギー兵器しかないセシリアは瞬殺でしたね。
感想等お願いします。

CALL 3 ?特訓? (前書き)

内容が思いつかない……。
では、第3話です。

CALL 3

？特訓？

Side アゲハ

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表おめでとう！」

「おめでとう！」

「ようこそ、夜科君！ これからよろしくねっ！」

「よろしく！」

クラッカーが乱射される。

「一夏ってクラス代表なんだ」

「あ、ああ……」

一夏は暗くなっていた。

「はいはーい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と、謎の転校生、夜科アゲハ君にインタビューをしました！」

盛り上がる女子一同。

渡される名刺。 黛薰子さんと言うらしい。

「ではではばり織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーを一夏に向ける黛さん。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もったいいコメントちょうだいよ。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

うわー、古。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

あなたのも十分前時代的なんですけど。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

よくねえよ！

「次に、謎の転校生、夜科君！ これからの意気込みをどうぞ！」

今度は俺に向けられるボイスレコーダー。

「俺はやるべきことのために、この破壊の力を再び従わせる」

一度従わせた暴王。ISとなった今、無関係の一夏たちを傷つけないために再び従えなければならぬ。

「うーん、なんか格好いいからそれでいいや」

「あ、あと一つ。しばらく俺にIS戦闘は申し込まないでくれ」

「聞いたこと。それはなんで？」

「俺のIS『暴王』はまだ制御できていない。この状態でやれば相手がどうなるかわからない。最悪殺してしまうからね」

「おおっ！　なんかいいねえ。これ、採用！」

「あれでいいのか？」

「いいんじゃないのか？」

今はセシリアのインタビュー中。

「とりあえず並んでね。写真撮るから」

「はい？」

「写真撮るから三人並んで」

「はあ……」

とりあえず並ぶ。

「本当に悪かったな、オルコット」

「い、いえ、油断したわたくしも悪いですし……。それと、わたくしのことはセシリアとお呼びください」

「いいのか？ それならアゲハって呼んでくれ」

「よろしくお願いしますわ、アゲハさん」

「こちらこそよろしく、セシリア」

「話してないで写真撮るわよー。 35×51÷24は？」

「え？ えーと……2？」

「ぶー、74，375でしたー」

パシャッとデジカメのシャッターが切られた。 すごいな……。

「何で全員入ってるんだ？」

恐るべき行動力だ。 一組のメンバーが撮影の瞬間に集結していた。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

丸め込むようなことを言っている。

「う、ぐ……」

苦虫をかみつぶしたような顔をしているセシリア。

「夜科はいるか？」

「なんです？ 織斑先生」

「ちょっと来い」

「わかりました」

俺は織斑先生に連れられてパーティーを抜ける。

「で、なんのようですか？」

「お前の部屋についてだ」

「あー。なるほど」

「お前はしばらくは私と同じ部屋に住んでもらう」

「は？」

「部屋の調整がつくまでは私と同じ部屋に住んでもらう」

そういうことか……。

「俺の監視も含めて……、ですか」

「そういうことだ」

「ここが部屋ですか。　よし、覚えた。　それとアリーナはどこですか？」

「アリーナの場所を聞いてどうするつもりだ？」

「今から『暴王』の制御のために特訓するんですよ」

「放課後にやれ」

「それはできないんだよ」

「どういうことだ？」

「俺の経験からすると俺の暴王はISのエネルギーに反応して攻撃する。　あるときセシリアの肩を貫いただろ？　そういうことが起こるから制御できるまでは人の多い空間で暴王を使用することはできない。　絶対巻き込むから……」

「はぁ。　今回は特例だ。　その代わり、私が付き添いでいることが条件だ」

「構いませんよ。　俺はコイツを制御しなければ戦うことはできないので」

「着いていい」

「はい」

アリーナに向けて歩き始める織斑先生。その後を追う俺。

「着いたぞ」

「ありがとうございます」

アリーナに着き、暴王を起動する。

「まずはコイツのデータを見ないとな」

俺は織斑先生に教えられながらも空中投影ディスプレイでスペックなどを見る。

「《メルゼス・ソード暴王の牙》？ そんなんがあつたのか」

そのほかにも《メルゼス・クロウ暴王の爪》、《メルゼス・ウイング暴王の翼》という、初耳の名があつた。

「ソード」

俺の手に漆黒の剣が出現した。

「クロウ」

俺の手から漆黒のエネルギー爪が現れた。

「ウイング」

暴王の背中のスラスタから4機のビットが射出された。そして、そのビットはアリーナの遮断シールドに向かって飛んでいった。

「織斑先生、アリーナの遮断シールドってエネルギーが使用されているんですか？」

「その通りだが、それがどうした？」

「いや、なんでも」

『暴王』がついてるからまさかと思ったが本当にそうだったとは……。

「まずはウイングの制御だな」

俺は月と流星ドアランスは通常時では使わないことにした。周りを巻き込んでしまうからな。

意識をウイングに集中し、呼び戻す。PSIよりかは制御が簡単そうだ。

「織斑先生、ターゲットか何かって出せます？」

「お前は年上への遠慮というものを知らんのか？」

「コイツを早く制御しないと危険なんですよ。俺の周りにいるすべての人が。制御ができるまでは付き合ってください。といっても、今回は少し簡単そうですが……」

「今回は？」

「今度話します。それよりも、ターゲットをお願いします」

出現するターゲット。再び勝手に移動するウィング、もといビット。

一度放置して動きを観察する。エネルギーを感知し、自動的に追尾、攻撃をするようだ。また遮断シールドに飛んでいった奴が1機だけあったけど……。ってあれ？ 少し大きくなっているような……。

「とにかく、ターゲットを指定できるようになればいいのか」

ビットを呼び戻し、5体あるうちの2体を指定しながらビットを飛ばす。4機のビットは2体のターゲットに向かって飛んでいったと思ったら、3機が別のターゲットに向かって飛んでいった。

「どうしたものか……」

いくらPSIで暴王・月を制御したとはいえ、今回はISだ。知識ゼロのISだ。手がかりがない今では少しばかり難しい。知

「マーキングでもしてみるか？ いや、そのマーキングをする手段がないか……」

なにかいい手はないか……。

「いや、このまま練習を続けられいけるか？」

さっきから意識して飛ばしたビットは少なからず意識通りに飛ぶものがあつた。 たまたまかもしれないけど、俺の意識が行き渡っていなかったただけかも知れない。

ターゲットは10体に増やしてもらい、ターゲットを指定してビットを飛ばす作業の繰り返し。

ビットは少なからず指定したビットに飛んでいくことから、意識の甘さか何からしい。

「ウイング！」

これで何回目だろうか。すでにビットを飛ばしている回数は20回を超えている。

確実にターゲットに向かって飛ぶウイングビットは2機に増えている。

「はあっ、はあっ……」

「夜科、今日はここまでだ。すでに11時を過ぎている。三時間以上休憩無しでやっている。今日はもう休め」

「わかりました……」

俺はビットを呼び戻し、機体に戻した。アレ？

「エネルギーが回復した？」

消耗していたはずのエネルギーが回復した。もしかして……

「吸収したエネルギーを溜め込んでそのまま俺のエネルギーに轉換した？」

あ、だからウィングビットのサイズが大きくなっていたんだ。つてことは溜め込みすぎると暴走するかもな。

「夜科、行くぞ」

「あ、はい」

暴王を解除し、急いで後を追う。勉強があるからしばらくは大変だな。

Side アゲハ out

CALL. 3 ?特訓? (後書き)

暴王兵器を作ってみました。

暴王なのでチートですが……。

感想等、お願いしますm(´`m

CALL 4 ?中国代表候補生?

Side アゲハ

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

朝、俺が教室に入るとそんな声が聞こえてきた。

「何の話だ？」

「夜科君おはよー。 今転校生の話をしてたの」

「転校生？」

「中国の代表候補生だってさ」

「へー」

「どんなやつなんだろうな」

「む……気になるのか？」

「ん? ああ、少しは」

「ふん……」

一夏の返答に篠ノ之?は機嫌が悪くなる。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか? 来月にはクラ

ス対抗戦があるというのに」

「そう！　そうですわ、一夏さん。　クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。　相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。　なにせ、専用機を持っているのはこのクラスでわたくしとアゲハさんと一夏さんだけなのですから」

随分と『だけ』を強調したな。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきますえんと！」

「そうぞ。　男たるものそのような弱気でどうする」

「何をするのかは知らんが、がんばれ」

「織斑くんが勝つとクラスのみんなが幸せだよー」

クラス対抗戦って何だ？

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているクラスは一組と四組だけだから余裕だよ」

「――その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえた。

「二組も専用気持ちでクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？ なんてことを言うのよ、アンタは！」

「おい」

この声は……。

「なによ！？」

バシンッ！ 織斑先生の登場。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

昔から千冬姉のことが苦手のようだ。

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

転校生らしき女子はダッシュで隣のクラスへと消えていった。

「つていうかアイツ、ISの操縦者だったのか。初めて知った」

一夏の一言でクラス的女子からの集中砲火が始まった。俺は座っておこ。

「……一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で——」

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿者ども」

織斑先生の出席簿が次々と女子生徒の頭に落ちた。 ご愁傷様。

そして昼休み。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

開口一番がこれ。

「なんでだよ……」

この二人は、午前中だけで山田先生に注意五回、織斑先生に三回叩かれていた。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

なんかツンデレの響きだ。

ここの学食はとにかく美味い。なんか羨ましくなってきた……。

「待ってたわよ、一夏！」

いたのは朝の転校生。

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に

通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。 わかってるわよ」

その手に持つのはラーメン。

「のびるぞ」

一夏の一言。

「わ、わかってるわよ！ 大体、アンタを待っていたんでしようが！ 何で早く来ないのよ」

とりあえず食券を出す。

「それにしても久しぶりだな。 ちょうど丸一年ぶりか。 元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。 アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「どういう希望だよ」

仲のよろしいお二人さん。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！ 一夏さん？ 注文の品、できてましてよ？」

「向こうのテーブルが空いてるからとっとと行こうぜ」

ここだと邪魔なんで、空いてる席を見つけて促す。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの！？」

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」

「そうだぞ。　なんでそんな話になるんだ。　ただの幼馴染だよ」

「幼馴染み……？」

「あー、えっとだな。　箒が引越したのが小四の終わりごろだっただろ？　鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。　で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりぐらいだな」

「で、こっちが箒。　ほら、前に話したろ？　小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣道場の娘」

「初めまして。　これからよろしくね」

「ああ。　こちらこそ」

「で、この男は？」

「二日前に編入してきた二人目のISを使える男」

「夜科アゲハだ。　よろしくな、凰鈴音」

「鈴でいいわよ。その代わり、アゲハって呼ぶから」

「よろしくな、鈴」

「こちらこそ」

「シンンッ！私の存在を忘れてもらっては困りますわ。凰鈴音さん？」

「……誰！」

「なっ！わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

なんかセシリアがかわいそうだ。

「い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。もちろん、アゲハにも一夏にもね」

「そうですか」

適当にあしらう。

「一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。 成り行きでな」

「ふーん……」

鈴はどんぶりを持ってスープを飲む。

「あ、あのさあ。 ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

「そりゃ助か——」

ダンッ！ テーブルが叩かれた。

「一夏に教えるのは私の役目だ。 頼まれたのは、私だ」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ」

なんか長くなりそうだな……。

「俺、先行くから」

「おう」

一夏にそう告げて席を立った。 俺の後ろから鈴と篠ノ之とセシリアの口論が聞こえるがスルーだ。

そして夜に織斑先生監視の下で暴王を使い、ウィングの制御訓練をした。

S
i
d
e
↳
ア
ゲ
ハ
↳
o
u
t

CALL. 4 ?中国代表候補生? (後書き)

鈴登場です。

そろそろもう一人来ます。

あの人です。 予想はできますね。

感想等、お願いしますm () m

CALL 5

？襲撃？

Side アゲハ

鈴がなぜか不機嫌で、その機嫌が直らないままクラス対抗戦当日になった。

第二アリーナ第一試合。 組み合わせは一夏と鈴だ。

鈴の機体は『シンロン甲龍』。 某人気漫画を連想させる名前だった。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、一夏と鈴が空中で向き合っている。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

「そんなもん知ってるさ」

それもそうだな。 目の前でセシリアの肩が貫かれたのを見たんだから……。

まあ、『殺さない程度にいたぶることは可能』らしい。

『それでは両者、試合を開始してください』

一夏と鈴が動いた。

ガギインッ!!

《雪平式型》で相対する一夏。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど——」

青竜刀をバトンのように回し連続で一夏に斬りかかる。

「——甘いっ!!」

鈴の肩アーマーがスライドした。そして、中心の球体が光った瞬間、一夏は飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

ドンッ!!

一夏は立て続けに攻撃を受けていた。

「なんだあれは……?」

箒が呟く。俺も感じた疑問。

ちなみに、俺たちはピットからモニターで見ている。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、第三世代型兵器ですわ」

しかもあれって砲身も砲弾も見えてないよな。 鈴の砲撃を見る限りではおそらく砲身角度に制限がない。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

ふと一夏がそんなことを言った。

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。 とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

一夏は『イグニッション・ブースト瞬時加速』と言う技能を使い、鈴に急接近する。

「うおおおおっ！」

ズドオオオオオンッ！

鈴に刃が届きそうになった瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に

走った。

「一体なんなんだ？」

何か嫌の予感がする……。

そして、ステージから上がっていた煙を吹き飛ばし、ビームが連射される。

煙が晴れて見えたのは全身装甲のISだった。

「織斑先生、俺が行きます」

「それは無理だ。これを見ろ」

「遮断シールドがレベル4に設定……？」

「織斑先生、アンタらしくねえぜ。俺の『暴王』を忘れるなんてな」

「っ！ 夜科、頼めるか？」

「ああ。それと、遮断シールドはISと同じエネルギーを使っているんだよね？」

「その通りだ」

「じゃあ、行ってくるわ」

遮断シールドの前で『暴王』を起動する。

「『メルゼズ・ディスクバージョン暴王・円盤Ver」

円盤状の暴王の月で遮断シールドを切り裂く。そして、一夏たちが交戦している死地へと向かった。

「一夏、鈴、この場から下がれ。こいつは俺が殺る」

「アゲハ!? I Sの制御は!？」

「心配するな。こいつは俺に任せろ。お前らは邪魔だ」

「邪魔って何よ! あんた、一夏よりもI Sの機動時間短いくせに」

「俺のI Sの邪魔なんだよ。巻き込まれて死んでも知らねえぞ」

「バカじゃないの! 死ぬわけないでしょ!」

「鈴、おとなしく下がれ。アゲハのI Sはセシリアに攻撃を貫通させたんだ。おそらく、一歩間違えれば、本当に死んでしまうんだよ」

「とっとと行け。お前らがいると暴王が使えねえんだよ」

「わかった。絶対に戻ってこいよ」

「俺は簡単には死なねえよ」

一夏と鈴はやっと戻っていった。

「さて、やろうか」

正体不明の全身装甲のISが連射してくるが、俺は回避し、暴王・円盤Verで防ぐ。

「なかなかの威力だな。あと2発くらいで暴走が始まるかもな」

俺は円盤Verを解除し、暴王の牙を呼び出す。

「はああああ！」

俺は全身装甲のISに接近する。レーザーを撃ってくるが、すべてソードで吸収する。そして、敵ISの右腕を切り落とした。

「やっぱり無人機だったか。それならランスが使える」

漆黒の球体が俺の手から放たれる。

こいつはエネルギーに反応して加速、ホーミングをする。この程度の速度のISならば、避けることは不可能。そして、漆黒の流星は無人機を貫く。暴王の流星はISになっても変わらない。

ホーミングは2回。無人機は二度目のホーミングで起動を停止した。

「終わったか……」

——敵ISの再起動を確認！ 警告！ ロックされています！

まだ動くのか。

メルゼズ・バースト
「暴王の解放」

暴王の牙に吸収されたエネルギーは、攻性エネルギーとして解放
つことができる。

そして、このエネルギーは吸収されているエネルギーと自分のエネ
ルギーを掛け合わせた一撃となる。

つまり、敵ISが撃った高威力のレーザーに、自分のエネルギーを
上乘せした、高出力砲となる。

この一撃は、死へと導く漆黒の閃光。 敵ISは飲み込まれ、完全
に起動を停止した。

今度こそ終わった。

「チッ！ 結局この程度かよ」

「!？」

俺が見た先にはISに乗った、見覚えのある顔だった。

「ドルキ!？」

サイレン世界で俺が殺されかけた相手。 だが、カイルによって殺
された男。 あのドルキがいたことに驚いているが、それよりも驚
いていること。 それは……ドルキが女だった。 なんでわかるの
か。 それは、胸があるから。

「てめえ、誰だよ。 私の名前を知ってるなんてよお」

本当にドルキだった！ しかも本当に女だった！ パラレルワール
ドでもこれはないって！ ドルキが、あのドルキが女って！

「ドルキ、何のようだ？」

「そのもん、ここを壊しに来たに決まってんじゃないか！
爆塵者」
イクスプロジア

しかも同じ名前のIS使ってるし！

そんなことを思っていると、俺の周りはどうどん爆発していく。
やべえ。カブトいねえと避けづらい……。

「ウイング！」

4機のウイングビットを展開し、ドルキに向かって飛ばす。毎日の特訓おかげで、4機すべてを同時に制御できるようになった。ウイングビットはエネルギーを感知して自動で攻撃を繰り返す。ドルキの放つ爆塵者の攻撃も喰らう。

「お前は逃がすわけにはいかねえ！」

ランスをドルキに向かう。相手は人だが、本物のドルキなら躊躇う必要はない。

「そんな攻撃くらうかよ！
爆塵者・星船形態！」
イクスプロジア

かつて受けたことのある全方位を爆撃する巨大な塊。

「残念だったな。その程度のエネルギーの塊なら、俺の『暴王』
は止めることはできねえよ」
メルゼス

星船形態の爆塵者を貫いてそのままドルキを貫く。

「な、なん……だと……」

やっぱり急所からずれたか……。 だが……

「ホーミングは二回」

俺、この台詞よく言うな。

ランスがホーミングを開始して、ドルキを削り始めて、胸から肩に辿り着こうとした瞬間、ドルキはこの場から消えた。

「……瞬間移動もいるのか……」
テレポーター

しかし、ドルキはこの場に現れることなく、姿を現すことはなかった。

S i d e 〓 a g e 〓 o u t

S i d e 〓 〓

学園の地下50メートルにある、隠された空間。

ボロボロになり、機能停止したISは運び込まれ、解析された。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。 どうだった？」

「はい。 あれは——無人機です」

遠隔操作と独立稼動。世界中で完成していない技術がこのI Sには使われていた。その事實は、すぐさま学園関係者全員に箱口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。夜科君の最後の攻撃で機能中枢も破壊されていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

千冬はディスプレイの映像に視線を移す。その映像は、アゲハと無人機、そして、謎のI S。

それを見る顔は、教師のものではなく、戦士の顔であった。

かつて世界最高の座にあった、伝説の操縦者。その瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

S i d e ~ ~ o u t

CALL. 5 ?襲撃? (後書き)

あの銀髪バイザーのドルキが、パラレルワールドでは女になりました。

次回あの人が登場です。
では、また次回。

CAL. 6

? 新たな仲間? (前書き)

タイトルからわかるように、登場キャラ増えます。

CALL 6

? 新たな仲間?

Side アゲハ

「夜科、ちよつといいか？」

翌日の朝、織斑先生に呼び止められた。

「はい？　なんです？」

「昨日のISについてだ」

「あー。　ドルキのことですか？」

「あの操縦者はドルキと言うのか。　それで、お前はアイツと面識を持っていたように見えたが、気のせいかな？」

「気のせいじゃないですけど、アイツは別人ですよ」

「アイツは何者だ？」

「俺が前にいた世界ではサイキッカーがいてな、そのサイキッカーの世界を作ろうとした男の部下だった男だよ。　この世界にいたことにも驚いたが、女になっていたほうが驚きですよ」

「ちよつと待て。　サイキッカーだと？　お前の世界にはそんな人間もいるのか？」

「そういう俺もサイキッカーですけど」

「……………で、そのサイキッカーだった男、この世界では女だが、アイツが乗っていたISについて知っていることはあるか？」

「あいつが使っていたISはおそらく『爆塵者』イクスプロジヤと呼ばれるはずだ。俺のいた世界でのドルキの能力は爆塵者だったからな。その能力の恐ろしさは俺はよく知っているつもりだ。……殺されかけたしな」

「お前に何があった……」

「前の世界ではアイツは俺の仲間に殺されたから、同一人物なのかはわからない。ただ、俺と同じように飛ばされたのかもしれないが、俺のことを知らないことから前の世界のドルキとは違う奴だと思う」

「そうか……」

「俺、行っているんですか？　もう飯食いにいきたいんですけど」

「最後だ。私の弟を……一夏を、この学園を護ってくれてありがとう」

「っ！　……あなたが俺にそんなことを言うなんて思いもしなかったよ。俺から最後に一つ。この世界は、最悪の場合破滅する。じゃ、そういうことで」

何かを訊きたそうにしていた織斑先生に気づかないフリをして食堂に向かった。

「お、一夏じゃん。それに鈴とセシリアに箒っていつものメンツか」

「お、謎の人間のアゲハじゃん。今から朝食ですか？」

「謎の人間って何だ？ 俺がなんか謎を招くようなことしたか？」

「したじゃんか。昨日思いっきり」

「代表候補生の私と一夏でも苦戦したISを瞬殺して、なおかつ謎のISを纏った相手をそのまま撃退したんだから、とてもIS初心者とは思えないでしょ。そんなこととして「謎を招くようなことしたか」なんてよく言えるわよ」

「ISは初心者だぞ」

「IS「は」？ ということですか？」

「話してやるけど、ここじゃなくて後でいいか？ あまり聞かせたくはないんでな」

「まあ、話してくれるのなら構わないが……」

「よくよく思えば俺たちってアゲハのことなにもしらねえよな」

「そういわれればそうですわね……」

「じゃあそういうことで。 飯食べねえとな」

こいつらに付き合っていたので、朝食を注文してすらない。

「アゲハ、ちょっと、いいか？」

「ん？　なんだ？」

食券を出して注文の品が出るまで待つ。その間に一夏が話しかけて来た。　　ってか態々席まで立って俺に話って何だ？　　箒たちは不思議そうに見ている。

「ISについてとは言わない。　アゲハの身のこなしを見て思ったんだけど、俺を鍛えてくれ」

「は？　鍛える？　俺が？　一夏に？」

「ああ。　なんかアゲハの動きって、違和感があるんだよな。　前に千冬姉の出席簿アタックを避けたときとか」

ライズ使ったから当たり前か。

「……別にいいけどさー、俺に得ないじゃん」

お、出てきた。　俺の朝は基本パンだ。　俺は朝パン派だ。

「確かにアゲハには何の得もないよなー。　うーん……」

結構悩んでるな。

「まず俺は飯食うから、考えといて」

「おう」

とりあえず席に着いてトーストを胃袋に入れる。

「相変わらずアゲハは一夏よりも食べないな」

「そうか？」

「そうよ。私よりも少ないし」

「朝っぱらからラーメンなんてヘビーなもん食えるか。それに結構量あるし。朝はあっさりそこそこ、パンがいいんだよ」

「人の飯について他人がどうこう言ってもダメだろ。その人の好みなんだし」

「それもそうだな……」

「そういうこと。俺の朝食は俺が決める。ふう、御馳走さん」

パンだから早く食えるし。教室いこつと。

後ろからぞろぞろと並んで専用機持ち組（二人例外）は移動した。

「諸君、おはよう」

「」「おはようございます」「」

織斑先生の登場。

「マジかよ……」

ふと窓を見ると、俺をこの世界に送った元凶の女の持つ能力によって生み出された時間を越える化身、『ネメシスQ』がいた。

「なにあれ……?」

「なんで浮いてるの?」

「……IS?」

『夜科、聞こえるか?』

『ああ。聞こえてる』

『まず確認だ。お前のノヴァはすでに使えるようになっては
ずだ』

『ああ。わかってる。で、何のようだ?』

『もう一人連れてきた』

『は? 誰を?』

『もう一人のノヴァを使える女だ』

「はあああ!?!」

「え、何?」

「夜科君、どうしたの?」

しまった、つい口から出してしまった。

「いや、なんでもない、わけじゃないか」

『で、桜子はどこだ?』

『今頃グラウンドに上空にいるだろう』

『マジかよ!?!?』

コイツは普通に送るってことができないのか?

「織斑先生、俺、急用ができたのでちょっと行ってきます!　って一緒に来てください!」

「おい、どういふこと——は?」

「「「え?」」」

俺は織斑先生の手をつないでライズを使って窓から飛び降りた。

「夜科、放せ!」

「急がねえとやばいんだって!」

「理由を話せ!」

「俺の仲間が降ってくる!」

「さっきのヘンなのが関係しているのか？」

「ああ。到着！」

グラウンドに着き、上空を見上げる。そして、見覚えのある制服を纏った女の子が見えた。

「桜子！」

「え、アゲハ！？」

俺は暴王を起動し、降ってきた桜子を受け止める。

「間に合った……」

「どうしてアゲハがここに……？」

「07号から聞かなかったのか？」

「この世界が破滅するってことと、私を待つ人がいるって、アゲハだったの！？」

「おい夜科、その女は誰だ？」

「アゲハ、この人誰？」

織斑先生？ 桜子さん？ 後ろに阿修羅が見えるんだけど……。

「この人は織斑千冬さんって言って、ここの先生だ」

「先生？」

「で、この女の子が雨宮桜子。俺の、……彼女……（ボソッ）」

「夜科の、何だって？」

「アゲハの彼女です」

今までそんなことなかったのに！ 桜子さん！ あなたに何があったんですか！？ ってか紅骨持ち出さないで！ しかもあなたはライズを使ってまで織斑先生に何を？

《PSI波動を感知。『紅骨』起動します》

「「え？」」

桜子の持つ妖刀『心鬼紅骨』から光が放たれ、そのまま桜子を包む。

「何これ!？」

「やっぱりISを持っていたか」

「アゲハ、これ何？ 紅骨がこんなのに変わったんだけど……」

「とりあえずそれ解除して」

「解除ってどうやって？」

「アンタは気にしないでいいから」

今のはアビス？　そしてI Sは消え去り、桜子の首に刀の装飾の着いたネックレスがついた。

「え？　紅骨は？」

「手に刀を呼び出すイメージで」

「こう？」

桜子の手に刀が握られた。

「さすがだな。　って、すみませんっ！　織斑先生！」

「私からは一つだけ聞こう。　敵意はあるか？」

「アゲハがないなら私もありません」

「そうか。　では、ついてきてもらう。　夜科は教室に戻れ」

「わかりました」

桜子は織斑先生の後について、俺は教室へと向かっていった。

そして次の日。

「雨宮桜子です。　みなさん、よろしくお願いします。　ちなみに、アゲハの彼女です」

俺たちと同じ制服を身に着けた桜子が挨拶をしていた。

そして

「「「「ええええええええっ!?!」」」」

俺たちへの質問攻めが始まった。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

CALL 6

?新たな仲間? (後書き)

雨宮さん登場です。 IS起動は無理矢理ですけど、気にしないで……。

そして、アンケートです。

これから出して欲しいPSYRENキャラを募集します。

人気の高いキャラを登場させます(たぶんです。変更があるかもしれない)

期日は一応6月15日までです。

ご協力お願いしますm(_____)m

CALL 7

？転校生？

Side アゲハ

桜子が子の世界に来て、俺と桜子の関係を質問攻めにされた次の日、俺と桜子が教室に行くと、女子たちが談笑していた。

「やっぱりハヅキ社製のがいいかなあ」

「え？ そう？ ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

「何の話し？」

「あ、おはよー、夜科君に雨宮さん」

「そういえば織斑君と夜科君と雨宮さんのISスーツってどこやつなの？」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞ってる」

「俺と桜子は使っていないぞ。　ちょっと特殊なんだ」

俺たちのISは元々己のPSIをIS化したものだからな。　一心
同体って奴だ。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操
縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、一般的な小口径拳銃の銃
弾程度なら完全に受け止めることができます。　あ、衝撃は消えま
せんのであしからず」

すらすらと説明する山田先生。

「山ちゃん詳しい!」

「一応先生ですから。　……って、や、山ちゃん?」

「山ぴー見直した!」

「今日が皆さんのスーツの申込日開始ですからね。　ちゃんと予習
してきてあるんです。　えへん。　……って、や、山ぴー?」

俺がこの世界に来て、知る限りでは8つくらいの愛称がついている。

「あの一、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

「あれ？ マヤマヤの方が良かった？ マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

ヤマヤってあだ名にトラウマでもあるのか？ 桜子に頭の中覗いて
もらおうかな？

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わ
かりましたか？ わかりましたね？」

返事はしたがわかってないだろ。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

織斑先生の登場。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがI
Sを使用するの授業になるので各人気を引き締めるように。各人
のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないよう
にな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもら
う。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

構って！ 男子がいるんだから構って！

「では山田先生、ホームルームを」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも2名です！」

「「ええええええええっ!?」」

っていうかこのクラスに転校生多くないか？

「失礼します」

「……………」

クラスが静まり返った。 転校生の一人が男だったから。

「シャルル・デュノアです。 フランスからきました。 この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく願います」

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ……」

「はい？」

あ、ヤバイ気が……。

「きゃああああ——っ！」

キター！

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

眼帯に銀髪の見ただ目からして軍人。

「……挨拶をしろラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

綺麗な敬礼。 本当に軍人だった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……………」

もう少しなんか言おうよ……。

「あ、あの以上……ですか？」

「以上だ」

そして一夏と目が合う。

「！貴様が——」

バシンッ！

「……………」

「う？」

今叩いたよな？ 幻覚じゃないよな？

「私は認めない。 貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

はい？

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

ウワー、ガン無視だー。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散！！」

あー移動しなきゃな。女子が着替える。

「おい織斑と夜科。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「了解」

「君が織斑君と夜科君？ 初めまして。僕は――」

「挨拶は後。移動優先」

「女子が着替えるから」

同時に行動に移す。一夏はシャルルの手を取っている。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんかさっきから挙動不審だな。

「どうした、トイレか？」

「トイ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

とにかく急ぐ。　だって……

「ああっ、転校生発見！」

「しかも織斑君たちとも一緒！」

こういうこと。

「いたっ、こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

いつからここは武家屋敷になった。

「織斑君と夜科君の黒髪もいいけど、金髪ってのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！　見て見て！　夜科君と手！　手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！　ありがとうお母さん！　今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

この親不孝者！　ちゃんとしたものをあげて！

「な、なに？　何でみんな騒いでいるの？」

状況が飲み込めてないのか困惑顔で訊いてくる。

「そりゃ男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

なんか違和感が……。

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男子なんて今のところ俺達しかいないんだかる？」

「あっ！——ああ、うん。そうだね」

「ちょっと急ぐぞ」

俺は一夏とシャルルを掴む。

「「へ？」」

ライズ全開……。

センスで底上げされた感覚神経で瞬間的なストレングスで女子の間を縫って駆け抜ける。

「到着！」

「す、すげえな……やっぱりアゲハって……」

「何が起こったの？」

ライズは一般の人間がわかるものではないので説明しない。

「俺は夜科アゲハ。アゲハでいいぜ」

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。これからよろしく」

「うん。よろしくアゲハ、一夏。僕のことシャルルでいいよ」

「了解」

「わかった、シャルル」

「あ、一応急げよ。まだ余裕があるかもしれないけど一夏は着るの遅いんだから。じゃあな」

俺は制服のままグラウンドに向かって走り出した。

「遅い！」

バシーン！

「くだらんことを考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

よく響くね。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

セシリアが一夏に絡み始めた。

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

「道が混んでたんだよ」

「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」

だって絶対ウソだもん。間に合うだけの時間があったもの。

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方と縁が多いようですから？　そうでないと二月続けて女性からはたかれましたよね」

「なに？　アンタまたなんかやったの？」

後ろから鈴の声。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？　一夏、アンタなんでそういうバカなの！？」

「——安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ご愁傷様。

バシーン！

本当によく響くな。何でだ？

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍だ。

「くうっ……。 なにかというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

鈴……。

「今日は戦闘を実演してもらおう。 ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 ——凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

完全なとぼっちです。 諦めましょう。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。 いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「お前ら少しはやる気を出せ。——アイツにいいところを見せられるぞ」

なんか言ったな。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

うわっ！ ガラツと変わった！ 何言っただ？

「それで、相手はどちらに？ わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。こっちのセリフ。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

キイイイイン……。

「ああああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

ドカーン！

俺と一夏の上から降ってきたのは山田先生。俺はとっさのライズで回避したが、一夏に衝突した。

うわー、一夏サイテー。先生の胸を掴んでるー。

セシリアと鈴が怒り、一夏に狙撃&投擲で攻撃を仕掛けたが、山田先生に防がれた。

「山田先生はああみえて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔の話ですよ。それに代表候補生どまりでしたし……」

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちなら直ぐに負ける」

負けるといわれたのが癪に障ったのか、二人は再び瞳に闘志をたぎらせていた。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。

「手加減はしませんわ！」

「アタシも手加減は無し！」

「い、行きます！」

「さて、今の間に……そうだな。　ちょうどいい。　デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

「山田先生が使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。　第二世代最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。　現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。　特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様な役割切り替えを両立しています。　装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。　……終わるぞ」

結果論で言うと鈴とセシリアはボロカスに負けた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

了解いたしましたー！　織斑先生！

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。　八人グループになって実習を行う。　各グループリーダーは専用機持ちがやること。　いいな？　では分かれろ。　夜科と雨宮はこっちに来い」

呼ばれた……。なんだろう……。

S i d e
↳ アゲハ
↳ o u t

CALL. 7 ?転校生? (後書き)

新作の「神の子と謳われし男」もよければ見てください。
アンケートの内容です。

朝河飛龍 1

望月朧 2

ヴァン 1

主人公勢すべて 1

です。引き続きアンケートは続きます。 期日は6月15日までで
す。

ご協力お願いしますm ((m

CALL 8 ?実習?

Side アゲハ

「俺たちは何で呼ばれたんですか？」

「ちょっと待て。この馬鹿者どもが…。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声。 あっという間にグループの出来上がり。

「お前はアリーナで雨宮のIS練習に付き合え。同じ境遇のもの同士だ。通ずるところもあるだろう」

「了解」

「わかりました」

俺と桜子はアリーナに移動した。

「桜子、ISを起動してくれ」

「わかった」

光に包まれて白い装甲に包まれた。

「で、私は何をすればいいの？」

「まずは武装はその紅骨だけか？」

「えっと……」

空中投影ディスプレイでスペックを確認する桜子。

「特にないみたい」

「俺が特殊なのか？ 暴王の名を持つ武器があったんだけど」

「ただ、Mシステムっていうのがある」

「Mシステム？」

インサニティサイズ
「凶気の鎌みたいに神経爆弾を付属させたりする能力みたいなんだけど……」

「紅骨だけが武器だから、それを補うためのシステムなんだと思う。普通にPSIが使えるからな」

「え？ そうなの？」

「ああ。現に俺はランスやドアを使えるから」

「へえ……」

「それと俺の気のせいじゃなければ、アビスも呼び出せると思うんだよ。とにかく一回普通にノヴァを使ってみて」

「わかった」

桜子は妖刀《心鬼紅骨》を持ち、P S Iを構成するの4つ目の能力、ノヴァを発動する。
白い煙が発生する。

「ねえアゲハ」

「なんだ？」

「単一仕様能力ってでただけど……」

「このI Sは俺たちのP S IをI S化したものだから、俺と桜子のP S Iの最終奥義のノヴァが単一仕様能力になったのだろう。俺のもそうだし」

使ったことはないけど。 てかノヴァ使って普通の相手と戦ったらたぶん死ぬし。

「ヤッホー☆ アゲハ！」

そこにいたのは褐色の肌の少女。 もう一人の桜子、^{アビス}深淵。 桜子の装甲よりも黒味がかった色の装甲を身に纏っている。

「やっぱり出てきたか。 アビス」

「アタシも桜子って呼んでよ！」

「二人とも桜子じゃねえか。 紛らわしいだらってそんなことして場合じゃない。 とにかく、I Sの能力確認だ」

アビスと桜子の言い方替えないと両方反応するから困る。

「アビス、バーストは使えるか？」

「もちろん！」

背中から漆黒の鎌が二本現れた。

「しかも能力強化もされてるし☆」

さらに4本の鎌が現れた。

「随分と強そうになったな」

「そういうアゲハはどうなのよ」

「俺か？ 俺はこんなんだ」

暴王を起動する。そして、右手にソード、左手にクロウ、背
中からウィングを射出する。

「私達のと違って武装が豊富ね」

「俺のPSI能力だとISの絶対防御も貫くから、それを考慮され
てこれらが作られたんだと思うんだよ」

「暴王は危険だからね……」

「ま、こんな感じだ」

暴王を解除する。

「それとアビス、一般生活では表面に出てくるな」

「え、なんで！？ 桜子だけずるい！ アタシもアゲハといちゃつきたいのに！」

「お前のことを知ってるのは俺だけだし、他のやつがお前が表面に出て桜子の口でしゃべるのを見たら混乱が広まっちゃうからだ。そこは戦闘時まで我慢しろ」

「ちえ。 ツマンナイ」

そうしてアビスは消えた。

「ISの戦闘は基本的PSYREN世界と同じような感じで戦えばいい。俺がそうだから。 まあ殺さないように気をつけてはいるけど」

「わかった。 ありがとう」

桜子はISを解除して、再びグラウンドに戻った。

「では、午前の授業はここまでだ。 午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班ごとに集合すること。 専用機持ちちは訓練機と自機の両方を見るように。 では解散！」

俺達に戻ってしばらくしてから授業が終了した。

「シャルル、着替えに行こうぜ。 俺たちはまたアリーナの更衣室

まで行かないといけないしよ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしていくから、先に行って着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

「ん？ いや、別に待ってても平気だぞ？ 俺は待つのは慣れ——」

「そういうことなら先に行くわ。ということで行くぞ、一夏」

ちなみに桜子とはすでに分かれている。

「え？ いや、待って——」

「行くぞ一夏。鍛える話を白紙にしてもいいんだぞ？」

「いや、それは困る。そういうことだから先に行くな」

「う、うん。わかったよ」

で、屋上。

俺は一夏に誘われてきたわけなんだが、この場の空気が妙に重い。
詳しく言うのなら箒だけ重い。

「……どういうことだ」

「ん？」

今日は俺たち以外誰もいない。

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうでなくてだな……！」

箒はチラッと横を見た。セシリアに鈴、シャルルに俺と桜子。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食ったほうがうまいだろ。それに
シャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

「俺は一夏に誘われたただけだからな」

一応釘を刺しておく。

鈴は酢豚オンリーのタッパーを一夏に渡し、セシリアは必殺料理を一夏に渡す。

『ねえアゲハ……』

『なんだ？』

『セシリアさんの料理って何かあるの？』

『必殺料理だ。見た目はいいんだが、味が残念すぎる。残念なだけならいいがアレはきつと人の命を削ると思う』

『そんなに酷いの？』

『マジでヤバイ。一度食ったけど、意識が飛びかけた』

『注意しないの？』

『それは一夏の仕事だ。俺達が言うだけ無駄だと思う。まあ、とぼっちを受けられないようにしとくことだな』

『わかった』

トランスでの会話終了。

「ええと、本当に僕が同席してもよかったのかな？」

ブロンド貴公子ことシャルルが聞く。　ちなみにシャルルはすごく遠慮深い。

男子争奪戦とばかりに一年一組には大量の女子が押し寄せてきたのだが、さすがは貴公子。　丁重に丁重を重ねた対応で全て断っていた。しかも

『僕のようなものために咲き誇る花の一時を奪うことは出来ません。　こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまいそうなのですから』

こんな恥ずかしすぎるセリフを言っただけだ。　手を握られていた三年生は失神してたし。

そのあとは他の女子もアピールが恥ずかしくなったようで積極的なアピールはしてこなくなった。

「男同士仲良くしようぜ。　わからいことがあったらなんでも聞いてくれ。　―――IS以外で」

「ちなみに俺もISはダメだから」

「アンタらはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。　多すぎるんだよ、覚えることが。　お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろ」

「それに俺と桜子に関してはISつい最近まで知らなかったし」

「「「「え?」」」」

「この話もまた今度話してやるよ。今は飯だ飯」

俺と桜子は手早く食べた。何か嫌な予感がしたから。

そしてその予感の当たり、一夏たちは食べさせあいつこをしたから。セシリアの食べる前に食い終わってよかった。

そして夜。

シャルルは一夏の部屋になった。俺は織斑先生と同室から二人部屋の独占状態だ。

桜子は他の女子と相部屋ではなく、俺と同様に二人部屋を独占しているらしい。これも織斑先生の配慮なんだろう。ありがたやありがたや。

Side アゲハ out

CALL 8

?実習? (後書き)

終わり方はなんか無理矢理な感じがしますが気にしません。

アンケート内容は

朝河飛龍 1

望月朧 2

望月朧 (性転換) 1

ヴァン 1

真名辰夫 1

フレデリカ (10年後) 1

マリー (10年後) 1

主人公勢全員 2

朧が強いですね。

アンケートはまだ続きますので、ご協力お願いします m ()

CALL 9 ?疾風? (前書き)

アンケート結果は最後です。

CALL 9

?疾風?

Side アゲハ

「一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

一夏はシャルルの訓練を受けていた。

シャルルたちが5日が経ち、今日は土曜日。ここは午前は論理学習、午後からは完全にフリー。そして土曜日はアリーナが全解放されるので殆どの生徒が実習に使う。俺は桜子と共にここ最近シャルルを監視している。

『あんまり不自然なところはねえな』

『そうね。ただ……』

『ああ。目の動きが不自然だ』

シャルルから発せられる違和感。この正体が未だにわからない。

俺達がトランスで会話していると一夏がシャルルから借りたライフを撃ち始めていた。

シャルルの専用機は『ラファール・リヴァイブ』。精確には『ラファール・リヴァイブ・カスタム?』。量産機を改造したものだ。聞く話だと基本装備をいくつか外して拡張領域を倍にしたものらしい。まるで火薬庫だ。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

急にアリーナがざわめき始めた。そこにいたのは一夏を叩いた張本人、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「おい」

ISの解放回線で声が飛んでくる。

「……なんだよ」

「貴様も専用機だそうだな。 ならば話が早い。 私と戦え」

「いやだ。 理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある」

一夏とラウラって奴になんか因縁めいたものでもあるのか？ 桜子
に頭の中覗いてもらおうかな？

「貴様がいなければ教官の大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。 だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

織斑先生とも関係があるようだ。

「また今度な」

「ふん。 ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

一夏に向かって実弾砲を発射した。

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。 ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……」

シャルルが割り込み、シールドでラウラの一撃を止めた。

「フランスの第二世代型アンテイクごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルーキーよりは動けるだろうからね」

割り込んだほうがいいのか？

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞いてかけつけた担当教師と思しき声が響く。

「……ふん。 今日引こう」

ラウラはアリーナゲートへと去っていく。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「今日はもうあがろっか。 4時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「おう。そうだな。 あ、銃サンキュ。色々と参考になった」

「それなら良かった。 えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

ここなんだよなあ。 普通じゃないほどに一緒に着替えたがらない。 そういうタイプは珍しくはないが、些か妙だ。

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、いや」

「つれないことを言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「というかどうしてシャルルは俺と着替えたがらないんだ？」

質問返し。

「どうしてって……その、は、恥ずかしいから……」

「慣れれば大丈夫。さあ、一緒に着替えようぜ」

「いや、えっと、えーと……」

この反応が違和感の一つなんだよな……。

「なあ、シャル——」

「嫌がってる相手に無理させないの。わかった？」

桜子、いつの間に!?

「雨宮さん?　なんか怖い……」

「わかった？」

でた!　桜子の黒宮さんモード!

「はい!　わかりました!」

見てみる。見てた奴が少し震えてるぞ。箒も僅かにだが震えてるし。

「一夏行くぞ。シャルルの体が見たいのはわかったから」

「見たくねえよ!」

「じゃあなんで一緒に着替えようと必死なんだ?」

「俺は親睦を深めようと……」

「言い訳は見苦しいぞ。 お前がホモってのは伝わったから」

「言い訳じゃない！ ホモじゃない！」

「ならしつこくしすぎるな。 ここに居辛くなるぞ」

「……わかった」

渋々という感じでついてくる一夏。 マジでホモなのか？

「はー、風呂入りてえ……」

「お前風呂好き？」

「ああ！ 三度の飯に並ぶほど好きだ！」

「あっそ」

「アゲハが訊いてきたよな！？ それでその反応はねえだろ！？」

「あのー、織斑君と夜科君、デュノア君はいますかー？」

「はい？ えーと、織斑と夜科はいます」

声の主は山田先生のようなだ。

「入っても大丈夫ですかー？ まだ着替え中だったりしますー？」

「大丈夫ですよ。 着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

「デュノア君は一緒ではないんですか？　今日は織斑君たちと実習しているって聞いてましたけど」

「あ、まだアリーナの方にはいます。もうピットまで戻ってきたかもしれませんけど、どうかしましたか？　大事な話なら呼んできますけど」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、伝えといてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にする色々問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！」

一夏は山田先生の手を取る。

「……………」

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！」

「い、いえ、仕事ですから……」
セクハラ？

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがとうございます」

「そ、そうですか？　そう言われると照れちゃいますね。　あはは……」

「……一夏、何してるの？」

お、シャルル登場。

「まだ更衣室にいたんだ。　それで、先生の手を握って何してるの？」

「あ、いや。　なんでもない」

一夏は山田先生の手を離す。　セクハラにしか見えないのはなぜだろうか。

「……一夏、先に戻ってっていったよね」

「お、おう。すまん」

言葉に棘がある？　さっきとは大分違うような……

「喜ベシャルル。　今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

やっぱり変だ。

「ああ、そういえば織斑君にはもう一件用事があるんです。　職員室まで来てくれますか？」

「わかりました。――じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使ってくれよ」

「うん。わかった」

「じゃ山田先生、行きましようか」

一夏と山田先生は更衣室を出て行った。
今はシャルルと二人つきり。一つだけ訊いておこう。

「なあシャルル、一つ聞いていいか？」

「なに？」

「お前ってさあ、本当に男？」

「!？　な、何言ってるのかな!？　アゲハは!？」

「いや、ちょっと違和感があったんだよ。始めてあった日からずつと」

「い、違和感？」

「ああ。体は一般男子より小さいってところもあるが、それは大して気になってはないんだよ。たまにお前の反応が変なんだよな。理解できてないっていうか、共感できていないって感じだったり、人に肌を見せたがらない。これが一番でかいけどな。で、どうなんだ？」

「ぼ、僕は男だよ！？　な、何言ってるのかな！？　アゲハは！？
冗談きついなあ」

「その反応だ。明らかに動揺しすぎ。嘘バレバレ。シャルル、
本当は女だろ？　しかも無理してしてるだろ」

「……………僕の負け。　そうだよ。僕はアゲハが言うように女だ
よ」

「やっぱりな……。　じゃ、俺行くから」

「え？　理由聞かないの？」

「言っただろ？　一つだけ聞いていいかって。　話したくなれば言っ
てくれ。　そのときは桜子も一緒だけだな」

「雨宮さんも？」

「ああ。　アイツも違和感はあるようだ。　ま、俺たちは言いふら
す気はないんで。　じゃあな」

俺は更衣室を後にした。

S i d e ー アゲハ ー o u t

CALL 9 ?疾風? (後書き)

シャルルの正体をばらしました。 なんか無理矢理な気がします。

では、アンケート結果です。

朝河飛龍 2

望月朧 3

望月朧 (性転換) 1

ヴァン 1

真名辰夫 1

フレデリカ (10年後) 1

マリー (10年後) 1

主人公勢全員 4

八雲祭 1

電堂影虎 2

師匠S (祭、影虎ペア) 1

天樹院エルモア・ウッド 1

です。

結果的には主人公勢全員と朧ですね。 以外に影虎さんも強かったです。

主人公勢全員となるとPSYRENドリフトの飛龍、朧、兜ですかね? それともエルモア・ウッドもですかね?

それによって全員になるかは変わります。

今回のアンケートで、朧は出る確率上昇。

出て欲しいキャラがあれば感想に。 最大限努力します。

最後に、アンケートありがとうございます!

CALL. 10

? 疾風の真実?

Side ～一夏～

「一夏にもうばれたのか」

俺はシャルルに頼まれアゲハを呼んできた。
うだった。

すでにばれていたよ

「う、うん……」

「で、話す気になったと」

「うん……」

「お邪魔します」

「来たか」

「……なあアゲハ」

「なに？」

「いつの間に連絡したんだ？」

「お前に呼ばれたとき」

「どうやって連絡したんだよ……」

携帯とか使ってなかったよな？

「それもまた今度。で、揃ったところで話してくれない？」

「う、うん」

「じゃあシャルル。何で男のフリなんてしていたんだ？」

「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」

「うん？ 実家って言うのと、デュノア社の――」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

なんか変だ……。特に実家のことを話し始めたときから。

「命令って……親だろう？ なんでそんな――」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

俺は絶句した。『愛人の子』の意味がわからないほど世間に疎くはない。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でISの適応が高いことがわかって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットやることになってね」

きつと言いたくないはないことを話してくれるシャルル。

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本低に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。本妻に人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が!』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれてたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

愛想笑いをするシャルル。俺はなぜだかわからない怒りが沸々と湧いてきて、それをこらえるために拳をきつく握り締めた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え? だってデュノア社って量産機ISのシェアが世界第三位だろ?」

「一夏、デュノア社のリヴァイヴは結局第二世代型のISなんだよ。

IS開発は物凄くお金がかかって、ほとんどの企業は国からの支援があつてやっと成り立っているところばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの国防のためもあるけど、資本金で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

前にセシリアがなんか言ってたっけ。

「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「注目を浴びるための広告塔ってところね」

「そうだよ。それに同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取ってこいって」

「それは、つまり――」

「そう、白式と暴王のデータを盗んで来いって言われているんだよ。僕は、あの人にね」

話を聞く限り、シャルルの父親は一方的にシャルルを利用してるだけだ。

「とまあ、そんなところかな。でもばれちゃったからきつと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社はまあ、……僕にはどうでもいいことかな」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘ついてごめんね」

深々と頭を下げるシャルルを、気づいたら俺は肩を掴んで顔を上げさせていた。

「いいのか、それで」

「え……？」

「それでいいのか？ いいはずないだろ。親が何だっていうんだ。どうして親だからってだけで自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなこもんは！」

「い、一夏……？」

言葉が止まらない。　なにより、感情が抑えられない。

「親がいなければ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

言いながら気づいた。　きっとシャルルのことを言ってるんじゃない。たぶん自分のことを言ってるんだ。

「ど、どうしたの？　一夏、変だよ？」

「あ、ああ……悪い。　つい熱くなってしまっ」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は——俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

「……………」

おそらくは資料で知っているであろう『両親不在』の意味を理解し

たらしく、シャルルは申し訳無さそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしなくてもいい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に親なんて今更会いたいとは思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって……時間の問題じゃないのかな。フランス政府も事の真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないのかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

「……だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

暗記していたテキストの文が気持ち悪いほどにすらすらと言えた。

「——つまり、この学園にいれば、少なくとも3年間は大丈夫だろう？ それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけれられる。別に急ぐ必要もないだろ」

「一夏」

「よく覚えられたね。 特記事項って五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。 ふふっ」

やっとシャルルが笑った。

「ま、まあ、とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えてみてくれ」

「うん。 そうするよ」

コンコン。

「「!」?」

「一夏さん、いらっしゃいます? 夕飯をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか?」

いきなりのノックと呼び声に俺とシャルルは身をすくめた。

「一夏さん? 入りますわよ?」

まずい。 まずいまずい、それはとてもまずい。 今のシャルルの姿を見たらどんなに鈍い奴でも女とわかってしまう。

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえず隠れろ」

「とりあえず布団の中にでも隠れたら？」

「あ、ああつ、そっか！」

雨宮さんのおかげで事なきを得た。

「よ、ようセシリア！　なんだ？　どうした？」

「一夏さんはまだ夕食をとっていないようでしたので、ご一緒しようかと思ひまして。偶然わたくしもまだでしたので」

「そ、そうか。　シャルルは具合が悪いみたいで、俺が看ていたんだ。飯がまだだからアゲハに頼んでシャルルを看てもらって、その間に夕飯を食べに行こうと思っていたんだ」

「そういうこと。　ごゆっくり」

「お、おう。　悪いな」

「デュノアさん、お大事に。　さあ一夏さん、参りましょう」

俺は腕をとられ、部屋を出た。

Side 一夏 out

Side アゲハ

一夏は部屋を出て行った。 後にくように部屋を出た。 そして
現在俺の部屋。

「ふざけやがって……！」

「よく耐えたわね」

「ああ。 この世界にもあんな馬鹿がいたなんてな。 人の命を何
だと思ってやがる……！」

俺はシャルルの父親に殺意が湧いてくる。 シャルルが話している
ときから殺意が湧いていたが、シャルルと一夏には今の俺を見せる
わけにもいかないので、ずっと我慢していた。

「グリゴリほどではないけど、許せないわね」

「ああ。 あれじゃあシャルルが可愛そうだ……」

俺は一つ思いついた。

「なあ、桜子」

「なに？」

「――――」

「！？ アゲハらしいわね」

俺たちの行動が始まった。

S i d e ｝ アゲハ ｝ o u t

CAL. 10

? 疾風の真実? (後書き)

シャルの正体が一夏にもばれました。 ばらしました。
アゲハが何か企んでますが、その真実は次回です。
感想等、お願いしますm () m

CALL 11 ? 黒の襲撃? (前書き)

今回はアゲハの登場回数が少ないです。

CALL. 11

?黒の襲撃?

Side 一夏

今日の朝のニュースにとんでもないことが流れていた。それは『謎の襲撃? デュノア社半壊!?』と言うものだった。とにかく驚いた。俺とシャルルは全然理解できなかった。

それともう一つ、学園で何かが噂されている。

「そ、それは本当ですよ!」

「う、ウソはついてないでしょうね!」

廊下まで聞こえる声に目をしばたたかせた。

「今日はなんなんだ?」

「さ、さあ?」

隣にいるのはシャルル(男装)である。

「本当だってば! この噂、学園中で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき――」

「俺がどうしたって?」

「」「きゃああっ!」「」

「で、何の話だったんだ？ 俺の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？ そうだったかしら？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんと」

女子たちが散っていった。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

それに話題になっていそうなデュノア社について殆ど口にしていなかった。シャルルに気を使ってなのか、それとも別の理由なのかこれまたさっぱりだ。

「おっす……」

「おっす。 アゲハ」

「大丈夫？ すごく辛そうだけど……」

「寝不足。 睡眠時間が1時間って……」

「何してたんだよ」

「秘密。 最悪俺、途中で保健室に行くかも……」

「お大事に」

「ああ……」

ホント大丈夫か？ ふらついてるし。

案の定、アゲハは授業の途中で体調を崩し、保健室に行った。 愁傷様。

「はー。 この距離だけはどうにもならないな……」

学園内に男子が使えるトイレが三箇所しかないという現状。 授業終わりと同時に中距離走の始まり、帰りも全力疾走しないと間に合わない。

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ……」

声の主は、千冬姉とラウラの声だった。その声を頼りに近づく。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

二人の姿を見つけて姿を隠す。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう？」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません
ん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど——」

「———そこまでしておけよ、小娘」

「っ………！」

凄みのある千冬姉の声。　さすがのラウラもその声に黙ってしまった。

「少し見ない間に偉くなったな。　十五歳で既に選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

その声が震えているのがここからでも分かる。　恐怖、なのだろう。　圧倒的力を前にした恐怖。　かけがえのない相手に嫌われる恐怖。

「さて、授業が始まるな。　さっさと教室に戻れよ」

「……………」

千冬姉はラウラを急かす。　あ、まずい。

「その男子二人。　盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよ！　千冬ね——」

ばしーん！

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……」

「それに夜科。　お前は早く保健室に戻れ」

そういえば二人って言ってたな。　隣を見るとまだふらふらのアゲ

ハがいた。

「だ、大丈夫か？　ってか何でこんなところに……」

「トイレ」

「あー……」

「そら、走れ劣等生。　このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。　勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。　それならいい」

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう。　急げよ。　——ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな。　……とは言わん。　ばれないように走れ」

「了解」

俺はばれないようにダッシュした。　……アゲハ、さっきよりはマシだったけど、大丈夫か？

Side ～ 夏 ～ out

S i d e 〉 アゲハ 〉

睡眠時間1時間はマジでキツイ。

そうなった理由は俺自身にあるんだけど……。

今朝ニュースになっていた『デュノア社襲撃事件』を起こしたのは俺と桜子だ。

シャルルの真実を聞いてから、みんなが寝ている時間に俺と桜子はISを使ってフランス、デュノア社まで飛び、桜子のMシステムで監視カメラや人の目すべてに偽りの真実を見せ、俺が半壊させた。

死者はいないらしい。ISのセンサーで確認したから確かだと思うけど、それが真実とは限らないからだ。まあ、負傷者はいるだろうけど。

で、俺と桜子がIS学園に戻ってきたのは今朝の5時頃。

桜子はPSYREN世界で何度か不眠戦闘が合ったらしいのでなんとか持ちこたえていた。が、俺は暴王を使いすぎたせいもあるのか、1時間の睡眠では回復しなかった。おかげで今は保健室のお世話になっているんだが……。

で、トイレのために保健室を抜け出したのだが、そこでラウラと織斑先生の会話を聞いた。なんとなく一夏を目の敵にする理由がわかった気がした。

S i d e 〉 アゲハ 〉 o u t

Side（一夏）

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」

「第三アリーナだ」

「「わあっ!？」」

そこにいたのは箒だった。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことのでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているのではないが……」

頭を下げるシャルルに、氣勢を削がれたようだ。

「ともかく、だ。第三アリーナへ向かうぞ。今日は使用人数が
少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦もできるだろう」

そこで異変に気づく。さっきから廊下を走っている生徒がいる。
どうやら騒ぎは第三アリーナで起きているらしい。

「なんだ？」

「何かあったのかな？　こっちで先に様子を見ていく？」

観客席へのゲートか。確かに普通にピットに入るよりも早く様子を見ることができそうだ。

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。でもそれにしては様子が――」

ドゴンッ！

「「「！？」」」

突然の爆音。そしてそこにいたのは

「鈴！　セシリア！」

ラウラ・ボーデヴィツヒが鈴とセシリアを圧倒していた。そして、二人のISはかなりダメージを受けているようだった。

「何をしているんだ？　――お、おい！」

一方的な暴虐が始まり、

「ああああっ！」

シールドエネルギーはあっという間に減って、機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域へと到達する。これ以上ダメージが増加しISが強制解除されることがあれば、そのときは冗談ではなく生命に関わる。しかしラウラは攻撃の手を止めない。

普段と変わらない無表情が確かな愉悦に口元を歪めたのを見た瞬間、

頭の中で何かのゲージが振り切れた。

「おおおおっ！」

白式を展開し、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動させ、アリーナのバリアーを切り裂いた。

同時に瞬時加速を使い、ラウラへ突撃する。

「その手を離せ！！！」

「ふん……感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

零落白夜のエネルギー刃が届く寸前で、びたつと俺の体が止まる。

「な、なんだ！？　くそっ、体が……！」

目に見えない腕につかまれているかのように、体が言うことを聞かない。

「やはり敵ではないな。　この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない。　——消えろ」

肩の大型カノンの砲口が俺に向けられる。

「一夏っ、離れて！」

シャルルからのプライベートチャンネルが聞こえ、同時にアサルトライフル二丁での弾雨が降り注ぐ。

「ちっ……。　雑魚が……」

それまだ俺を拘束していた何かが消え、体の自由が戻ってくる。
俺はすぐさま、ラウラが離れた鈴とセシリアの元に飛び込み、二人を抱きかかえ、瞬時加速でラウラから離れた。

「一夏、二人は!？」

俺のカバーにシャルルが入り、訊きながらもラウラを射撃し続けている。

「う……。一夏……」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。……シャルル、大丈夫だ。二人とも何とか意識はある」

「よかった」

僅かに安堵した声で答えるシャルルだが、その手は一切休まることがない。

「面白い。世代差というものを見せつけてやろう」

弾丸を避け、あるいは防ぎ、さらに例の目に見えない力で止めていたラウラが、反撃に転じようと体を低くかがめる。俺は鈴とセシリアを抱えたまままで戦えない。しかし、このままシャルルだけにラウラを任せるのは危険すぎる。

「行くぞ……!」

「くっ！」

ラウラが飛び出そうとしたその瞬間、俺たちの間に影が割り込んできた。

ガキンッ！

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!？」

その影は予想外の人物だった。しかもその姿は普段と同じスーツ姿で、ISの補助無しでIS用近接ブレードを扱っていた。

「模擬戦をやるのは構わん。——が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ」

あまりのことに惚けていたせいもあって、ついついで素で答えてしまふ。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません」

俺とシャルルの声を聞いて、千冬姉は改めてアリーナないすべての生徒に向けていった。

「では、学年別トーナメントまで私闘を一切を禁止する。解散！」

パンッ！と千冬姉が強く手を叩く。それはまるで銃声のように響いた。

Side ～ 夏 ～ out

CALL. 11

?黒の襲撃?(後書き)

アゲハたちはとんでもない事をしました。 しかも犯人はバレてません。

ライズ使えばもっと早くに回復できたのでは?と思うが、これはアゲハのサボりです。

では、次回。

C A L L . 1 2

?ペアと怪我? (前書き)

本日二話目です。

CAL. 12

?ペアと怪我?

Side アゲハ

「なあ」

「……………」

「……………」

鈴とセシリアが運び込まれてから一時間ほど経っている。
ベットの上では鈴とセシリアが視線をあらぬ方向へと向けていた。

「いい加減説明してくんない？」

「別に助けられなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「無視か？」

運び込まれてから、何も教えてくれない。 何があったか教えてく
れてもいいのに……。

「お前らなあ……。 はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて
安心したぜ」

「こんなのけがのうちに入らな——いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味——っとうっ！」

ボコボコにされたのはわかった。

「バカってなによバカって！ バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

かなりの怪我だと思うんだが、元気だな。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「「ん？」」

シャルルが登場。シャルルを見た瞬間に体が強張ったのは、俺の
みを知る。バレたらアウト。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ こここ
ここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！ そ、そういう邪推をされるといさ
さか気分を害しますわねっ！」

二人は顔が赤くなっている。もしかしてアレか。一夏が好きな
のか。

（雨宮さんのおかげで少しは鈍感がマシになったアゲハです。by
黒翼）

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたきましようっ！」

ひったくるように受け取って、ごくごく飲み干した。

「ま、先生も落ち着いたら帰ってもいいって言ってるし、しばらく休んだら——」

ドドドドドドッ……！

「な、なんだ？ 何の音だ？」

「地震？」

しかもだんだん近づいているような……。

ドカーン！と保健室の扉が吹き飛んだ。 扉が飛ぶなんて現実でありえたんだ。

「織斑君！」

「夜科君！」

「デュノア君！」

女子の大群が保健室に雪崩れ込んできた。 俺たちを見つけるなり手を伸ばしてきた。 ちよつと怖いけど。 手、手、手……。 軽いホラーだ。

「な、な、なんなんだ!？」

「ドッキリ？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「」「これ!」「」

女子の大群が出してきたのは出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書のようなものだ。

「な。 なになに……?」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。 なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。 締め切りは』――」

「ああ、そこまでいいから! とにかくっ!」

そして一斉に伸びてくる手。 だから怖いって。

「私と組もう、織斑君!」

「私と組みましょう、夜科君!」

「私と組んで、デュノア君!」

つまり、俺たち男子（一人を除く）とペアになろうと一年の女子た

ちが集結したのか。それなら

「俺は桜子と組むから」

この手以外ありえない。

「だよね」

「夜科君はやっぱり雨宮さんと組むよね」

「ということで、私と組んで、織斑君！」

「私と組みましょう、デュノア君！」

「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

だよな。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりかはいいし……」

「男同士って絵になるし……ごほんごほん」

とりあえず納得したようで、女子たちは保健室を去っていく。

「ふう……」

「あ、あの、一夏——」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

鈴とセシリアが一夏に飛び出した。

「あ、あたしと組みなさいよ！ 幼馴染でしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

こいつら怪我人だよな？

「ダメですよ」

山田先生の登場。

「お二人のISの状態をさっき確認しましたがけど、ダメージレベルがCを超えています。 当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。 ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ、ぐっ……！ わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……」

あっさりと引き下がったもんだな。

「わかってくれて先生嬉しいです。 ISに無理をさせるとそのツケはいつか自分で支払うことになりますからね。 肝心なところで

チャンスを失うのは、とても残念なことです。　あなたたちには
そうなってほしくありません」

「はい……」

「わかっていますわ……」

渋々引いたようだ。

「一夏、アゲハ、IS基本理論の蓄積経験についての注意事項第三
だよ」

えーと。　あ、アレか。

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進
化した状態へと自ら移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼動
も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、
その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうた
め、それらは逆に平時での稼動に悪影響を及ぼすことがある』」

「おお、それだ！　さすがはシャルル！」

俺でも何とか思いついたぞ。　結構危なかったけど。

「いい加減説明してくんない？　なんでこいつらは怪我してんの？」

「何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

あー。　あの眼帯娘にボコられたのか。　なんか納得。

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「？ ふうん？」

一夏のことでも言われたのか？

「ああ。もしかして一夏のことを――」

「あああっ！ デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！ まったくです！ おほほほほ！」

あ、当たった？

「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさっきから怪我人のくせに体を動かすすぎだぞ。ホレ」

一夏は怪我人の方を指でつつく。

「「ぴぐっ！」」

変な声だな（笑）。

「……………」

「……………」

「あ……すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

思いつきり睨んでるし（笑）。

「い、い、いちかあ……あんたねえ……」

「あ、あと、で……おぼえてらっしゃい……」

面白いことになったな（笑）。

俺はそれからしばらくして自分の部屋に戻った。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

CAL. 12 ?ペアと怪我? (後書き)

何も無いときは二話投稿できそうです。
感想等、お願いします。

CALL 13

?学年別トーナメント?

Side アゲハ

6月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見ると、そこには各国政府関係者、研究書院、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「「ふーん、ご苦労なことだ」」

俺と一夏の声がハモった。

「一夏はボーデヴィツヒさんとの対決だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「ボーデヴィツヒって強いのか？」

「ああ。あのときいなかったから知らないと思うけど、鈴とセシリアが二人掛でも勝てなかった相手だ」

「あっそ」

だからあそこまでボロボロだったのか。あの二人が弱いのかボーデヴィツヒが強すぎるのか……。

「あまり感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では現時点での最強だと思うから」

「いや、最強はアゲハだ」

え、俺？

「え？ アゲハ？」

「そういえば見たことなかったっけ？」

「見たことないよ」

「アゲハのISは能力は俺の零落白夜に似ていて、実際には零落白夜を上回る」

「まあ、暴王の性質だな」

「そ、そうなんだ……」

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

突然のペア対戦への変更がされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。

本来なら前日にはできるはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選くじで作っていた。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。

「「「……え？」」」

出てきた文字に一夏とシャルルはポカンとした声をあげた。

「悪いな、一夏。お前の望みはなくなったわ」

「ああ。勝ってこい」

「当たり前！」

なぜなら、俺たちの一回戦の相手がラウラ・ボーデヴィツヒと箒のペアだったからだ。

「さて、やろうぜ」

「雑魚が。粹がるな」

試合開始まであと五秒。 四，三，二，一、——開始。

「叩きのめす」

「返り討ちだ」

開始してすぐに俺と桜子は別れる。

俺がラウラを引き付けている間に、桜子が先に箒を倒して、二人でラウラをボコるという作戦だ。

「ウィング！」

俺は暴王の翼を射出する。自動で無差別攻撃をしてくれる便利な装備だが、『翼』をすべて射出すると、素早く動けなくなるのが欠点だ。それでも、一夏くらいの速度は出せるのだけど。

「くっ……！ 邪魔な……」

ラウラのみを指定したので、ラウラのIS『シュバルツエア・レーゲン』を連続で攻撃し、シールドエネルギーを喰らっていく。

「ウィングだけに気を取られてるんじゃないやねえよ！」

ラウラに接近し、暴王の爪で切り裂くが、ギリギリのところ回避された。

「チッ。やるじゃねえか」

「貴様もな！」

暴王の牙を呼び出す。

「俺のISはすべてを喰らい尽くす。お前も暴王の餌になつてもらうぜ！」

ノリで言ってみた。

「笑わせるな。私をなめるな！」

プラズマ手刀で俺に攻撃を仕掛けてくる。

「無駄だ。俺のIS『暴王』はすべてのエネルギーを喰らう。そんな攻撃、俺には通用しねえ！」

ソードで相対し、プラズマ手刀の上からエネルギーを喰らっていく。

「!? チッ！」

ラウラはそのまま後ろへ後退する。

「ふざけたISだ。だが、負けるわけにはいかん！」

大型レール砲を撃つが、回避する。

「さて、これで俺たちの勝ちが決まったな」

「なに？」

なぜなら、箒は桜子にやられ、俺と合流したからだ。

「お待たせ、アゲハ」

「やるぞ、桜子」

「ええ」

俺はすべての暴王兵器を一度収納し、再度ソードを展開する。

「エネルギーの補給は完了した。終わらせる」

桜子がラウラに向かって飛び、心鬼紅骨で斬るが、プラズマ手刀で防がれる。そして、ワイヤブレードで攻撃を仕掛けてきた。が、ラウラの攻撃はなにもない方向へ向けられていた。桜子のMシステムで心鬼紅骨に付属された神経爆弾により、今のラウラには幻覚が見えているはずだ。

「お前が見ているのは幻。今からの攻撃は、すべて現実だ」

俺はソードを持ち、桜子は心鬼紅骨を構える。そして、同時に動き出し、同時に斬る。

「ぐあっ！」

「「終わりだ（よ）！」」

そして、止めの一撃を入れようとしたとき、変化は起こった。

「ああああああっ！！！！！！」

ラウラが叫びをあげた。

S
i
d
e
↪
ア
ゲ
ハ
↪
o
u
t

CAL. 13 ?学年別トーナメント? (後書き)

これはもう完全にアゲハ無双ですね。

ラウラがボコボコです。 初心者のアゲハが圧倒です。 アゲハ最強です。

これでいいのだろうか……?

CALL. 14

? 終幕?

Side ヽラウラヽ

(こんな……こんなところで負けるのか、私は……!)

確かに相手の力量を見誤った。それは認める。

(しかし、負けるわけにはいかない……)

嘗ての私に『出来損ない』の烙印があったとき、織斑千冬のおかげで、深い闇から救われた。

その強くて凛々しいあの人に汚点を与えた織斑一夏が憎い。奴を倒すまで、負けるわけにはいかない。

(だから、敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると!)

あの男は、まだ動いている。徹底的に壊さなくてはならない。私の手で、こんなところで負けてたまるか! そのために――

(力が、欲しい)

ドクン……

『――願うか……? 汝、自らの変革を望むか……? より強い力を欲するか……?』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、私など

——空っぽの私など、何から何までくれてやる！

（だから、力を……比類なき最強を、唯一無二の絶対を——私によこせ！）

D a m a g e L e v e l……D.

M i n d C o n d i t i o n……U p l i f t.

C e n t i f i c a t i o n……C l e a r.

《V a l k y r i e T r a c e S y s t e m》……b o o t.

S i d e　ラウラ　out

S i d e　アゲハ

「ああああああっ！！！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。それと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい雷撃が放たれた。

「……どういふことだよ。　ISは普通はそんなふうに変化しねえんだろ……？」

目の前で起きていることは、ラウラのISがどろどろと溶け、ラウラの全身を覆い、変化が終わったときに立っていたのは、黒い全身装甲のISに似たものだった。

「桜子、やるぞ」

「ええ」

俺はソードを構える。そして、ウィングを広げ、最大速度で飛び、黒に斬りかかる。が、鋭い太刀筋で弾かれる。

「コイツ、かなり強い……」

もう一度斬りかかろうとした時、一夏の声が聞こえた。

『離せ！ あいつ、ふざけやがって！ あれは千冬姉だけのものなんだ！ 絶対許さねえ！』

あの太刀筋は織斑先生のものらしい。

「どうする？ 桜子」

「私達が決めることではないわ。 あの子がけじめをつけるべきだわ」

「……だな」

やっぱ桜子はわかってる。

「一夏、コイツはお前がケリつけろ！」

「恩にきるぜ、アゲハ！」

一夏は白式を展開して、俺たちの隣に降り立つ。

「俺たちはなにもしない。お前の手で、すべてを終わらせろ」

「ああ。行くぞ白式。零落白夜、発動」

一夏は右手に握られた《雪片式型》を強く握り締める。そして、変化が訪れる。
本来の実体刃は、日本刀の形をした零落白夜のエネルギー刃になった。

「……………」

ギンッ！

「ただの真似事だ」

腰から抜き放たれた横一闪、すぐに頭上に構え、縦に真っ直ぐに相手を切り裂く。

「ぎ、ぎ……ガ……」

真っ二つに割れたISからラウラが現れた。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏は崩れかかるラウラを抱きかかえて、呟いた。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

S i d e 一夏

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、すべての一回戦は行います。場所と日時の変更は各人端末で確認の上――』

俺は海鮮塩ラーメンを食べながら聞いていた。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、一夏、七味とって」

「はいよ」

「ありがと」

「桜子、塩とって」

「はい」

「サンキュ」

隣ではアゲハたち当事者ものんびりと食事をしていた。

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理が上手くて幸せだ。……ん？」

「どした？ 一夏」

「いや、女子がなぜかすごく落胆していてだな……」

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

女子たちが泣きながら走り去っていった。

「どうしたんだろうね？」

「「さあ……？」」

俺たち男子陣（一人例外）はちんぷんかんぷんだ。

「……………」

女子が立ち去った後に、一人呆然と箒が立ちつくしていた。
ひとまず俺は箒のそばへと移動する。

「そういえば箒。先月の約束だが――」

「びくっ」

ちょっと反応した。

「付き合ってもいいぞ」

「――。――、なに？」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ!？」

突然、バネじかけのように大きく動いた箒は、身長差を俺をお構いなしに締め上げる。

「ほ、ほ、本当、か？　本当に、本当に、本当なのだな!？」

何回本当を繰り返すんだ、コイツは。

「お、おう」

「な、なぜだ？　り、理由を聞こうではないか……」

俺を離し、腕組みをする。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。　付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「……………」

びきいっ！　と箒の表情が強張る。

「……………」

「お、おう？」

かなり怖い顔の箒さん。

「そんなことだろうと思ったわ！」

どげしっ!!

「ぐはあっ！」

腰のひねりを加えた正拳。

「ふん！」

どごおっ！　とうめく俺の鳩尾につま先が刺さる。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

俺はその場に崩れ落ちる。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「な、なに？　どういう意味だ、それは」

「さあね」

シャルルは視線を逸らし、アゲハは爆笑していた。
俺が回復したのは十五分後だった。

「あ、織斑君にデュノア君、夜科君。ここにいましたか。さっきはお疲れ様でした」

「大丈夫です」

「そうですか。それよりも、朗報です！」

グッと山田先生が両こぶしを握り締めてのガッツポーズ。胸の膨らみが揺れる。眼福なんだが目の毒だ。

「なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！ そうなんですか！？ てっきりもう来月からになるものとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があつたので、元々生徒たちが使えない日なんです。でも点検はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

なんとということだ！ 素晴らしい！

「ありがとうございます、山田先生！」

「あ、俺用あるからパス」

なぬ？ アゲハ、風呂に入らないだと？

「一夏、いい加減先生の手を離しなよ」

おっと、つい感激のあまり先生の手を握ったままだった。

「と、ともかくですね。夜科君は残念ですが、二人は早速お風呂にどうぞ。今日の疲れも形まで浸かって百数えたら疲労もスッキリ！ですよ」

「はい！　じゃあ早速、お風呂に――あ」

あることに気づいた。アゲハは風呂に入らない。二人つきり。つまり、俺とシャルルだ。非常にまずい。そういうことか。アゲハめ、逃げおったな！

「え、えーと……」

「どうしたんですか？　ほらほら、ふたりともはやく着替えを取りに行ってください。鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますね。じゃあ」

どうしたらいいものか……。

Side　一夏　out

Side　アゲハ

「ドンマイ」

「逃げたな、アゲハ……」

「じゃねえと桜子に殺される」

特にアビスの方に。

「ま、がんばって」

俺は一夏たちと別れて、屋上に行った。そして空を見上げる。

「綺麗な星だ」

都会なのに、空に星が瞬いている。

「アゲハ」

「ん、桜子か。どうした？」

「私がこの世界に来て、まだ大きな事件が起こってないけど、私が来る前に何かあったか聞いたことがないと思ってね」

「そういえばそうだな。桜子に来る前にあったのは一度だけ。PSYREN世界のドルキにここが襲撃された」

「ドルキ!? あの爆塵者の？」

「ああ。あのドルキだ。ただ、女だったけどな」

「あのドルキが女? 傑作ね」

「あれには驚いた。でもまあ、俺が撃退したから事なきを得たんだけどな。結局逃げられたけど」

「逃げられた? 追わなかったの?」

「瞬間移動されたんだよ。おそらく仲間のテレポーターの能力によってたな」

「まさかシャイナ？」

「わからない。ドルキはランスが貫いているときに忽然と消えたから、誰の能力かはわかっていない」

「この世界にもいるかもしれないのね」

「ああ。もしかしたらクアト ネヴァスと共にいるのかもな。気をつけておかねえとな」

この世界にもいるのなら、俺は再び道に戻す、それだけだ。

「W・I・S・E……」

俺の眩きは虚空へと消えた。

Side アゲハ out

CALL. 14 ?終幕? (後書き)

もしもの可能性を入れました。
感想等、お願いします。

Side アゲハ

翌日、朝のホームルームにシャルルとラウラの姿がなかった。ラウラはともかく、シャルルがいないのが謎だ。もしかしてデュノア社襲撃の犯人が俺たちということがバレて、部屋に閉じこもってしまったのか? それならかなりやばいことになる。桜子がマインドコントロール失敗するとは思えないし、この世界でPSI扱えるのは俺たち二人だけなはずだから、PSI洗脳を解ける奴なんて存在しないはずだ。うーん、なぜだ?

「み、みなさん、おはようございます……」

ふらふらの山田先生。 どうしたのだろうか……いや、ばれてしまったのか?

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。 転校生といますか、すでに紹介は済んでいるといえますか、ええと……」

今月二人も来たのにまだ来るの?

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

あれ? この声って

「シャルロット・デュノアです。 皆さん、改めてよろしくお願

します」

スカート姿のシャルル——もといシャルロットが挨拶をする。
転校生じゃなくて転校性か。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。　ということです。
はああ……また寮の部屋割りを組み直す作業が始まります……」

ご苦労様です！

「え？　デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは——」

「ちょっと待って！　昨日って確か男子が大浴場使ったわよね！？」

ザワザワザワッ！　あっという間にクラスは喧騒に包まれる。

バシーン！

教室のドアがすごい勢いで開く。

「一夏あっ……！」

甲龍を纏った鈴が登場した。

「死ね……！」

両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

一夏、死ぬんじゃない？

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

鈴は怒りのあまりでか肩で息をしていた。

そして一夏は生きている。それはなぜか。　ラウラがISを展開して間に割って入って衝撃砲を防いだのだ。

「助かったぜ、サンキュ。　……っていうかお前のISもう直ったのか？　すごいな」

「……コアはかろうじて無事だったからな。　予備パーツで組み直した」

「へー。　そうなん——むぐっ!？」

ここで一夏の声は途切れた。
なぜかって？　ラウラが一夏にキスをしたからです。

「!?!?!?!?!?!」

その場の全員があんぐりしている。　俺と桜子を除いて。　俺も驚いたよ？

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……嫁？婿じゃなくて？」

俺も思ったことだ。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。ゆえに、お前を私の嫁にする」

誰だ。日本のオタク文化を教えた奴は。

「アンタねえええっ！！！」

再び衝撃砲が開く。

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってんでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い！！！」

すごい理屈だな。

一夏は教室の後ろ側出口から脱出をしようとした。が――

ビシュンッ――！！

「ああ、一夏さん？どこかにおでかけですか？わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

セシリアのレーザーが一夏の鼻先をかすめました。次に一夏は窓からの脱出を試みたが、

ダンッ！

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！ 説明を求めたいのは俺の方で——おわあっ！
？」

箒が刀を持って一夏に斬りかかりました。 本当に一夏死ぬんじゃないか？

「ほへ？」

一夏はシャルロットとぶつかりました。

「にこっ」

「に、にこっ」

うわああ。 大変だな、一夏……

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。 僕、びっくりしたな」

「あのー……シャルロットさん？ 俺はされたんであって、したわけではないし、そしてなぜISを起動させているのか」

「なんでだろうね」

シャルロットは武器を呼び出さない。 アレが噂に聞く（どんなだ）
第二世代型IS最強の武器、六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻^{グレイ・スケール}》

《か。 通称『シールド・ピアース盾殺し』と言うらしい。

「は、はは、ははは……」

一夏は笑っていた。

ドカアアアアンツ!!!

朝のホームルームは轟音と爆音、衝撃でクラスが揺れました。

「一夏、よく生きてたな」

「俺もそう思う……」

今は実習のために移動していた。隣で一夏は既に疲労困憊だった。

「がんばれよ一夏。遅れたらマジで死ぬかもよ？」

「……嘘だと笑い飛ばせない俺が憎い……」

「そう落ち込むな。速く着替えてくれれば俺が運んでいくからさ」

「助かるアゲハ……」

一夏はのそのそと着替えた。

「じゃ、行くぜ」

「お、おう……」

ライズ！

「ヒャッホォウ！！」

相変わらずこの速さで走れるのはいいな。時間短縮ができる。

「到着！」

「サンキュ、アゲハ。助かったぜ……」

「おう。並ぶぞ」

「あ、ああ」

俺は列に並ぶ。

「今日はまず、夜科、雨宮、前に出る」

「はい？」

俺はとりあえず前に出る。

「この二人に模擬戦をしてもらう」

「織斑先生、なぜ私とアゲハなのでしょう？」

「お前たちは初心者であるのに学年トップの実力を持つ。レベルの高い戦闘はためになるのだな。それでお前たちに模擬戦をしてもらう」

桜子とはあまりやりたくないんだよね……。

「わかりました」

桜子がいいならいいや。

「了解」

俺と桜子はISを展開する。

「では、はじめ！」

同時に飛翔し、互いに武器を展開し、鏖迫り合いになる。

「俺にMシステムは効かない。　どうする？」

「ずっとあなたと戦ってきたもの。　やるようにやるわ」

「桜子らしいな」

俺はソード、ウィングを二機飛ばす——四機とも飛ばすとライズを加えた桜子の速度に追いつけなくなるから——。

そして三分後に異変は起こった。

俺たちの頭上に、またしてもネメシスQが姿を現した。

『久しぶりだな、二人とも』

『またか。　今度もまたなのか？』

『そうだ。　今回は3人だ』

『はああ！？』

『誰を飛ばしてくるの？』

『すぐにわかるさ』

そしてネメシスQは消えた。

そして空を見上げる。

見えたのは三人の男だった。

「ぎゃあああああ！」

「カブト!？」

一人は落下と同時に悲鳴を上げていたので、声でわかった。一人は霧崎兜。きりぎりすのかぶと PSYREN世界で共に戦った仲間だ。

そして、眩い光が放たれ、一人がISを纏った。

見た目はまるで白黄色の龍のようだった。そして、俺の知り合いで龍といったら一人しかない。

「ヒリュー！」

「朝河君！」

あさがひりゆう 朝河飛龍。 共に戦った大柄な男。

このメンバーが来たら残りは一人しかない。

「朧！」

もちづきおぼろ 望月朧。

見た目は落ち着いているが、幼稚的な考えを持つイケメンだ。

「桜子は朧を！ 俺はカブトを助ける！」

「わかったわ!」

急上昇し、俺と桜子はそれぞれ来訪者を助ける。

「おお、アゲハじゃないか! ナイスだ! ナイスタイミングだ!」

「一回黙れ。 ヒリユー、大丈夫か?」

「アゲハ!? これはなんなんだ!?!」

「話は後だ。 一旦降りるぞ」

「ああ」

グラウンドに降り立つ元PSYRENドリフト。 視線はヒリユーたちに刺さる。 ちなみにISは解除されている。

「アゲハ、ここはなんなんだ?」

「IS学園。 で、さっき俺や桜子、ヒリユーが纏ってたのがISだ」

「アゲハ君、説明してくれないかな」

目の前に天然のイケメン、朧が来た。

「お、朧って、お前は毎度毎度抱きつくな! 桜子に斬られるぞ!」
「?」

「それは嫌だな。ここは我慢しよう」

「ここはじゃなくて、毎回我慢しろ！ てか、本当に抱きつくのは止めてくれ！」

周りの視線が痛い。特に女子は臍に目がいっている。

「……おい、夜科。無駄話がいいが説明してもらおうか」

「あ、すみません。こいつらは全員俺の仲間です」

「敵意はないのだな」

「ないはずですよ」

「詳しい話は後だ。山田先生、お願いします」

「は、はい！」

「お前ら5人とも私について来い。話を聞かせてもらう」

「了解」

「わかりました」

「わかった」

「わかりました」

「へ？」

「カブト、とっとと来い」

「お、おう」

それから俺たちのことについて、詳しく、P S Iのことまで細かく説明した。

臃は年齢と能力から保険医になれといわれたが、結局生徒となった。断ったときのセリフが「そんなのつまらないじゃないか。僕はアゲハ君と同じほうが面白いから生徒になる」だ。相変わらずの性格だった。

S i d e 〉 アゲハ 〉 o u t

CALL 15

?来訪者?(後書き)

アンケート結果に基づき、サイレンドリフト登場です。
感想等願います。

CALL. 16 ? 買い物? (前書き)

キャラが崩れている気が……

CALL 16

? 買い物?

Side アゲハ

今日は珍しくシャルロットが織斑先生のお説教を受けていた。ちなみに、ヒリューたちの騒動は一応納まっている。

「本学園はISの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかし――」

スパアンツ!

出席簿アタック炸裂。

「敷地内でも許可されていないISの展開は禁止されている。意味はわかるな?」
意

「は、はい……。すみません……」

「デュノアと織斑は反省文の提出と放課後教室を掃除しておけ。二回目は特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「「はい……」」

二人揃って意気消沈です。

キンコーカーンコーン。

チャイムが鳴ってSHRが始まる。

「今日は通常授業の日だったな。 I S 学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。 赤点など取ってくれるなよ」

……頑張らないとな。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。 3日間だが学園を離れることになる。 自由時間では羽目を外しすぎないように」

臨海学校ね。 水着に買いに行かなきゃ。

「ではS H Rを終わる。 各人、今日もしっかり勉強に励めよ」

「あの、織斑先生。 今日山田先生はお休みですか？」

誰かが言った。

「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。 なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？ いいな〜」

「ずるい！ 私にも一声かけてくれればいいのに！」

「あー、泳いでるのかなー。 泳いでるんだろうなー」

てか、全部織斑先生の授業っすか。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない」

女子たちが揃って返事をした。

「今週の日曜に水着買い行こうぜ。みんな持っていないんだし」

「それもそうだな。それに他のものも買っておかないとな」

「この世界はなにかと面白そうだ」

「なあアゲハ、織斑先生の周りに偶に白く見えるんだけど」

「お前ら二人は人の話を聞け。桜子はどうする？」

「私はもうあるから大丈夫よ」

「そうか。なら日曜に買い物行くぞ」

「」「わかった」「」

「よく晴れたな」

「だな」

「あれって一夏じゃないか？」

「お、ホントだ。目はいいよな、お前。しかも一夏はシャルロツトと手を繋いでるし」

「あの子達を見てるだけでも退屈はしなさそうだ」

「お前はそれ以外の思考はないのか？」

「世界は僕を中心に廻る」

「……そのせいでグラナに殺されかけたんじゃないけ？」

「……そんなこともあったね」

「そんな話してねえで行くぞ」

「ヒリューに正された……」

「お前は何に落ち込んでんだよ」

お前にわかってたまるか……。

「さて、話している間に水着売り場に着いた様だけど？」

「とっとと買って帰るか。このメンバーといるとなんか虚しいから」

「……同感」

「僕はアゲハ君がいるなら別に構わないな」

「「お前は黙ってろ」」

俺とヒリユの声が重なる。

「早く買おうぜ。 あそこの女の子みんな可愛いし」

「そうですね。 早く買って帰ろうぜ」

そして各々選り始めて30分で買い物が終わった。

「じゃ、必要なものかって帰ろうぜ」

それから、来たばかりのヒリユたちの服とか雑貨品とかを買って帰った。

後日談だが、一夏とシャルロットたちに色々あったらしい。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

CALL. 16 ? 買い物? (後書き)

朧とかのキャラが崩れている気がします。
後々変えていこうかと思っています。
感想等お願いします。

CALL. 17

? 臨海学校? (前書き)

更新遅れました。

最近これのアイディアがなかなかでない……。

CALL. 17

? 臨海学校?

Side アゲハ

「海っ! 見えたあっ!」

クラスの女子が声を上げた。
臨海学校初日、転校は快晴。 うん、いいことだ。

「女子は元気だな」

「そうね」

バスの隣の席には桜子が座っている。

「俺が来てからの最初の行事が臨海学校ってどうなんだよ……」

「これはこれでいいんじゃない?」

通路を挟んだ向こう側の席にはヒリユとカブトが座っている。

「僕はこういうのは面白そうだから楽しみだな」

俺の後ろの席には朧が座っている。 偶々隣に座ることになった女子は朧を見て惚けていた。 とうか石化していると言われても過言ではない。

「なにか起こりそうだ」

「不吉なことを言うな！」

俺は臍の発言に溜息をついていた。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

織斑先生の言葉のあと、全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

しっかりとした雰囲気的女将さん。

「あら、こちらが噂の……？」

一夏と目があつた女将さんが織斑先生に尋ねていた。

「ええ、まあ。今年は男が五人もいるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「ほとんどが感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者共」

「お、織斑一夏です。　よろしくお願いします」

「夜科アゲハです。　よろしくお願いします」

「朝河飛龍です。　よろしくお願いします」

「き、霧崎カブト、です」

「望月朧。　よろしく」

「うふふ、ご丁寧にも。　清洲景子です」

女将は丁寧なお辞儀をしてくれた。

「不出来の弟でご迷惑をおかけます」

「あらあら。　織斑先生ったら、弟さんには随分厳しいんですね」

「他の奴らは夜科が抑えているので楽なんですがね、こいつにはいつも手を焼かされますので」

他のやつらを抑えてると言っても、ほとんどが朧ばかりだけだな。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。　海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。　場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子達はとりあえず部屋に向かっていった。　その中に桜子が混ざ

っていたのを確認できていた俺だった。

「お前たちの部屋はこっちだ。　ついて来い」

俺達男子五人は織斑先生についていく。

「えーっと、織斑先生。　俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「本来ならお前たちで三人部屋と二人部屋を使ってもらう予定だったんだが、三人部屋の方が使えなくなってしまった。　そのため、部屋が足りなくなってしまった。　二人部屋は一つ確保できた。　一人はここだ」

「え？　ここって……」

教員室と書かれている。

「ちなみに、他の二部屋はこの隣だ。　これなら就寝時間を無視して女子が押しかけることもないだろう。　望月のほうは確証できんが……」

それは納得。　朧は男子の中で圧倒的なルックスを持つ。　が、中身が残念すぎる。

「織斑先生と同室になるやつは一人しかいないよね？」

カブトの一言でPSYRENドリフトは一夏を見る。

「な、何で俺なんだよ！」

「お前しかいないじゃん」

俺の一言の後、四人息を揃えて告げた。

「」「」「だって織斑先生の姉弟だから」「」

「理不尽だ！」

「朧はアゲハと同室で決まりだろ」

「ちょっと待て！ 何で俺が朧と同じ部屋にならねえといかねえんだよ！ 俺はここまで来て朧のせいで疲れるのは御免だ！」

「朧を抑えられるのはお前しかいねえんだから。 雨宮のこともあるからな」

「それでも嫌だ！」

「僕は面白ければどうでもいいかな」

「じゃ、決定で」

「決定するな！」

「じゃ、次。 俺と霧崎だな」

「ちょっと飛龍！ 俺の意思は無視！？」

「ちょっと黙れ一夏。 まあ、関わり合いが深いもの同士で組ませ

ると俺と霧崎、アゲハと朧になるから、結局一夏は織斑先生と同室になるんだよ」

「ま、それが妥当じゃね？」

「朧と同室ってことが癪に障るが、俺もそれには同感だな」

「じゃあ決定だね」

「ということで織斑先生。 織斑先生と同室になるのは一夏ということになりました」

「わかった。 それと、大浴場は使えるが、時間交代だ。 深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「「了解」」

「「わかりました」」

こうして俺たちは（勝手に）決められた部屋に入った。

「暑いな……」

海に着いてからの俺の開口一番はこれだ。

「久しぶりにP S I使ってみようぜ」

「俺はよく使ってるからな……」

「てかこの世界って俺たちのP S I見えるの？」

「ネメシスQは見えてたな。 実際にはわからん。 桜子に頼んで有線ジャックとか使ってもらえばハッキリするだろ」

「てかここでは関係ないか？」

「別にいいじゃないか。 最後に楽しめていれば」

「珍しく臍がまともな事を言った気がする……」

「まあとにかく、遊ぶか！」

「そうだな」

「「アゲハ！」」

海へと足を運んでいると、声をかけられた。

「お、桜子……ってなんでアビスも出てきてんだよ！ 混乱するから出てくるなって言っただろ！」

「え？ アゲハは『表面に出て桜子の口でしゃべるのを見たら』って言ってたわよ？ だから実体化したんだけど？」

うふふっとイタズラが成功したときのように笑う。

「しゃべるなつつたら実体化はもっとタブーだろうが！ 今からでも遅くないから戻れ！」

「嫌よ」

「嫌よじゃねえよ！ 見られる前に「あれ？ 雨宮さんが二人いない？」……遅かった……」

「とにかく、アゲハは私たちと遊ぶの！ 文句言っていないで行くよ！」

そういつて桜子とアビスは俺の腕を取って海に向かって駆け出す。

「ひ、引っ張るな！ それとストレングスはやめろ！」

S i d e へ アゲハ へ o u t

S i d e へ 飛龍 へ

「ぎゃあああああ!!!」と悲鳴を残してアゲハは二人の雨宮に連れ去られていった。

「……アゲハも大変だな。一瞬アゲハの周りに白いオーラが見えたよ……」

「霧崎、それを言うな……」

「やっぱり面白いよ! アゲハ君は!」

それから俺たちは各々で遊んだ。ビーチボールをしたり、二人の雨宮とアゲハを見て苦笑していたり、泳いだり、臍を見てこれまた苦笑していたりした。

S i d e へ 飛龍 へ o u t

C A L L . 1 7

? 臨海学校? (後書き)

やっぱりキャラがわからない……。。

CALL. 18

?天才?

Side アゲハ

「……お前ら、何してんの？」

「……………」

「……………」

「……………」

風呂上り、織斑先生の部屋の前に箒、鈴、セシリアがドアに張り付いている。

ちなみに俺の隣には朧、ヒリュー、カブトの桜子以外のPSYRE Nドリフトが揃っている。

「無視かオイ」

「「黙って!」」

小声で怒鳴る三人。

「「「……は?」」」

何が起こっているのかいまだに理解できない俺たちだった。が、

パンツ!!

「「へぶっ!!」」

ドアに衝撃が走ったようで、三人からは十代女子にあるまじき声を出していた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんわ、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ!!」

逃走……できなかった。鈴と箒は首根っこを取られ、セシリアは浴衣の裾を踏まれていた。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ。ん、お前らもいたのか」

「あ、はい」

「こいつらが部屋の前にいたんでなにしてるか気になってな」

「それでここに立ち止まっていたわけですよ」

盗み聞きだったとはな。

「そうか。お前らは戻っていいが、篠ノ之、凰、ボーデヴィツヒとデュノアを呼んで来い」

「は、はいっ！」

開放された簾と鈴が駆け足で呼びに行った。

「えーっと、じゃあ俺たちは戻ります」

そうして俺たちは部屋に戻った。が、隣の様子が気になって仕方がなかった。

合宿二日目。今日は午前中から夜までISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。俺たちはどうしたらいいのだろうか。

「ようやく全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

珍しくラウラが寝坊をしたようだった。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれ相互位置情報交換のため——
——」

なげえ……しかもよく噛まんよな。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

胸をなでおろすラウラ。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

俺たちのISは拡張領域がない。だから武器の増加はできないし、やるつもりもない。だからやることがない。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~ん!!!!」

ずどどど……! と砂煙を上げながら走ってくる。 しかも速い。

「やあやあ! 会いたかったよ、ちーちゃん! さあ、ハグハグしよう! 愛を確かめ——ぶへっ」

飛び掛った乱入者を織斑先生が掴む。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクロードだねっ」

いとも簡単に織斑先生から抜け出す乱入者。

今度は箒の方を向いた。

「やあ!」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。 こうして会うのは何年ぶりかなあ。
おっきくなったね、箒ちゃん。 特におっぱいが」

がんっ!

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。しかも日本刀の鞘で叩いた！
ひどい！ 箒ちゃんひどい！」

なんで刀を持っているんだ？

「え、えっと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者と言うなら、
一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生が瞬殺されました。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。

終わり」

こいつが箒の姉でISを作り出した篠ノ之東博士か……。

「それで、頼んでおいたものは……？」

「うっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧
あれ！」

ズドンッ！

空から金属の塊が降ってきた。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペック現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

最新型らしい。

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！ 私が補佐するからすぐ終わるよん♪」

無駄話をしながらも手は動き続き、数秒単位で切り替わる画面にも全部目を通していた。
やっぱり天才のようだ。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。 あ、
いっくん、白式見せて。 束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。 はい」

一夏は白式を展開した。

「データ見せてね。 うりゃ」

言うなり、白式の装甲にぶすりとコードが刺し込まれた。

「んゝ……不思議なフラグメントマップを構築してるね。 なんだろ？ 見たことないパターン。 それとさ、そこにいる男四人のISも見せてよ」

突然声をかけられた。

「君たちだよ。 それ以外にいないだろ」

『どうする?』

『どうするって言われてもな……』

『俺たちはISのことをほとんど知らないんだ。ここはアゲハが決めろ』

『俺かよ。まあこの世界に最初に来たのは俺なんだけどな……』

『で、どうするんだい? アゲハ君』

「わかりました。俺は見せますよ」

『まずは俺だけ見せる。問題がなければお前らの意思で見せろ』

『わかった』

俺は暴王を展開する。

「君には興味ないけど君たちのISには興味津々なんだよ。ってかこのISをどこで手に入れたんだい?」

「どうせ言ったところで理解できませんよ。いくらあなたでもね」

「ふーん。あ、やっぱり知らないコアだ。第一形態で単一仕様能力も持ってる……。……この性能……紅椿よりも高い!? 信じられない……」

「そうなんですか?」

「やっぱり君にも興味出てきたよ！ 君、名前は？」

「え、夜科アゲハって言います」

「夜科アゲハ……よし！ 君はあつくんだ！」

「あつくん！？」

「これを手に入れた経緯を詳しく教えて！」

「えーっと、理解できませんよ？」

「いいからいいから！ 東さんは興味津々なのだから！」

「……わかりました。ただし、人のいないところでなら話しますよ……」

「？ 話してくれるならオーケーだ！ あ、他の三人も見せて！」

「篠ノ之博士、桜子のをみてくれませんか？ 俺と単一仕様能力が同じなので」

「うそ！？ ちょっと桜子っての来て！」

「……なんでしょうか？」

「君のIS見せて！」

「え？ あ、はい」

桜子は紅骨を展開する。

「うわ、ホントだ！ 同じ単一仕様能力だ！ しかもこのMシステムってのは私でも実現できるかどうかかわからないよ！ えっと君、名前は？」

「雨宮桜子です」

「さっちゃんだ！ よしよし、気分が乗ってきたよ！」

「束！」

べしん！ と篠ノ之博士は織斑先生に叩かれた。

「ごめんね、ちーちゃん！ あ、もう終わるね！ んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ」

この後篇は試運転で紅椿を動かし、撃ちだされたミサイルをすべて撃墜した。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

いつも以上に慌てた山田先生が来た。

Side アゲハ out

CALL. 18 ?天才? (後書き)

束の感じが無理やりでしたかね？

感想など、あればよろしくお願いします m

┐
└
m

CALL. 19

? 作戦会議?

Side アゲハ

「たっ、た、大変です! お、おお、織斑先生っ!」

いつもよりも慌てた山田先生。

「どうした?」

「こ、こっ、これをっ!」

渡された小型端末の、その画面を見て織斑先生の表情が曇った。

「解く命令レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは?」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は」

周りの視線に気づいてか、手話でやり取りをはじめた。

『……桜子、聞こえたか?』

『なんとかね。　ハワイ沖で試験稼動をしていた何かに何かあったようよ』

『やっぱ途中で手話に切り替えたからそれが限界か』

『ええ。　おそらく、私たちの出番になりそうよ』

「そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。　――全員、注目！」

山田先生が走り去ったあとに、織斑先生が声を上げた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。　今日のテスト稼動は中止。　各班、ISを片付けて旅館に戻れ。　連絡があるまで各自室内待機すること。　以上だ」

「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

一気に騒がしくなる女子たち。

「とっとと戻れ！　以後、許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな……！」

「」「はっ、はい！」「」

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、ボーデヴィツヒ、凰、デュノア、夜科、雨宮、朝河、望月、霧崎！ ——それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

妙に気合の入った返事をしたのは筈だった。……何も起こらなければいいんだが……。

「では、現状を説明する」

専用機持ちと教師人が集められていた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった。」

一夏、カブト、隴以外はは真剣な眼差しになっていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後、学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

桜子の予測が当たろうとしていた。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

桜子の予想通りとなった。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

データが表示される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようすわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴアイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450キロを越えるとある。アプローチは一回が限度だろう」

「一回きりのチャンス……ということとはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、俺と一夏に視線が刺さる。

「え……?」

「一夏、あんたの零落白夜かアゲハの暴王で落とすのよ」

「それしかありませんね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏とアゲハをそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ お、俺が行くのか！？」

「「「「「「当然」」」」」」」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟ないなら、無理強いはいしない」

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちようどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

多分俺の暴王の翼をすべて移動のために使用すれば最高速度をだせるのは俺だ。篠ノ之博士が筈に渡した紅椿よりも性能が高いって言うってたし。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ……。それならば適任——」

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

出てきたのは篠ノ之博士。天井から首が逆さに生えていた。

「……山田先生、室外の強制退去を」

「えっ!? は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ★」

空中で一回転して着地。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっという作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

「聞いて聞いて! ここは断・然! 紅椿の出番なんだよっ!」

「なに？」

「紅椿のスペックデータを見てみて! パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ!」

織斑先生を囲むようにディスプレイが現れる。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ！これでスピードはばっちり！」

展開装甲？

「説明しましょうそうしましょう。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

第四世代？

「はい、ここで心優しい束さんの解説開始。いっくんのためね。へへん、嬉しいかい？ まず、第一世代。これは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付け武装による装備の多様化』——これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器にBT兵器、あとはAICとか色々だね。……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できました？ 先生は優秀な子が大好きです」

「は、はあ……。え、いや、えーと……？」

「ちっちちっ。束さんはそんじょそらの天才じゃないんだよ。これくらいは三時のおやつ前なのさ！」

三時のおやつ前って随分と中途半端な。

「具体的には白式の《雪平式型》に使用されてまーす。試しに私が突っ込んだ」

「「「え!?!」」」

「それで、うまくいったのでなんと紅椿は全身アーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ★」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。 え? 全身? 全身が、雪平式型と同じ? それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言うとな最強だね」

まあ、相手がエネルギーを使用しているのなら俺が最強なんだけどな。

「さらに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。 リアルタイム・マルチロール・アクトレス これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機ってやつだね。 リアルタイム・マルチロール・アクトレス にはは、私が早くも作っちゃったよ。 ぶいぶい」

この場のほとんどが固まっている。

「はにゃ? あれ? 何でみんなお通夜みたいな顔してるの? 誰か死んだ? 変なの」

「―――東、言っただろ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ? えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

織斑先生に言われてやっと、篠ノ之博士はこの場の空気に気づいた

ようだった。

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくん。いっくんが暗いと束さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

篠ノ之博士は一夏にウイंकをした。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいは夕食前だよ！」

夕食前ってのも中途半端だな。

「それにしてもアレだね。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

白騎士事件って何だ？ ……あーあれか。ISが世界に認められた事件か。

「しかし、それにしてもウフフフ。白騎士って誰だったんだろうねー？ ね？ ね、ちーちゃん？」

「知るか」

「うむん。私の予想ではバスト——」

ごすっ。

情報端末アタック。

「ひ、ひどい、ちーちゃん。東さんの脳は左右に割れたよ!？」

「そうか、よかったなあ。これからは左右で交代に考えことができるぞ」

「おお！ そっかあ！ ちーちゃん、頭いいー！」

「話を戻すぞ。……東、紅椿の調整にはどれくらい時間がかかる？」

「お、織斑先生!？」

セシリアが驚きの声をあげた。専用機の中で高機動パッケージを持っていたのはセシリアだけだったため、当然作戦に参加できるものだと思っていたようだ。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功して見せますわ！」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

「ちなみに紅椿の調整時間は7分あれば余裕だね★」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之・夜科の三名による目標の追撃及び撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。各員、ただちに「待ってくれ」……夜科、どうした？」

「俺のことを理解できている桜子達のほうが楽だ。それに、最悪

の場合は銀の福音の操縦者、一夏、箒を巻き込む可能性がある。
だから俺はもしも一夏たちが失敗したときに出る」

「……わかった。では、織斑・篠ノ之の両名に作戦を執行してもらう。もしもの場合に夜科、および雨宮の両名による作戦の引継ぎをする。作戦開始は変更なし。各員、ただちに準備にかかれ」
どうやら俺の意見は通ったようだ。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

CAL. 19

? 作戦会議? (後書き)

アゲハを引継ぎにしないと一夏の白式が第二形態移行しないので、
こうなりました。

意見等あればお願いします m () m

CALL. 20

?落ちた白?

Side(一夏)

時刻は十一時半。

砂浜では俺と箒が並んで立っている。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身がISアーマーが構成され、同時にPICによる浮遊感、パワーアシストによる力の充実感とで全身の感覚が変化した。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

(箒、大丈夫なのか?)

箒はさっきから浮かれている気がして仕方がない。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか?』

ISのオープン・チャンネルから千冬姉の声が聞こえる。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。ワンアプローチ・ワンダウン短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援をします」

やはり筭の口調はどこか喜色に弾んでいる。

『――織斑』

「は、はい」

今度はプライベート・チャンネルで千冬姉の声が届く。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かをし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

『頼むぞ』

オープン・チャンネルに替わり、号令をかけた。

「では、はじめ！」

——作戦、開始。

S i d e 一夏 ｝ o u t

S i d e ｝ アゲハ

「……一夏たち、行ったな」

一夏たちがものすごい速さで飛んでいった。この場には俺と桜子、ヒリューがいる。

「ええ。でも……」

「ああ。おそらく、あいつらは失敗するだろうな」

俺、桜子、ヒリューが思い立った結論がこれだ。

「失敗したのならそれは筈が原因か、別の要因になるだろうな」

「多分な。篠ノ之は明らかに浮かっていた。実戦であれでは、最悪死ぬだろうな」

死が纏わりつくPSYREN世界を生き延びた俺たちだからわかる。

一夏と筈は負ける。確実に落される。

「死ぬなよ……一夏、筈……」

死ななければ生きれる希望はある。　　朧のキュアがあるからだ。

「お〜いたいた〜！　あっくん、さっちゃん！　ついでにデカブツくん！　話聞かせてよ！」

「デカブツくん！？」

……そうだった。

「このタイミングでなくてもよかったのではないのでしょうか？」

「いいのいいの！　どうせ暇でしょ？」

「確かに暇ですけど……」

一夏たちが行ったばかりなのに……。

「話、聞かせて！」

「わかりましたよ……。　じゃあ、行きましょうか。　篠ノ之博士……」

「うーん……篠ノ之博士って他人行儀だからやめてくんない？」

えー……。

「わかりました。　では、束さん、人気のないところまで行きましょう」

「桜子、朧とカブトも呼んでおいでくれ」

「わかったわ」

これでPSYRENドリフトは揃うな。

Sideへアゲへout

Sideへ一夏へ

「一夏！ 私が動きを止める！！」

「わかった！」

俺たちは苦戦しつつも戦っていた。

箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り出す。腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

（こっちの機体も化け物だな……！！）

さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。

「はあああっ！！」

——いける！

そう思って刀を握り締める俺だったが、そこに福音の前面反撃が待

っていた。

「La………♪」

甲高いマシンボイス。ウイングスラスターはその砲門すべてを開いた。その数、三六。しかも全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！　だが、押し切る……！」

箒が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃する。――隙が、できた。

「！」

だが俺は福音とは真逆の、直下海面へと全速力で向かった。

「一夏……？」

「うおおおっ……！」

瞬時加速と零落白夜を最大出力で行い、一発の光弾に追いついた俺はそれをかき消す。

「何をしている……？　せっかくのチャンスに――――」

「船がいるんだ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに――――ああくそっ、密漁船か！」

だからといって見殺しにはできない。

キュウウン……。

エネルギー切れ、最大にして唯一のチャンスを失い、作戦の要もたつた今なくした。

「馬鹿者！ 犯罪者などかばって……。そんな奴らは——！」

「箒！！」

「ッ——！？」

「箒、そんな——そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いやつのが見えなくなるなんて……。どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。その時に落した刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりとした。

（今のは、具現維持限界だ……！
リミット・ダウン まずい——！！！）

具現維持限界——つまりエネルギー切れということだ。そして今は実戦だ。

「箒いいっ！！」

俺は一直線に箒へと向かう。最後のエネルギーを使っただけの瞬時加速。

（頼む！ 間に合ってくれ！！）

視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも今度は箒に標準が絞られている。

（頼む！ 頼む、白式！ 頼むっ！！）

スローモーションの世界で俺は、光弾が放たれるのを確認し、復員と箒の間に割って入った。

「ぐああああっ！！」

箒をかばい爆発光弾が一斉に背中に降り注いだ。

エネルギーシールドで相殺し切れないほどの衝撃が連続で続き、みしみしと骨があげる軋みが聞こえる。同様に悲鳴をあげる筋肉、アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ！！」

「う……あ………」

海へと真っ逆さまに落ちる。俺は福音を見つめながら、気を失った。

Side ～ 一夏 ～ out

C A L L . 2 1 ? 出撃 ? (前書き)

朧を除いた P S Y R E N ドリフト V S 銀の福音です。

CALL. 21

? 出撃?

Side アゲハ

一夏と箒が落とされたと言う報告が来て、俺たちは準備をしている。
そして隼は一夏たちが来るのを待っていた。

「やっぱり落ちたか。 隼、一夏と箒を任せたぞ」

「わかったよ」

それから時間が経つこと早30分。

砂浜に俺と桜子、ヒリューにカブトがいる。

『夜科、雨宮、朝河、霧崎、準備はできているな?』

「」「はい」「」

『いくつもの修羅場を潜り抜けてきたお前らだ。 大丈夫だと思う
が、気は抜くなよ』

「はい」

『それと夜科、お前のISは攻撃に特化しすぎている。 誤っても
操縦者は殺すなよ』

「わかっています」

『では、はじめ!』

作戦再開。 運がいいことに一夏たちが落とされたところからはあまり動いていなかった。

「俺と桜子が先行する。 ヒリユーは遅れて来い。 カブトは敵を見ていてくれ」

「「わかった」」

「飛ばすぞ、桜子」

「ええ」

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力——“ノヴァ”——発動。

俺と桜子の機体から白い靄のようなものが出る。そして、最高速度で飛ぶ。

福音は海上200メートルのところで静止していた。俺と桜子はノヴァは解除してある。

『行くぞ、桜子』

『ええ』

俺が先行して攻撃を仕掛ける。 ウィングビットによる無差別攻撃だ。

俺と桜子は福音に接近し、俺はソード、桜子は紅骨を持ち、福音へと向かう。

福音はウィングビットが避けられないと悟ったのか、エネルギー弾

でウィングを破壊しようとするが、当たったエネルギー弾はすべて吸収される。そしてあつという間にウィングのサイズが膨張する。

「やばいな……」

俺は急いでウィングビットを回収する。余程の量を受けていたように、移動に消費していたエネルギーが全快した。

『桜子、今回はウィングビットをあまり使いたくない』

『わかったわ。それなら、近接戦闘あるのみ!』

桜子は接近し、紅骨を振りかざすが、翼から放たれるエネルギー弾により、なかなか攻撃が通らない。

『あの砲撃——『銀の鐘』シルバー・ベルが厄介ね……。範囲が広すぎる』

『暴王で吸収したいが、吸収しすぎるのも危険だ。ヒリューとカブトが来るまではゆっくりやろう』

『わかったわ。ヴィジョンズ霧崎の幻視はかなりの武器になるしね。待ちながらやりましょう』

今度は俺が接近し、ソードだと吸収しすぎるおそれがあるのでクロウを展開し、エネルギー弾を切り裂き、直接機体に吸収しながら福音に接近し、クロウを振りかざすが、さすがは軍用ISというところだろう。凄まじい機動力により回避される。いつもならさらに追撃するが、無理は禁物。ヒリューたちが来るのを待つ。

『アゲハ! 来たぞ!』

『来たか！ ヒリユー、あいつの砲撃、数秒でもいいから止めれるか？』

『翼を封じればいいんだろ？ 数秒なら止めれると思う』

『よし！ あの砲撃が無ければかなり攻撃しやすい！ 任せたぞ、ヒリユー！』

『おう！』

ヒリユーは福音に接近していった。

『カブト、相手の攻撃を見て教えてくれよ』

『お、おう』

俺はソードを展開してヒリユーについて福音に接近する。

『アゲハ、行くぞ！』

ヒリユーはIS『飛龍』^{ドラゴン}の右腕と尻尾から半透明の腕と尾、ドラゴンアームとドラゴンテールが出現し、高速で移動する福音を掴み、完全に固定した。

『拘束を確認。 拘束解除のため、最大稼動開始』

『アゲハ、急げ！ コイツ、かなりのパワーだ！ 長くは持たない！』

『わかった!』

俺はウイングをスラスターに回し、さらに瞬時加速で急加速し、福音に接近。ソードがドラゴンの尾と腕に触れる瞬間に解除され、開放された福音の片翼を切り裂き、両断した。

『危険。 現空域からの離脱を優先する』

片翼になりつつも、この場からの逃走を選んだ福音。

「逃がすか!」

俺は再び瞬時加速を使って逃げる福音を追う。

『アゲハ! 下がれ! 福音が砲撃をしようとしている!』

カブトからのトランス。俺は急停止し、すぐに暴王の渦を出す。メルゼズ・ボルテクス

そしてカブトの宣言どおりに福音は銀の鐘をぶっ放してきた。俺に向けられたエネルギー弾は俺の周りに円軌道で回る小型暴王の月に吸収されたが、あまりの量に暴王の渦は破られた。

「!? ウイング、クロウ展開!」

咄嗟にウイングを射出し、クロウとソードで防ぎきれなかったエネルギー弾を吸収した。

すぐにウイングとソードを収納し、エネルギーを補給、福音に再接近する。

クロウを通常以上に伸ばし、50センチほどの長さのクロウは1メートル超の長さの漆黒の爪となり、振りかざし、僅かに装甲を削った。

そして、ほんの僅か体勢を崩した福音に、ノヴァを発動し、通常時以上の速度で接近した桜子は愛刀の妖刀《心鬼紅骨》で福音の残った片翼を切断した。そして、両翼を失った福音は地球の重力に逆らうことなく、海に落ちた。

「はぁ……はぁ……」

「終わった？」

「多分な。操縦者を助けよう」

「ええ」

俺と桜子がゆっくりと福音が沈んだ海へと近づく。

『アゲハ！ 雨宮ちゃん！ 海から何か来る！』

「「!」？」

海面が強烈な光の球によって吹き飛ばされた。

S i d e ー アゲハ ー o u t

CALL. 21 ? 出撃? (後書き)

隴は一夏のキュアのため待機となりました。

CALL 22 ? 乱入? (前書き)

短めです。

CALL 22 ? 乱入?

Side アゲハ

目の前に青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くように蹲っている。

「まさか……第二形態移行!？」

『雨宮ちゃん! 危ない!!!』

カブトが叫ぶ。

『キアアアアア……!』

獣の咆哮のような声を発し、福音が桜子へと飛びかかる。

「は、速い!？」

桜子は紅骨で防いでいたが、あまりにも速度が上昇しすぎている。そして、福音は切断された翼のあった部分からエネルギーの翼が生やした。

「桜子!」

俺はソードを展開しながら瞬時加速で福音に接近し、桜子に加勢する。が、福音は翼からエネルギー弾が発射された。俺はそれにか反応したが、距離が近すぎたのとエネルギー弾の量により被弾した。暴王は武装はエネルギーを吸収して力にするが、装甲そ

のものにはそれが無い。捌ききれなかったエネルギー弾は暴王の装甲を削り、シールドエネルギーを奪っていく。

「ぐっ……！」

俺が福音に意識を向けていると、福音の背後からヒリューがドラゴンアームで攻撃しようとしていた。が、福音はそれに反応し、回避、迎撃を行った。

「ヒリュー!!」

「朝河君!!」

ヒリューはとっさにドラゴンウィングで身を包み、砲撃に耐えていた。

『ヒリュー無事か!?!』

『ああ……なんとかな……』

『さっきとは桁違いね……』

『ああ……』

第二形態移行でここまで性能が上昇するとは思わなかった。

『改めて行くぞ!』

『『おう(ええ)!』』

俺たちが改めて福音に意識を集中させ、一気に攻める。

俺は瞬時加速で福音に接近し、俺を迎撃するために放たれるエネルギー弾はヒリューのドラゴンウイングとドラゴンテールによって防がれる。ヒリューの防御を抜けてきたエネルギー弾はソードで喰らう。

「はあああああ！」

瞬時加速で急加速した俺がソードを振る。福音は回避をするが、片翼に当たり、エネルギー翼を吸収する。俺が追撃をしようと福音に向けてさらに瞬時加速をしようとする。が、

『アゲハ！ 上から何か来る！』

瞬時加速の方向を左に変更し、暴王の渦を発動しながら回避行動に移る。

そして、俺が今さっきまでいたところには氷の柱が立っていた。

「な!？」

「避けられるとはな……」

声が聞こえたほうに意識を向けると、マフラーをした茶髪の女。手には氷の銃のようなものが握られていた。

「ククク。久しぶりだなあ、クソガキ！」

「ドルキ！」

前に襲撃してきたドルキもいた。

「何の用だ！」

「そんなこたあ簡単だ。 テメエをぶっ殺しに来たんだよ！」

「……ドルキ、邪魔はするな」

「うるせえ、ウラヌス！ これは俺の戦いだ！」

ウラヌス？ いたか？ そんな奴。

『アゲハ、あいつは氷を使う』

『カブト、知ってんのか？』

『ああ。 はっきりとは知らないけど、カイルとフレデリカを苦しめた男だった』

『へえ……』

「ドルキ……貴様如きが私に楯突くなど100年早い」

「チッ！」

あの反応から、カブトの言っていたことは間違っていないらしい。

「コイツは危険分子……我らW・I・S・Eの敵。 排除する」

「W・I・S・E……だと……？」

やはりいたのか……この世界にも……。

「W・I・S・E！ お前らの目的は何だ！」

「貴様に教える義理は無い」

「始めようぜ。 殺し合いをな！」

『桜子、ヒリユーはウラヌスって奴を頼む。 俺はドルキを今度こそ仕留める。 カブトは攻撃を見てくれ』

『『『わかった』』』

俺たちとW・I・S・Eの戦いの幕が、再び切って落とされた。

S i d e 〉 ア ゲ ハ 〉 o u t

CALL. 22 ? 乱入? (後書き)

ウラヌスってこんな感じでいいのかな?
意見等あればお願いしますm(_____)m

CALL 23 ?爆塵者? (前書き)

戦闘場面が特に駄目です……。

作者にはこれが限界です……。

CALL. 23

?爆塵者?

Side アゲハ

俺はドルキを相手にしているが、なかなか思うようにいかない。

それはドルキ、桜子達も同じだ。なぜなら、まだ福音が落ちてないからだ。福音は見るからにウラヌスたちW・I・S・Eの味方のようなが、ドルキはそれがうざそうにしている。

「チッ！ 銀の福音も灰にしてやりてえが……」

俺は福音が飛び回ったり、《銀の鐘》で砲撃してくるため、ランスが撃てない。下手して撃てば福音の操縦者を誤って殺しかねないし、《銀の鐘》の砲撃にホーミングしたランスが桜子達を巻き込む可能性が零ではないからだ。ウイングは有効だが、多すぎるエネルギーに狙いが外れる恐れもある。暴王の戦力が大きく削られているのだ。

『アゲハ、周りが囲まれた』

『了解』

俺は暴王の渦を発動し、ドルキに接近する。それを予想していたかのように、爆塵者・星船形態を発動した。

「はっ！ 死ね、クソガキ！」

かつて俺を苦しめたときのように、馬鹿でかい星船形態は小さく手のひらサイズにまで小さくなる。IS化した爆塵者は以前戦った

ときよりも強化されている。装甲に変化があることから、やはり第二形態移行したようだった。

「それは効かねえ！」

「何!？」

俺はソードで切り裂き、吸収する。前はランスしか使えなかったための敗北だった。そして今は違う。今はISとなった俺のP S I『暴王の月』^{メルゼス・ドア}が新しい力となって存在する。ドルキの攻撃は俺には効かない。

「お前は落ちろ！」

「グハッ！」

俺は瞬時加速で一気に近づく。ドルキはもう一度超圧縮爆塵者を放とうとするが、それごとドルキに切り裂く。

「調子に……乗るなあ!!」

「!」

俺はもう一度、止めの一撃を放つために接近するが、俺とドルキの間に福音が割り込んで銀の鐘が俺に向けて放たれる。俺はウィング射出後、暴王の渦で防御に入る。

「（厄介だな……）」

俺たちは福音を殺すことはできない。本気でやりあうことができ

ないのだ。 そんな福音が盾になれば攻撃を抑えなければならない。

「!？」

突如、リーダーにISの反応が五機も捉えられた。

来た方向、数からして考えられるのはあいつらしいない。

『アゲハ！』

『わかってる！』

『なんで来やがったんだ！』

俺たちはピンチだった。 ただでさえ福音が邪魔なのに、さらにあいつらが来たら余計に俺が動き辛くなる。 さらに、相手はウラヌス、ドルキと殺すことに躊躇いを持たないイレギュラーが二人、しかもPSYREN世界ではドルキは（恐らくはウラヌスも）星将と呼ばれる強者だ。 殺すことに躊躇いを持つあいつらはこの死の戦場では正直言って足枷でしかない。

『お前らは帰れ！』

『アゲハ！ これは私たちの問題だ！ 口を挟むな！』

『帰れ！ 邪魔なんだよ！』

『アゲハさん？ 援軍にそれはあんまりではなくて？』

『俺たちがやっているのは殺し合いだ。 死を覚悟してねえ奴らは邪魔だ。 帰れ』

『何よ、飛龍までそういうの?』

『私たちはあなたたちを死なせたくはないの。 私たちでもあなたたちを守りながら戦うのは無理よ。 黙って帰りなさい』

『ゴメンね桜子、僕たちは一夏がやられて黙ってられない。 アゲハたちも苦戦しているから余計にじっとなんかしてられない。 福音は僕たちで落とす』

『お前らは気づいてねえのか!? 俺たちが相手をしているのは福音を含めた三機だ! お前たちが手に負えるような相手じゃねえ! 一人はクラス対抗戦のときに襲撃してきた奴だ。 もう一人はそいつ以上の実力を持つ。 それにお前たちがいると俺が戦いづらなんだよ!』

プライベート・チャンネルを続けるが帰る気配は無い。 どんどん反応が近づいてくる。 プライベート・チャンネルをしながらも福音とドルキの攻撃を防いでいる。

「どうした! 随分と大人しくなっているじゃねえか!」

爆塵者の爆撃と福音の砲撃をソード、ウィングで防御、吸収している。 正直、やり辛い。

ビシュンツ!

ドルキにレーザーが飛んできたが、それは回避された。 来てしまった。 ついに来てしまった。 あいつらが。 専用機持ちたちが。

『何で来たんだ！ 早く帰れ！』

『加勢する！ 異論は認めん！』

『チッ！ テメエらは福音を引き付けて離れろ！ 巻き込まれたら死ぬぞ』

仕方がない。俺はこいつらに福音を任せることにした。福音が離れれば俺も本気を出せる。

『カブト、あいつらを守れ』

『……わかった』

渋々応じるカブト。福音は俺たちから離れている。なんとか気をつけているが、被弾数が見るからに多い。三分ほど離れさせてくれれば上出来だ。

「はああああ！！」

暴王兵器を不定期で出し入れして、シールドエネルギーの回復、暴王兵器の貯蓄リセットをしながら攻防を続ける俺とドルキ。ヒリユーと桜子はウラヌスにかなり苦戦をしているようで、桜子達の間たり一面が氷の世界になっていた。

「（早くケリをつけねえとな……。福音は後もう少しで安全圏へと離れる、か……。）」

それまでは本気は使えない。だが、離れるまで待つわけにはいか

ない。

「（一気に片を付ける!）」

俺は瞬時加速で急接近をして、右手にソードを展開している。

「これで……終わりだ!!」

さらに瞬時加速を行い、さらに加速する。そして、放たれる爆塵者の爆撃を喰らいながらドルキを切り裂いた。

「ぐ……! ま、まだ……だ……!」

「いや、終わりだ」

俺は血を流すドルキにソードを振り下ろし、ISは解け、ドルキは海へと落ちていく。

「……………」

『アゲハ……ドルキを捕獲して……奴らの情報を手に入れる……から……』

かなり疲労している様子だ。

『悪い。コイツはここで殺す。でないとまた逃げられる』

『……そう……わかったわ』

落下しているドルキを掴み、そのまま斬り殺す。爆塵者も破壊し

ておいた。俺はドルキをそのまま海に捨てて、氷の世界へと向かった。

S i d e 〉 アゲハ 〉 o u t

CALL. 23

?爆塵者? (後書き)

ドルキリタイアです。

アゲハはこの世界でも殺すことに躊躇いを持ちません。

感想などあればお願いします m () m

CALL 24 ?三人目の星将?

Side アゲハ

ドルキは殺した。やはり何も感じない。
今はそんなことはどうでもいい。福音はカブトたちのおかげで敵意はほとんどカブトたちに向かっている。福音はどうにかなりそうだ。問題は――

ウラヌス。

ドルキなんて比じゃないほどの戦闘能力。氷を武器に桜子とヒリユーを同時に相手にしている。

桜子はノヴァを使ってないにしてもかなりの実力者だ。ヒリユーだってISに完全に慣れた訳ではないが、戦闘経験は一夏たちなんかよりも遥かに豊富だ。いくつもの死地を潜り抜けた実力者だ。その二人を相手に拮抗している。

(ふざけた能力だな。ISも、人間も)

俺は思考をしながらも桜子とヒリユーとウラヌスの戦う氷の世界へと飛んだ。

『桜子！ ヒリユー！ 大丈夫か？』

『え、ええ、なんとかね』

『コイツ、かなり場慣れしてやがる。あの氷……あいつが言うには『氷碧眼^{ディープフリーズ}』はかなり厄介だ』

『そうらしいな……。 大気が……。凍てついてやがる……。』

ISのおかげで比較的楽に動けるが、ライズが使えない奴はいつも通りに動きができないはずだ。

『とにかく、コイツを倒す！』

『『ええ（ああ）！』』

俺が加勢し、三対一の構図となる。 エネルギーを喰らい尽くす『暴王』。 幻覚を見せる『紅骨』。 ドラゴンを思わせる力を使う『飛龍』^{ドラゴン}。 対するウラヌスは、氷を自在に操る『氷碧眼』。 どれもPSYREN世界に存在した力だ。

『ディープフリーズ！』

氷の槍。 ウラヌスは手に自身の体よりも大きな氷の槍を生成し、俺たちに向けて投げてきた。

「暴王・円盤Ver.」

俺は両手に暴王を発動し、槍を防ぐ。 槍はかなりの威力を持ち、暴王の盾で防いだのにもかかわらず、少し圧された。

（なんつうパワーだよ……）

防ぎ終わったときには氷の槍は跡形も無く削り取られていた。

『わかってると思うけど、あの槍は危険だ』

『ええ。朝河君でも完全に止め切れなかったから、威力はあると思っただけど……』

『まさか、たとえ小型の暴王の月でも圧されるほどとはな……』

『あいつは危険だ。ここでケリを付ける！』

おそらくコイツはW・I・S・Eの上位者だ。ドルキなんて比じゃないレベルだからだ。

「数が増えたところで結果は変わらん。まあ、ドルキはやられたようだがな」

「いえ、あなたの負けよ！ 私はそろそろ全力で行かせてもらおうから！」

桜子の全力。つまりノヴァを使うということだ。

単一仕様能力“ノヴァ”。PSI最高の能力。

『朝河君、悪いけど援護お願い。今の私に合わせれるのは同じノヴァを使えるアゲハだけだから……』

『わかった。あいつの攻撃は可能な限り止めてやる』

『ありがとう』

桜子から白い靄が発生しだした。

そして現れるもう一人の桜子——アビス。

「行くわよ、アビス！」

「ゾクゾクしちゃう♪」

微妙に噛み合っていないが、意思疎通はしている。

「「アゲハもやるわよ！」」

ほらね。

《単一仕様能力——「ノヴァ」——発動》

俺からも白い靄が発生しだす。『暴王状態』ではない。ノヴァのおかげで機体性能は数倍に撥ね上がる。

「「「ノヴァ——全開」」」

最初からフルスロットル。一気に方を付ける腹だ。

ウラヌスは氷の銃で氷弾を撃ちだす。凍てついた大気のおかげもあるのだろう、威力は高く、着弾と同時に氷の花が咲く。

俺と桜子はそれを避けながら、時にヒリユーのISから伸びた半透明の光の腕やら尻尾で防がれ、ウラヌスに肉迫する。

「クロウ！」

両手の甲から伸びる漆黒の爪。いつもと違う点は、爪の長さが2メートル近くになっていることだ。

「ぜああああ！」

「ぐう……」

リーチの伸びた爪でウラヌスの装甲を切り裂く。
俺はすぐにウラヌスから少し離れ、爪をしまい、牙を展開する。
ソード

俺が離れたと同時に桜子がウラヌスに斬りかかる。桜子の握る《心鬼紅骨》は僅かにオーラを纏っている。Mシステムを発動しているようだ。

アビスも接近し、黒い鎌を六本だして接近している。
だが、二人の攻撃は氷の壁によって防がれた。

（……便利だな。それに万能だ……）

相手のIS（PSI？）の評価をする。

（……そろそろケリをつけないと、こっちがやばくなるか……）

ノヴァはエネルギーを媒介にスペックを数倍に撥ね上げるものだ。
俺は暴王兵器のおかげでエネルギーを補給しながら戦えるが、桜子はそれができない。俺と桜子のノヴァには性能上昇の倍率の違いがある。俺よりも性能は上がらないが、その分使用するエネルギーも少ない。だが、もともと減っていたエネルギーだ。俺はまだ大丈夫だが、桜子はそろそろ尽きるだろう。

『桜子、アビス、下がれ。一気に方を付ける』

桜子とアビスは俺のトランスを受け取ってすぐさま下がる。

そして、桜子はノヴァを解除していた。同時に、アビスも消えていた。

「終わりだ。――――メルゼズ・ランス暴王の流星」

俺の掌から放たれる三筋の漆黒の線。

ノヴァのおかげでランスを通常よりも楽に、複数撃てる。

「!？」

分厚い氷の壁を貫いてウラヌスへと飛ぶ。

割れた氷の壁で視界は悪かった。ウラヌスが見えない。

「「「なっ!？」」」

氷の壁が崩れ落ち、ウラヌスがいた場所には何も無かった。これを見て、俺たちが思い立ったこと。

『テレポーター瞬間移動』

俺たちは辺りを見渡す。そして、何も無い空間からウラヌスともう一人。シャイナが出てきた。

「大丈夫ですか？　ウラヌス第三星将」

第三星将……通りで強いわけだ。

「助かった。　シャイナ」

「ドルキ第七星将は？」

あいつは第七星将だったのか。

「ドルキは死んだ」

「あなたは確か、ドルキさんに怪我を負わした子でしたね」

「やっぱりあの時ドルキを助けたのはお前だったか」

「はい。ドルキさんを助けたのは僕です。まあ、今回は迷ったので助ける前に死んじやいましたけど」

「わざと見逃したんじゃないのか？」

「そんなことをするはず無いでしょう。自ら戦力を削るなんて馬鹿なことはしませんよ」

「それもそうだな」

「あちらも終わるみたいですね」

いつの間にか来た一夏が福音のメンバーに加わっていた。ウラヌスとの戦いで気づかなかった。

「あちら『も』？ 逃げるのか？」

「逃げるということにしましょうか。あなたと殺り合うとこちらの被害が増えることになりそうですのでね。また、お会いしましょう」

そう告げてウラヌスとシャイナは消えた。

「終わったな」

「ええ」

「だな」

あっちもちょうど終わったようだった。

Side アゲハ out

CALL. 24 ?三人目の星将? (後書き)

ウラヌスとシャイナは原作同じ階級です。

感想などがあればお願いしますm ((m

C A L L . 2 5 ? 事件の終わり? (前書き)

これもスランプ気味です。

CALL. 25

? 事件の終わり?

Side 一夏

「作戦完了———といたいたいところだが、お前たちは独断行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

帰ってきた俺たちにはお説教だった。
今は大広間で全員正座をさせられている。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね?」

「ふん……」

さっきから山田先生は忙しく動いている。

「じゃ、じゃあ、一度休憩をしてから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身を見せてくださいね。——あっ! だ、男女別ですよ! わかってますか、織斑君!？」

……わかってます。

というか、『脱いで』の辺りから女子が自分の体を隠したのが、軽く傷ついたぞ。

俺ってそんなにジロジロ見たりする奴に見えるんだろうか……。

「それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ」

俺たちはそれぞれにスポーツドリンクのパックを受け取る。

「つてて……。うあ、口の中切れてるな」

「……………」

「な、なんですか？ 織斑先生」

こっちを睨んでいたので、つい口を開いてしまった。

「……しかしまあ、よく無事に戻ってきたな」

「え？ あ……………」

俺たちのみを案じてくれている千冬姉に、俺は心の中だけで感謝を言った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

なんでみんな俺を睨んでいるんだ？

「あの、織斑君？ みんなの診察をしますから、ええと——」

「「「「とつとと出てけ！」「」「」」

5人の声に押され、俺は慌てて廊下に脱出。

「ふう……」

今回の戦いは終わった。

福音との戦いで最も活躍したのは、俺、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラよりもIS稼働時間をもっとも短いはずのカブトだった。

攻撃は一切しなかった。だが、カブトはどうやってか、福音の砲撃をことごとく逸らしていた。

（でも、俺は守れたよな、みんなを）

俺と——白式は。

S i d e ー 一 夏 ー o u t

S i d e ー ア ゲ ハ ー

「朧」

帰還後、俺たちPSYRENドリフトは休んでいた。が、俺と桜子は朧の元に来ていた。

「なんだい？ アゲハ君、雨宮」

「一夏をどうやって治療したの？」

あの場に来ていた一夏の怪我が治っていた。

朧のキュアは応急手当くらいしかできないはずだ。

「僕は応急手当はしたけど動けるようになるまではまだ時間がかかるはずだよ」

「お前のキュアの腕が上がっているわけではないんだな？」

「多分ね。でも、一夏のあれは確かに不自然だ。なんであそこまで動けるんだろうね」

朧も一夏の謎の回復については疑問に感じているようだ。

「一夏の白式は第二形態移行していた」

「おそらく、それが関係している可能性がある」

俺も桜子も同じことを考えていた。

「しかし、ISに身体蘇生なんてできるのかな」

「だよな……」

「なら、訊いてみる？」

「束さんにか……」

ISの生みの親ならば知っているかもしれない。

Side アゲハ out



「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても42%かあ。ま、こんなところかな？」

空中投影ディスプレイに浮かび上がったパラメーターを眺めながら、その女性——篠ノ之束は無邪気に微笑む。

「はー。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで——」

「——まるで、『白騎士』のようだな。コナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

互いに背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、今では『白式』と呼ばれる機体に組み込まれている。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一歩目の機体『白騎士』と二歩目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は答えない。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私からしたら、確実にあのコアは初期化されたはずんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。しかし、東は別にわからなくても問題はない。

「……そうだな。私も一つたえ話をしよう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん？ でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？ とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私のもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次のたえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うねえ」

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」
束は答えない。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、12カ国の軍事コンピューターを同時にクラッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」

束は答えない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

そして、束は消えた。
忽然と。突然と……。



C A L L . 2 5 ? 事件の終わり? (後書き)

少し長くなるので最後と分けました。

CALL. 26

?臨海学校の終わり?(前書き)

短いです。

CALL. 26

？臨海学校の終わり？

Side アゲハ

「束さん」

「やあやあ、なんだい？ あっくん、さっちゃん」

「白式についてです」

「第二形態移行した白式に身体蘇生でもできるのか？」

「気づいてたんだ」

「なんとなくだけどな」

「落とされた一夏には怪我があった。いくら望月のキュアがあつても、怪我がなくなるなんてありえない」

「白式は生体再生があるんだ」

「生体再生!？」

「ISの中で唯一白式だけが？」

「そうなんだよ」

「そうですか」

これで一夏の怪我がなくなった理由がわかった。

「用件は以上だ」

「失礼します」

俺と桜子はそのまま旅館へと、気づかれないように移動した。
戻る途中に破壊音が聞こえたような気がするが、気にしてはいけな
い気がするので気にしない。

翌朝。朝食を終え、ISおよび専用装備の撤収作業に当たった。
10時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラスのバスに乗り込む。

昼食は帰り道のサービスエリアで取るらしい。

「あゝ……」

なぜか一夏はボロボロだった。

「すまん……誰か、飲み物持っていないか……？」

「……つばでも飲んでいろ」

ラウラ。

「知りませんわ」

セシリア。

「あるけどあげない」

シャルロット。

一夏は箒を見る。

「なっ……何を見ているか！」

一夏にチョップを喰らわせる筈。

「ふ、ふん……！」

これだから一夏が気づかないんだよ。 一夏も悪いけど、十分お前
らも悪いよな。

「アゲハ、飲み物持っていないか？」

「自分のしかない」

「私も」

「俺もだ」

「僕も」

「俺も」

PSYRENドリフト全滅！ 一夏はうなだれる。

「うー……しんど……」

「「「い、一夏っ」「」」

「はい？」

四人の声が重なって聞こえ、それと同時に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏君っているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」

20歳くらいで金髪のカジュアルスーツを着た女性だった。

「君がそうなんだ。へえ」

一夏を興味深そうに眺める女性。

「あ、あの、あなたは……？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え——」

ナターシャ・ファイルスは、一夏の頬に唇が触れた。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……？」

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……」

そして一夏が振り向いた。

「浮気者め」

「一夏ってモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなのでしょうね」

「はっはっはっ」

一夏に近づく4人。

「」「はい、どうぞ!」「」

一夏に投げられる500mlのペットボトル×4。 計2?。
絶対やられたくない。

Side アゲハ out

CALL. 27

?ウォーターワールド? (前書き)

遅くなりました。

夏休みの課題が面倒です……。

CALL 27

?ウォーターワールド?

Side アゲハ

八月。 今、IS学園は夏休みだ。

半分近い生徒が帰省している。 元々この世界には家が存在しない俺たちは学園内で過ごすので、暇になることがある。

「暇だ」

今も暇で仕様がなない。

「どこかに出かけるかい？」

そういえば俺たちの部屋割りと言ってなかったよな？
俺たちの部屋割りは

俺・朧

ヒリユー・カブト

桜子

一応一夏

だ。

一夏はシャルロットが部屋移動してからはずっと一人だ。

桜子に関しては一人が妥当だろうと言う理由なのに二人部屋を独占している。

「出かけるつつても行く場所大してねえしな」

「バイトでもするかい？」

「バイトねえ……。それにしてもどうやって戸籍を短時間で五つも作ったんだ？ 意図も簡単に作れるのはどうなんだ？」

「もしかしたら彼女の仕業かもね」

「あー……東さんか」

あの人ならなんか納得できる。

コンコン。

「アゲハ、ちょっといい？」

「いいぞ」

来訪者は桜子だった。テレパス使えばいいんじゃないかね？

「どうしたんだ？」

「ここ行かない？」

「ウォーターワールド？」

「そう。今月できたばかりで、前売り券は今月分が完売。当日券でも開場二時間前に並ばないと買えないらしいよ」

「そんな場所のチケットを、なぜ桜子が持っているんだ？」

「頂き物よ。行けなくなったからって貰ったのよ」

「ふーん」

ラッキーなもんだな。

「で、行くの？」

「行く。暇だし」

「そう。じゃあ、明日ね」

「急だなあおい」

「仕方ないでしょ。貰った身なんだから」

「ですよー」

「また明日ね」

「了解」

桜子は部屋をあとにした。

「早速君は暇が潰れたね」

「だな」

「何も無いとつまらないな」

それは同感だ。　この世界に完全に慣れたわけじゃないしな……。。

翌日、天候は快晴。
今はウォーターワールドにいる。

「なあ」

「「なに？」」

「また？」

既に気づいている方もいるだろう。　また桜子が二人いる。
アビスがまた出てきているのだ。

「別にいいじゃない。　たまには」

「たまにはって……。　またケンカしたら赦ねえからな？」

前にもあったのだ。　桜子とアビスが同時に出てきて、プールでケンカした結果、二人が怪我をしそうになったことが。

「だ、大丈夫よ。　前とは違うから」

「今回は大丈夫だと信じてるからな」

「「うん！」」

臨海学校でも二人と遊んだんだが、あの時は俺が二人のストレンジス付きだったので、肉体的ダメージが少しだけあった。

「ストレンジスは使わないでくれよ」

「大丈夫大丈夫♪」

本当に大丈夫なんだろうか……。

「さて、遊ぶわよ！」

『本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！ 参加希望の方は十二時までにフロントへとお届けください！』

そんなときに放送が入った。

『優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

あー、なんか……。

「「アゲハ！ 出るわよ！」」

やっぱり。

「俺見てるから二人で出てこいよ。 アビスはいつでも具現化できるんだから優勝商品の沖縄旅行は一緒に行けるし。 それに、絶対お前ら俺と組もうとして前の二の舞みたいになるだろ」

前の世界でプールに行ったときにケンカしたのはさっきも言った。

怪我しそうになったときは二人乗りのウォータースライダーに三人で流れ込んでそこでもケンカしていたため、二人がレーンから落ちたのだ。 その時は俺が身代わりになったが、何度も二人のケンカで自分がダメージを受けるのは正直ゴメンだ。

「俺は見てるから二人で行って来い。 な？」

「……わかった」

渋々だけども了承してくれたようだ。

こうして、最強コンビが結成された。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

CALL. 27

?ウォーターワールド? (後書き)

最近更新速度が遅くなっていますが、夏休みの課題も更新も頑張りますのでこれからも応援よろしくお願いしますm(_____)m

CALL. 28 ? 水上レース?

Side アゲハ

午後一時。

『さあ！ 第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！』

司会のお姉さんがそう叫ぶと同時に大きくジャンプをした。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになる。その所為なのか、主に男からの歓声と拍手が上がる。

『さあ、皆さん！ 参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！』

再びの歓声に参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応える。

その中に異様な威圧感を放つのが四人……。

その内二人は念入りに準備体操をしながら体をほぐしている見覚えのある二人。中国とイギリスの代表候補生の凰鈴音とセシリア・オルコットだった。

そして、もう二人は瓜二つで、“俺の彼女”こと雨宮桜子と、桜子の負の感情から生まれた“もう一人の桜子”ことアビスだ。二人は特に準備運動をするわけでも無く、参加者を見てから、コースを見ていた。

（桜子とアビスの優勝は確実だな）

一般人がサイキッカーに、それも素人ではなく、PSIを使いこな

せる二人に勝つなんてありえない。

「鈴とセシリアがどう足掻くのが見ものだな」

Side アゲハ out

Side 桜子

アビスとレースに出るのはよかったんだけど、まさか鈴とセシリアがいるなんて思わなかったわ。

二人はやる気満々みたいだけど、悪いけど私が勝つから。

「あの二人だけに注意しておけば絶対勝てるから」

「他のは無視してライズで一気に駆け抜ければいいでしょ？」

「そうだけど、二人は代表候補生だから一応意識しておくの。それと、ライズで飛ばしすぎるのはなしよ」

「えー」

「目立ちすぎるのはさすがに駄目だから。ライズは出しても5割。それ以上は駄目よ」

「しょうがないわねえ」

説得も終わったところだし、コースでも見て動きを考えよう。

『優勝商品は南国の楽園・沖縄の旅！ みなさん、頑張ってください！』

鈴とセシリアはこれに一夏を誘おうと思ってるんだろうね。二人は私たちに気づいてるけど、勝つ気でいたっけ。

あ、今二人揃って笑った。きっと一夏関係で妄想でしているんだわ。

このとき、私とアビスの思ったことが揃った。

（気持ち悪い……）

S i d e 〱 桜子 〱 o u t

S i d e 〱 アゲハ 〱

『では！ 再度ルールの説明です！ この五〇×五〇メートルの巨大プール！ その中央の島へと渡りフラッグを取ったペアが優勝です！ なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央の島へと続いています。その途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっています！ ペアの協力が必須な以上、二人の相性と友情が試されるということですね！』

中央の島はワイヤーで吊られ、泳いで渡るのは不可、ショートカットもできないようにされている。

しかも『妨害OK』。一般人ならよくできたコースだと思う。だが、代表候補生とサイキッカーには有利なだけだ。

『さあ！ いよいよレース開始です！ 位置について、よろい……』

パァンッ！ と乾いた競技用の音が響き、26名13組の参加者が一斉に駆け出す。

鈴とセシリアは開始早々に足払いを仕掛けてきた横のペアをジャンプでかわし、一番目の島に着地する。

次に向かってきたペアを軽くかわし、ついでに足を引っ掛けて水面へと落とす。

この立ち回りで注目を集め、妨害が集中した。

桜子とアビスは開始直後にスタートダッシュはせずに、目立たないようになっている。

真面目組と過激組で別れ、鈴とセシリアは先行した真面目組に離されていった。

それに加え、さっきから何度落とされても即復活し、妨害をする真面目組のグルがいるようだ。

桜子とアビスは妨害を避けながらもあまり目立つことなく真面目組に混ざっていた。

「「うりゃああああっ！」」

組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペア。そして落とされる。

だが今回は、妨害ペアの水着の上を奪い反対側の客席へ投げた。これにより、会場の男性人が沸いた。

「なんつうことしてんだよ……」

俺は鈴とセシリアの行動に呆れていた。

女性一人分しか支えられないはずの小島を二人は大道芸の如き動きで渡っていく。

『こ、これはすごい！ ふたりは高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？』

一般人がしないようなことをしています。

続く第二の島も、障害が意味を成さなく突き進む。

そして、第三の島、第四の島も難なくクリアー。

そして、第五の島でトップのペアが反転し、鈴とセシリアに向かった。

桜子とアビスはそれを見た瞬間に鈴とセシリアよりも後ろに下がった。

『おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！』

一般人が代表候補生に勝てるはずが……。

『ご存じ二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！ 仲がよいというのは聞いていましたが、競技が違えど息はぴったりですね！』

勝てるかもしれん。メダリストは一般人なんか目じゃないくらいに鍛えているだろうからな。

「……なんでメダリストがいるんだ？」

俺のつぶやきは空に消えた。

セシリアが突っ込んでメダリスト・ペアに立ち向かい、そして振り返った。そして、鈴に踏まれた。

「あ」

なんかヤバイ気がする……。

鈴がセシリアの顔を踏み台にして跳躍したが、そこに現れたのがアビス。アビスは空中にいる鈴を蹴り飛ばした。そして、桜子がフラッグを取った。

鈴はその蹴りの所為で落ち、セシリアは踏まれてバランスを崩したところにさらにメダリスト・ペアのタックルを受けて三人一緒に落ちていった。

「「ふ、ふ……」」

二人が落ちたときの倍ほどの高さの水柱が立つ。

「今日という今日は許しませんわ！　わ、わたくしの顔を！　足で！　——鈴さん！」

ブルー・ティアーズを展開したセシリアが、憤怒の表情で鈴へと向かう。

「はっ、やろうっての？　——シエンロン甲龍！　というよりも！　よくもアタシの邪魔をしてくれたわね、桜子！」

「ごめんなさ〜い♪　あなたよりもアゲハの方が大切ですもの」

アビスが鈴を挑発するように言う。

『な、なっなあっ!? ふ、二人はまさか——IS学園の生徒なのでしょうか! この大会でまさか二機のISを見られると思いませんでした! え、でも、あれ? ルール的にどうなんでしょう…?』

司会のお姉さんは興奮と困惑が混じっている。

「アタシとやろうって言うの? 受けて立とうじゃない!」

アビスがISを纏う。

「ちょっとアビス! 今すぐ止めなさい!」

桜子もISを纏った。

『なっ!? もしかして、この双子もIS学園の生徒なのでしょうか! まさか四機ものISが見られるなんて思っても見ないことでした!』

「あーもう! 桜子も止めろ!」

俺が急いで暴王を起動して、ウイングで四人の戦闘の流れ弾を喰らいながら俺も四人の中に混ざる。

『なあああ! あのISを纏っているのは男!? あの子がそうなのでしょうか!』

「アビス! お前もやってどうすんだ! 桜子! 早く止めるぞ!」

「ええ！」

戦闘の流れ弾はおそらく大丈夫。

「俺が時間を稼ぐうちにあいつらに幻覚を見せてくれ」

「わかったわ。ただ、幻覚を見せても暴れると思うけど……」

「あいつらの動きが遅くなればそれでいい。アビスにはかけるなよ」

「わかったわ」

『アビス、鈴とセシリアに幻覚を見せる。動きが遅くなったら鈴にお前の黒鎌でやれ』

『りょうかい』

アビスにも指示を出しておく。

俺は鈴とセシリアを相手に攻撃を防いでいた。

「アゲハ！ 邪魔すんじゃないわよ！」

「今日こそ鈴さんを許すわけには行きませんわ！ 邪魔しないでくださいまし！」

相当怒ってるな。

マインド・ジョウジ・ニティ・デスサイズ
「M・J凶気の剣鎌」

桜子の心鬼紅骨にエネルギーにエネルギーが纏わり、巨大な鎌になった。

『いいわよアゲハ』

『わかった。俺は避けるから気にせずによれ』

『わかったわ』

俺は二人の攻撃を防ぎながら、より集中する。

二人の意識は俺に向いている。そして、俺たちの頭上から、桜子が巨大な鎌を持って急加速してきた。

ザクツザクツ！

俺はタイミングを見計らって回避し、鎌は二人のみに当たった。そして、二人の動きが、ほんの僅かに遅くなった。

「アビス！」

「まっかせなさ〜い♪」

アビスは鈴に6本の黒鎌を突き刺し、切り裂き、装甲を破壊し、絶対防御を連続で発動させていった。

俺は流れ弾がなくなったのをいいことに、保険に二機だけ残してセシリアにクロウで斬る。ウイングが装甲を削り、エネルギーを喰らっていく。俺は両手の黒爪でエネルギーを吸収しながら、絶対防御も発動させている。まともに回避をしないおかげであつという間にエネルギー切れして落ちた。

「とにかく！　こういつたことは！　金輪際！　しないでください
ね！」

「はい………」

「本当にすみませんでした！」

俺は土下座をしている。

「あなたには感謝しないといけないのに、土下座なんてやめて」

「アゲハ、元々の発端は鈴とセシリアだからあなたが謝らなくてもいいのよ」

俺と桜子、アビスの活躍により、被害はほとんど無かった。流れ弾をウイングに処理させておいて正解だった。

「あ、あのう……」

「何か!？」

「い、いえ、あの、桜子さんたちの優勝はどうなったのかなと思いますして……」

「あなたたちの所為で途中で中止。優勝者はいないの。表彰までが大会だから」

「「!？」」

桜子とアビスがそのセリフで落ち込んだ。

「あ、安心して。あなたたちにはお礼としてあげるから」

「そうですか! ありがとうございます!」

一発で元気になりました。

「とにかく、そちらの二人には学園の方から身柄の引取り人が来るらしいから、あと少し大人しくしてなさいよ」

「「はぁ……」」

「俺たちは帰ってもいいのでしょうか？」

「あ、いいわよ。賞品については後日こちらから学園に送りますので、今日はもう帰ってもらって構いません」

「「失礼しました」」

俺たちはそのまま帰路についた。

S i d e ー ア ゲ ハ ー o u t

CAL. 28 ?水上レース? (後書き)

アゲハと桜子の旅行は書くかどうかわかりません。

頑張ってみますが、ネタが思いつかないので各確率は低いです。

感想などお願いしますm (|) m

CAL. 29 ?メロンパン? (前書き)

タイトルが思いつかなかったので、経緯のメロンパンにしました。

Side 〱 朧 〱

僕と千冬さんは今日、街に出ている。

なぜ千冬さんがついてきているかというところ……

僕がIS学園を出るときに千冬さんに見つかった。

「望月……一人か？」

「そうですけど何か？」

千冬さんは何かを考えているみたいだ。

「夜科や雨宮、朝河と霧崎とは行かんのか？」

「アゲハ君は雨宮ちゃんは二人で出かけているし、わざわざ朝河君たちを誘うのもなんだったからね」

「……私が付いていこう」

なんでそんな風になるの？

「それはなぜかな？」

一応聞いてみた。

「奴らと一緒にいるお前しか見たことが無いからな、お前が一人だと何が起こるかわからん」

……と言う事らしい。

「にしても織斑先生」

「今はプライベートだ。織斑先生と呼ばなくてもいい。それに、お前が言うのと周りの視線が余計に刺さる」

僕と千冬さんは隣に並んで歩いている。

周りの視線が凄い。男女問わず僕たちに向けられている。

千冬さんははっきり言って美人だ。それに、自分で言うのもなんだけど僕はルックスがいい。あっちでは一応俳優してたしね。で、そんな二人が並んで歩いて視線が向けられないわけが無い。

「じゃあ千冬さん」

「なんだ？」

「本当に良かったのかい？ 僕と出かけるなんて」

「言ったであろう。お前が一人だと不安だと」

「じゃあ何が不安なんですか？」

「何か事を起こすかもしれないし、詳しくは知らんが、お前の性格を危惧してのことだ」

僕の性格？

「そうですか」

まあいいや。あまりに気にしないことにしよう。

「お前はどこに行くんだ？」

「パン屋を探しに来たんだ」

「パン屋？ パンなら学園内の食堂でも食えるだろう。わざわざ探しに来ることもあるまい」

「あそこにはメロンパンがないからね。おいしいところを探しに来たんだ」

「そういうことか」

理解したようだ。

「メロンパンを扱っている店は片っ端から見ていくよ」

「わかった」

時は進んでお昼時。 とある店にて、僕はステーキを食べている。

「いい店は見つかったのか？」

「うん。 見た店全部良かった」

昼前に回った3軒のパン屋のメロンパンを食して、3軒とも気に入

った。

味に飽きることはそう簡単にはならないだろう。

「で、午後からはどうするんだ？」

「うーん……メロンパンはもういいからな……」

「……特に用は無いのか？」

「そうなるね」

「そうか。 ならば、私の買い物に付き合ってもらおうでしょう」

「……はい？」

S i d e 〱 朧 〱 o u t

S i d e 〱 千 冬 〱

望月についてきたのはいいが、メロンパンばかり食べている。

昼までに食べた数は7個。メロンパンが好きなのはわかった。

そして今、望月はステーキを食べている。

……その体のどこに入るんだ？

「いい店は見つかったのか？」

昼ご飯を食べながら聞いてみた。

「うん。見た店全部良かった」

全部か。メロンパンに種類があった店があったから、入った店順に望月が食べた個数は4・1・2。私も小さいものをいくつか食べてみたら、どれも美味かった。私も気に入った。

「で、午後からはどうするんだ？」

ここにあるパン屋はすべて回った。メロンパンを扱っている店があるかもしれないが。

「うーん……メロンパンはもういいからな……」

「……特に用は無いか？」

「そうなるね」

「そうか。ならば、私の買い物に付き合ってもらおうでしょう」

「……はい？」

言ってから気づいた。私は何を言っているんだ？

「僕としては構わないよ？ 成り行きだけど僕に付き合ってくれたからね」

なぜ私がこんなことを言ったのかは知らんが、望月は了承してくれた。

「では、昼からは私に付き合ってもらおう」

「わかった」

何はともあれ、昼からの予定が決まった。

S i d e 〱 千冬 〱 o u t

CAL. 29 ?メロンパン? (後書き)

これは千冬さんフラグ?
思い付きって怖いΣ (ロ、111)

C A L L . 3 0

? @クルーズ? (前書き)

更新遅れました!
すみません!

CALL. 30

?@クルーズ?

Side 〽 第三者

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

フランス代表候補生のシャルロット・デュノアはとある店でバイトをしていた。

彼女がなぜこんなことをしているかと言うと、時は遡る。

シャルロットはラウラと買い物のために街に出ていた。

二人は特にラウラの服を買うために『サード・サーフィス』という店で、二人を中心に騒ぎ（悪い意味ではなく、モデルのような扱いで大人気だった）になり、十二時を過ぎたところでランチを取っていたときのことだった。

「……どうすればいいのよ、まったく……」

隣の席の二十代後半と思われる女性の声が聞こえ、悩みがあるのか料理は冷め切ってしまったている。

「はぁ……」

深淵の色が見えるため息。

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「た、たまたまだ。……で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

そう言ってシャルロットは席を立つなり女性に声をかけた。

「あの、どうかされましたか？」

「え？　——！？」

二人を見るなり、ガタンッ！　とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる。そしてそのまま、シャルロットの手を握った。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？　」

「「え？」」

こんな感じでバイトに勧誘され、事情を知ったシャルロットたちの現在に至るわけだ。
ということで冒頭に戻る。

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取って、トレイに乗せた。
そんな単純な動作にさえシャルロットの気品がにじみ出て、臨時の同僚にあたるスタッフたちは、ほうっとため息を漏らした。
初めてのアルバイトだというのに、その立ち居振る舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、けれど嫌味ではない。
そんなシャルロットの姿に、女性客のほとんどが見入っていた。

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

年上であるにもかかわらず、女性は緊張した面持ちでシャルロットに答える。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？　よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。 え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで」

「わ、私もそれでっ」

この二人は常日頃からノンシュガー・ノーミルクなのだが、今日に限ってはあえて目の前の美形執事に奉仕してもらいたい一心でわざとそう答えたのだった。

それを知ってか知らずか、シャルロットは柔らかな笑みの浮かべてうなづく。

「かしこまりました。 それでは、失礼いたします」

女性客は安全にシャルロットに見入っていた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう……」

それぞれ、カップを受け取った女性客は、ぎくしゃくとした動きで一口飲んだ。

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください。

お嬢様」

綺麗なお辞儀をするシャルロットはまさしく「貴公子」だった。

一方、ラウラは男性客三名のテーブルで注文を取っていた。

「ねえ、君可愛いね。 名前教えてよ」

「……………」

「あのさ、お店何時に終わるの？　一緒に遊びに——」

ダンッ！　と、テーブルに垂直に叩きつけられたコップが大きな音と一緒に滴を散らかす。

面食らっている男性客に、ぞっとするほど冷たい声で告げた。

「水だ。　飲め」

「こ、個性的だね。　もっと君のことよく知りたくなっ——」

台詞の途中で、オーダーを取ることなくテーブルを離れる。　そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持って行った。

「飲め」

ソーサーが割れるのでさっきよりは多少やさしめにカップをテーブルに置く。　それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮なくこぼれた。

「え、えっと、コーヒー頼んだ覚えは……」

「何だ。　客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけです……」

ラウラに好印象を持たれたのか、それとも、ラウラの態度に萎縮しているのか、男は言葉を探りながら会話を続ける。

「た、例えば、コーヒーにしてモカとかキリマンジャロとか――」
言葉を遮るように、ラウラはまったく笑ってない目で、その顔に嘲笑を浮かべた。

「はっ。 貴様ら凡夫に違いがわかるとでも？」

「いや、その……………すみません……………」

結局、ラウラの絶対零度の視線と許しのない嘲笑に折れた。

「コーヒーを飲んだら出て行け。 邪魔だ」

「はい……………」

ドイツの冷水と呼ばれたラウラの一面は今でも健在のようだ。
しかし、その人を寄せ付けない態度ですら、美少女の外見を伴えば魅力となるらしい。

「あ、あの子、超いい……………」

「罵られたいつ、見下ろされたいつ、差別されたいいつ！」

特殊な性癖を持つ者までいた。
そんなのを無視して、他の客やスタッフはそれぞれやり過ごしていた。

「あ、あのっ、追加の注文いいですか！？ できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒーください！ 銀髪のメイドさんで！」

「こっちにも美少年執事さんをつつ！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

そんな騒動は一気に店内に感染し、爆発的に喧噪を大きくしていく。そんなときに一組の男女のペアが来店した。

Side 〳 第三者 〵 out

Side 〳 臍 〵

「千冬さんも女性と言うことですね」

僕と千冬さんは昼食後に買い物に付き合った。

日用雑貨を買ったり、千冬さんの私服を買ったりした。

「どういふことだ、望月。 言ってみろ」

どうやら怒らせてしまったようだ。

「学園内でのあなたの評価は鬼教官つてところですよ？ 自覚はしているのでは？」

思つたことをストレートに言つてみた。

「そんなあなたが僕と二人っきりで、傍から見ればデートと思われるでも仕方がない行動をしていて、人目を気にして、たまに顔を赤くしたりしてましたよ？」

さりげなく千冬さんを観察して見つけたことだ。

「だ、誰がデートだ！？　これはお前の行動に不安があるからこうしたまでで、断じて顔を赤くしてなどいない！」

僕見てたのになあ……。

「じゃあなんで僕を買い物に付き合わせたの？　わざわざ僕を連れまわさなくてもよかったに、別れずに一緒に回ったのはなぜ？」

僕がどんな言葉を出し、千冬さんに問い詰めていく。

すると、（恥ずかしいのか、怒っているのかはわからないけど）見る見るうちに千冬さんは顔を赤くしていった。

（あともう一息かな？　何に對してかはわからないけど）

「服を着たときの感想を聞いたのはなぜ？　僕の答えを聞いて顔を逸らしたのは誰？　それから「もういい！　それ以上言ったら殴るぞ！」……そうですか」

顔を真っ赤にして千冬さんに脅された。

あなたの一撃はきつとライズがあってもたたじゃ済まないと思うからそれ以上は言わないことにした。

「ふう……恥ずかしくて死んでしまいそうだ……」

千冬さんが何かを言った気がしたが、僕は聞き取れなかった。周
りの音がなかったら聞けたかな。

「じゃあ、最後にあそこに行きましょうよ」

「@クルーズ？ いいだろう」

少し落ち着いてきた千冬さん。

僕たちは@クルーズに入った。

「@クルーズへようこそ……ってええ！？ 隼さんに織斑先生！？」

そこにいたのは執事服を着たシャルロットだった。

「あ、シャルロットちゃんだ。 バイト？」

「え、あ、はい。 二人は……」

「早く案内をしてくれないか？」

「あ、はい、失礼いたしました！ こちらでございます！」

千冬さんに遮られ、慌てて案内するシャルロット。

「め、メニューが決まりましたらお呼びください！」

そう言ってシャルロットは賑やかな店にまぎれていった。

「まさかシャルロットちゃんがいるなんて。 なんか以外」

「見られてしまうとはな……。後で口止めしておかなければ……」

千冬さんの不安は学園で噂が流れないからしい。

「ボーデヴィツヒ!? お前もいたのか!?!」

「きよ、教官!? な、なぜこんなところに!?! しかも望月と一緒に!?!」

「話は戻ってからだ。仕事は疎かにするな。それと……」

一度区切って言葉を吐く。

「珍しいこともあるものだな」

「し、失礼します!!」

ラウラは顔を赤くしてダッシュでカウンターへと戻っていった。

「あ、注文しなきゃ。千冬さんは何にします?」

「コーヒーだ」

千冬さんらしいですね。

「すみませーん。コーヒーとストロベリーパフェ下さい」

「かしこまりました。少々お待ちください」

別のメイドに注文する。

「お前、一日でどれだけ甘いものを食べるんだ？」

それってメロンパンも含まれてるの？

「うーん……自分の気の進むままに食べるだけかな？」

「はぁ……」

呆れるようにため息をつかないでください。
そんなとき、騒ぎが起こった。

「全員、動くんじゃないえ！」

雪崩れ込んできた三人の男が怒号を発し、銃声が響いた。

「きゃあああっ!？」

「騒ぐんじゃないえ! 静かにしろ!」

男たちの格好は、ジャンパーにジーパン、顔には覆面、手には銃。
背中バックからは何枚かの紙幣が飛び出していた。

（なんか古い……）

きつと僕以外にも思っているはずだよ。

「あー、犯人一味に告ぐ。 君たちはすでに包囲されている。 大
人しく投降しなさい。 繰り返す——」

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

やっぱりそう思うよね。

「ど、どうしましょう兄貴！ このままじゃ、俺たち全員——」

「うろたえるんじゃないっ！ 焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金支払って手に入れたコイツがあるし」

強盗の反応も古い。
威嚇射撃。

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げた。

「おい、聞こえるか警官ども！ 人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！ もちろん、追跡車や発信機なんかつけるんじゃないぞ！」

「（千冬さん、IS使って黙らせてもいいですか？）」

「(やめておけ。 私に協力しろ)」

「(了解)」

「(私が気を引くうちにあいっらの銃を奪え。 お前ならできるだろう?)」

「(できますよ)」

「(しくじるなよ)」

「(わかってますよ。 じゃ、殺りますか)」

「(字が間違っていないか?)」

「(気のせいです)」

「(まあいい。 行くぞ)」

「(はーいっと)」

僕たちは動き出す。

千冬さんが速攻でショットガンを持つ男を仕留める。

「な、何してんだ! 大人しくしろ! さもないと——」

「さもないと、どうするの?」

「この銃で……」

「銃？ それって、これのこと？」

相手が気づいたときには既にハンドガンとサブマシンガンを奪われた後だった。

「千冬さん、僕の役目はこれまでです。僕は攻撃は不向きですの
でね」

「て、テメエ！ 何しやがった！」

「何って、君たちの銃を奪っただけだけど？ それいいの？ 僕
に気を向けて」

僕が言った瞬間に、その男は千冬さんの手によって気絶させられた。

「これでお終いだね」

僕は握っているハンドガンのグリップで残ったリーダー格の男を殴
りつける。

ライズで強化された一撃は、男の意識を刈り取った。

「なんだ。 それなりにできるではないか」

「アゲハ君たちには及ばないよ」

僕程度、アゲハ君や朝河君、雨宮ちゃんの足元にも及ばない。

「お、終わった……？」

「助かったの、私達……」

「い、一体何が……」

しばらくの間静まり返っていた店内は、危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々。何度もまばたきを繰り返し僕たちの姿を呆然と眺めていた。

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！ あ、ありがとう！ 二人とも、ありがとう！」

助かった実感がわいたのか、突然店内が騒がしくなる。その様子を見て、警官隊も詰めかけてくる。

「シャルロットちゃん、ラウラちゃんは一応逃げておいた方がいいよ」

僕たちの後ろで立ち尽くしている二人に声をかける。

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」

軽く四十平方メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾が見えた。

最後まで古いのはなぜだろう。

「やっぱり全然駄目だね。二人とも、悪いけどお願い」

僕は手に持つ銃をそれぞれ二人に渡す。

ダダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

高速五連射×2の弾丸は、的確に起爆装置と爆破の信管、そして導線だけを撃ちぬいた。

「諦めたら？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

ジャキッ！ と二丁の拳銃を突きつけられ、さっきまでの威勢がなくなり、男は震える声で謝った。

「す、すみっ、すみませんっ！ も、もうしまっ、しませんっ。
い、命ばかりはお助けをっ……」

「二人は行け」

その言葉と同時に千冬さんが男の意識を刈り取った。
その後、男たちは警察に引き渡された。

IS学園に戻り、シャルロットちゃんとラウラちゃんに口止めもし
っかりしておいた。

S i d e 〽 朧 〽 o u t

C A L L . 3 1 ？その日の終わり？（前書き）

27話から30話のIS学園に戻ってからの話です。
30話の最後の詳しく？したものです。

CALL. 31

？その日の終わり？

Side 〱 朧 〱

「朧、どこに行ってたんだ？」

「少し街にね。 アゲハ君はどうしたんだい？ 疲れているように見えるけど」

現にアゲハ君はベッドに倒れている。

「あゝちよつとな……」

「まあ、プールで遊んだんだから疲れるのは当たり前か」

「それだけじゃないけどな……」

何かに巻き込まれたのかな？

「そういえばさ、女子から聞いたんだけど織斑先生と出かけたってのは本当なのか？」

ここを出るときに見られたのかな？

「うゝん、アゲハ君ならいいかな。 誰にも言わないでよ？」

「わかった」

「千冬さんと出かけたのは本当だよ。 千冬さん曰く僕の行動が心

配らしい」

「……なんかわかる」

納得しちゃった。

「……アゲハ君は僕に対してどんな印象を持っているんだい？」

「どんなってな……。 そうだな、変わり者だな」

「はっきり言うね……。 まあ、それは僕自身感じていることだけ
どさ……」

「ま、それがお前だし、仕方がないだろ」

「簡単に言ってくれるね」

アゲハ君らしいのかな。

「なあ臆、別にそれくらいのことなら口止めしなくてもいいんじゃないか？」

「千冬さん曰く、年頃の女子はそれらしいことだけで騒がしくなる、
だそうだ」

「そういうもんか？」

「そういうものじゃないのかな？ 僕にはよくわからないけど」

恋バナとかに夢中になるくらいしかわかんないけど。

「ま、俺は言わねえからいいや。 てか、織斑先生にばれたら死ぬし」

「それは同感。 本当に普通の人間か疑わしいよ」

「ある程度のライズだったら対抗されそうな気がするしな……」

納得してしまうな。

まあ、それが“織斑千冬”という人間なのだろう。

Side↳朧↳out

Side↳千冬↳

「織斑先生」

「なんだ？」

「望月君と一緒に外出していったって聞いたんですけど、本当なんですかあ？ デートですかあ？」

ボーデヴィツヒたちには、私と望月のこと（@クルーズと一緒に入ったこと）を口止め

「……山田君、私は弄られるのが嫌いだ」

ギリギリギリ……！

アイアンクローで山田君の頭を鷲掴みにしている。

「わかりました！ わかりましたから頭を離してくださいい！」

「仕方がない」

「痛かったあ……」

山田君は涙目にしながらつぶやいている。

「で、でも、望月君と出かけたのは本当なんですか？」

目を輝かせながら聞いてくる。

「はあ……。あまり言いたいものではないが……。奴と出かけたのは本当だ。ただし、監視のためだ」

「監視、ですか？」

「ああ。奴を放っておくと何が起こるかわからん。いつもなら夜科たち、望月と関係を持つ者が抑えているが、奴一人の時に何が起こるか予測ができんだ」

「……夜科君たちの話を聞いたのと、日頃の望月君の様子を見えますが、そこまで危ないような気がしませんか……」

「私自身もそこまで危ない気がしないが、奴は私たちが思っている以上に危険なのかもしれん。あいつらを見ているとそう思えてくるのだ」

あいつらが背負ってきたものは私たちが思う以上に大きいかもしれない。

当事者にしかわからないものがあるはずだ。

「そうですかあ」

「一応夜科たちには気をつけておけ」

「わかりました」

奴らは危険だ。

それに加えて頼もしい。

何も知らない私たちは、できるかすらわからないが、奴らの支えになることしかできない。

S i d e 〽 千 冬 〽 o u t

CALL. 31 ?その日の終わり? (後書き)

うまく書けているか心配です。

感想などがあればよろしくお願いします m (|) m

CALL 32

？伝えられる事実？（前書き）

お久しぶりです。

アゲハと桜子の旅行話を考えてはいたんですが、未だに思いつきません……。

というか、五泊六日が長すぎて内容が思いつきません……。

えー、旅行話がいつになるか、あるかすらもわかりませんが、とりあえず32話です。

CALL. 32

？伝えられる事実？

Side アゲハ

「アゲハ、話って何だ？」

「皆さん揃っているみたいですが……」

「しかも織斑先生もいるし……」

今、俺の部屋に一夏たち専用機持ちメンバーと、俺たちPSYRENドリフトのメンバーが揃い、それに加えて織斑先生もいる。

「夜科、本当に話すのか？」

「ああ。こいつらも気になってるはずだ。クラス対抗戦、臨海学校の福音の暴走。あのときに現れた奴らについて。そして、俺たちについて」

一夏たちは反応した。

今まで流してきた問題だ。

気になって仕方がなかったのだろう。

「今まで流してきたが、今日話そうと思ってな。俺たちの秘密を」

「……教えてくれ。アゲハたちがどうしてあんなに強いのか、あのときなんで人を殺したのか……」

「「「「「なっ!？」」「」「」「」

箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット、それに織斑先生もが反応する。

あの戦闘時は見えていなかったのだろう。

織斑先生はモニタリングできていなかったのだろう。

「……見ていたのか。 いや、むしろ今までよく黙っていたな」

「夜科、お前は这个世界でも殺ったのか……？」

「ええ。 後々邪魔になるんで。 というより、今度は俺たち以外の誰かが狙われる可能性があったんで殺しました」

「デメエ、なんで人を殺したのにそんなに普通でいられるんだよ！
なんとも思わねえのか……！」

「一夏、俺は、俺たちは元々これが普通だったんだよ」

殺らなければ殺られる。

それが、P S Y R E N世界で生き延びる術だ。

「！？ どういうことだ……！」

「それについて話すんだよ。 聞け」

「一夏、覚悟がないならこの場から立ち去れ。 俺たちが過ごした時間は、お前らが思っているほど優しくねえぞ」

ヒリューが一夏に言う。

その言葉は他の面子にも当然聞こえていた。

「……教えてくれ」

「まず始めに、俺たちはこの世界の人間ではない。桜子やヒリュ―たちがここに落ちてきたときにいた奴を覚えているか？」

「覚えてる。あの変な奴だろ」

「そう言えばそんなのがいましたわね」

「あいつは俺たちがいた世界で、俺たちの運命を変えた人間が生み出した化身だ。奴は時間を越えて、俺たちを死のゲームへと誘った」

「死のゲーム？」

「赤いテレフオンカードを授け、入国審査を受けたものをネメシスQにより召集し、ゲームに参加させた。場所は荒廃した未来の日本。俺たちは生死を懸けた戦いに巻き込まれた」

「そのネメシスQとやらはなんだ？ 人間を未来に飛ばすなど聞いたことがない」

「荒廃したってどういうことよ？」

「焦らないで。話してあげるから」

「それが俺たちの世界でいたサイキッカーによる力だ。あいつは時間を越えるPSIが使えた。だから未来へ飛ばせたんだ」

「荒廃した日本。それは地球に落ちた一つの隕石と、数人のサイキッカーが原因の荒れ果てた世界だ」

「じゃあそのネメシスQというのは日本を救うために人々を送っていたのですか？」

「いいや違う。あいつがゲームを起こした理由は未来を救うためなんかじゃない。世界が崩壊した原因を知るためだ」

「そして、サイレン世界の空気を吸うと、P S Iが使える人間が生まれる。天然のサイキッカーもいるけどね」

「気になってたんだけど“サイ”ってなんだ？」

「サイキッカーの使う超能力のことよ。全てP S Iは『裂破のバースト』『心波のトランス』『強化のライズ』で構成され、資質と訓練で様々な事象を起こすことができるわ。そして、バースト、トランス、ライズの3つを包括し融合させ、精神、肉体、P S Iを完全に融合させる力を『ノヴァ』と言うわ」

「ノヴァは人間の限界を超え、一時的に強力な力の使用を可能にする、P S Iの境地だ」

「私とアゲハ、それとこの世界にはいないけど、未来のアゲハのお父さんだけが使えるわ」

「ノヴァは適正がある。そのため、俺と桜子しか使えない」

「ねえ、この際だからさ、この世界の人間にP S Iが見えるか試してみようよ」

話を割って入ったのは臃だった。

「まあいいか。この中だと、ヒリユーが一番いいな。ヒリユー頼む」

「わかった」

ヒリユーは右手からドラゴンの翼を出した。

「見えるか？」

「見えない」

「私もだ」

「僕も見えないよ」

「え？ 薄っすらだけど俺は見えるぞ？ なんか羽見たいのが出るよな？」

「「「「！」「」」」」

一夏は見えるみたいだが、それ以外は見えないみたいだな。

「おそらく、一夏、お前には資質がある」

「その可能性は高いわね。PSIは稀に自然に発生する人もいるから、その可能性はあるわ」

「もしかしたら前にCUREを掛けたのが原因かもしれない」

「ま、一夏にはP S Iを使える資質があるってのはわかったな」

「そうなのか？」

「その話は後にして、話を続けるぞ」

「次はサイレン世界を支配していた組織についてだ」

俺たちはサイレン世界であったことを話し終えたので、敵対組織について話し始めていた。

「組織の名は『W・I・S・E』。創始者の名は天戯弥勒^{アマギミロク}。最後に俺と共闘した男だ」

「未来では命がけで地球を守ったっていう奴か」

「W・I・S・Eは強力なPSIを使う星将と呼ばれる奴らがいる」

「銀髪バイザーはドルキ。第七星将だったけど、臨海学校の人にアゲハが殺したわ」

「そして、氷を使っていた奴はウラヌス。第三星将だ」

「瞬間移動をする金髪はシャイナ。奴もおそらく第四星将だろう」

「もしもお前らが星将に出くわしたら逃げろ。今のお前らでは確

実に殺される」

「この世界のW・I・S・Eは俺たちの世界のW・I・S・Eと似ているが、未だに謎に包まれた戦力だ。油断はできないし、前の世界と同じ強さとも限らない」

「W・I・S・Eの総力を相手に、あなたたちを守りきる自身はないの」

「と言うわけで、一夏、お前にはP S Iを覚えてもらうから」

自衛の為だ。

「あ、そう言えば俺たちがこの世界に飛ばされた理由教えてなかったな」

ふと思い出した。

話したんだし、こいつらも関わる可能性が大きくなった。話しておいたほうがいいだろう。

「俺たちがこの世界に飛ばされた理由、それはこの世界の破滅の未来を救うためだ」

「私たちをこの世界に飛ばした張本人の話だと、この世界に私たちの世界の地球を喰らおうとした『クアト ネヴァス』が近づいているみたいなの」

「だから俺たちはクアト ネヴァスの意思の代弁者を見つけ出し、殺さなければならぬ」

「それが俺たちの目的だ」

俺たちは全てを話した。

俺たちは一夏たちを巻き込んでしまった。

俺たちはもう後には引けない。

「俺たちはこれから必要ならば殺していく。邪魔をするならお前らでも容赦はしない」

「私たちを止めようとしないでね」

「なあ、俺にも手伝わせてくれ」

一夏がそう述べた。

「お前は殺される覚悟、殺す覚悟があるのか？ 手伝うとはそういうことだ」

「お前の守りたいと言う気持ちはわからんではないが、俺たちがやることは殺し合いだ。競技なんかじゃない。死ぬ可能性もある」

「それでも手伝うって言うの？」

「ああ。俺たちの世界が減びるって言われて黙ってみてられないから。足手まといになるかもしれないけど、お前たちの手助けをさせてくれ」

「私も手伝わせてくれ！」

「わたくしも！」

「アタシも！」

「僕も！」

「私もだ！」

「お前ら、今の實力じゃあ無駄死にするだけだぞ？」

「お前らは殺される覚悟と殺す覚悟を持てると言うのか？」

「敵は強大よ？ 私たちの手が負えないほどに強大で強力かもしれない」

「勝ち目が100%ある保障もないよ」

「逃げ切れるつつう確証もねえ」

「それでも、お前らは俺たちの手伝いをしたいって言うのか？」

「「「「「ああ（ええ）（うん）」」」」」」

「だそうだ。 どうするんだ？ 織斑先生。 こいつら、死ぬ気み
たいですよ？」

「死んでもらっては困る。 これからはお前たちだけに特別メニュー
ーでも渡して実力アップを図るしかあるまい」

「だってよ。 W・I・S・Eとの戦いの前に死ぬなよ。 特に一
夏はな」

「なんたってP S Iの特訓だからね。
うよ」

僕は治療に専念させてもら

「ああ。頼むぞ、朧」

「任せてよ」

これからもっと忙しくなる。
気合を入れなおさねえとな。

S i d e ー アゲハ ー o u t

CALL. 32 ?伝えられる事実? (後書き)

一夏にPSIの資質があるようにしました。
一夏はどんなPSIを覚えるでしょうか?
ただ今考案中です。

CALL. 33

? 訓練開始?

Side アゲハ

「これは何だ？」

「見ての通りコーヒーだが？」

「何で特訓にコーヒーが出てきてるんだよ!?!? くつろぐのか!?!?」

「そんな訳ないだろ」

「俺とアゲハはコーヒーから始まったんだよ……」

あ、懐かしい……。

「僕はあの世界で覚醒したら使えてたね」

あの時は助けられたな。

「俺はなんか死の脅威が見えたんだよな」

ヴァイジョンズ
幻視って便利だよな。

「そう言えばカブトって攻撃逸らさなかったか? 前に見たことがあるんだが」

「私も見たわ。霧崎、あんたのPSIは死の脅威を見る幻視以外に何かあるの?」

「あれは死の脅威を逸らせたんだ。 あいつは俺以外には見えないんだよ」

「そうなのか」

「ああ」

「あのー皆さん？ いい加減説明して欲しいのですが……？」
置いてけぼりにされた一夏が声をかけてきた。

「あーすまん。 まあ、俺とヒリユーはコーヒーから始まったんだよ」

「このコーヒーが何でP S Iに繋がるんだ？」

「P S Iは思念の力よ。 イメージを現実に変える力なの」

「ま、見たほうが早い」

「そうだな」

桜子がコーヒーにクリームを入れ、そして、前に俺とヒリユーに見せたように、コーヒーにクリームの模様を描いた。

「すげえ……」

「ざっとこんな感じね」

「これはP S Iの基本一つのテレキネシスだ。一夏、これと同じ模様をコーヒーに描け」

「お、おう。でも、どうやって……」

「ヒントはもう出してあるから」

さっき言ったばかりだな。

「早くしないとクリームが混ざっちゃうよ？」

「P S Iは思念の力だって言ってたな……イメージすればいいんだよな……?」

「そうだ。イメージするんだ」

「眼を閉じて、意識を集中させて、頭の中にカップを思い浮かべるの」

「そして、創りあげたイメージを眼を開いて投影する」

一夏は俺らのアドバイス通りにした。

「……頭が……熱い」

「できたみたいだね」

一夏は桜子の描いた模様に酷似した模様をカップに描いていた。

「初めてのP S Iでここまで形になるとは思わなかったな」

「アゲハなんて全くできなかったのにね」

「今もできねえよ」

俺はテレキネシスができない。

俺はバーストは『暴王の月』メルゼス・ドアしかできないんだ。

修行のおかげでトランスが一応できるようになったが、バーストは暴王の月以外使えなかった。

「できた……のか？」

「ああ。お前はやっぱりP S Iの資質がある。今は何も考えるなよ。脳が潰れるぞ」

P S Iに慣れないこいつが何度もP S Iを使ったら簡単に脳が潰れちまうだろう。

「しばらく休め。P S Iの使いすぎは死ぬからな」

「……わかった」

「じゃあ次はバーストだ。

さっきやったのを発展させるんだ」

「発展？　つまり、何するんだ？」

「さっきやったのは集中してイメージ創って手元のカップに投影しただろ。　投影させるのを手元ではなく、離れた場所に投影するんだ」

「つまり、力を伸ばせと」

「そういうことだ」

「そうね……そこからアゲハに触ってみて」

なぜ俺が的なんだ？

「わかった。　P S Iの力を伸ばしてアゲハに触ればいいんだな」

一夏は眼を閉じ、イメージを固め始めたようだ。

「（アゲハに触ることをイメージ……それを目の前に投影する……だけどこれは少し先にいるアゲハに触ることだ……P S Iの力をアゲハまで伸ばす……）」

一夏の目の前に何かが生まれ始めた。

（お、もう形になってやがる。　これならそこまで時間はかからないか……？）

形が固まり始めたところで、それは消えた。

「……イメージを頭の中に維持してるだけで頭が熱い……！　茹で

「あがりそうだ……！」

「最初はそういうもんだ。俺もそうだった。ゆっくりやっていけばいいんだ」

「そんなにゆっくりやってられるかよ……！ そのW・I・S・Eとか言う奴らがいつ来るかわからないんだ……。俺はすぐにでも力が欲しいんだ……！」

「焦る気持ちはわかるけど、P S Iはそれだけ危険なの。特訓の最中に死んでしまうわ」

「P S Iは脳を酷使してしまう。P S Iの使いすぎで死んでしまった人もいるんだ。お前は守る前に死ぬのは嫌だろ？」

「……わかったよ……」

一夏がP S Iをある程度伸ばせるようになったが、まだ俺に触れるほどにはなっていない。

「今日はここまでだ。今日は一切のP S Iの使用を禁止する」

計五時間近くP S Iを使っていたから、今日はもうやめさせる。朧に何度か回復させたが、無理は駄目だ。

「勝手にやるなよ」

「わかった」

(にしても、一夏の成長速度が速すぎる。

天然のサイキッカーのはずなのに、P S Y R E N世界の空気を吸った者ではないのに。

一夏は呑み込みが早いとは思っていたが、まさかP S Iにまで及ぶとは……。

一夏の才能か……)

俺は一夏の成長速度に感心していた。

S i d e ｝ アゲハ ｝ o u t

CALL 33 ?訓練開始? (後書き)

一夏のPSIについて、何か案があれば感想のところに書いてください。

それを参考にさせていただこうと思います。

CALL 34 ? 一夏の成長?

Side アゲハ

「一夏、やるぞ」

「お、おう」

最近はISの訓練よりもPSIの訓練を優先でやっている。
バーストのコツは覚えたらしいので、今はライズの訓練をしている。
一夏はこのところ毎日、俺に殴られている。
バーストを覚えるのは早かったが、ライズの訓練を開始して三日経っているが、未だにイメージが固まっていない。

「な、なあアゲハ」

「何だ？」

「今日も殴られるのか？」

「そうだ」

「俺たちもそうだった」

「あなたたちはもっと凄いライズ使いだったよね」

俺たちのライズの師は電堂影虎^{ひょうどうかげとら}。

自称関東最強のライズ使いだが、本当に最強のライズ使いだろう。

「ライズ特化型の人だったけど、ライズを使わせたらあの人に右に出るものはいないな」

「あの人はお前と同じで、天然のサイキッカーだが、その实力は本物だ」

「並みのサイキッカーじゃ相手にならないと思うよ」

「……そんな凄い人に殴られていたのか？」

「ああ。俺たちはPSYREN世界の大気を吸って脳覚醒したからすぐにできるようになったけどな」

「なぜかお前はPSIの覚えが早い。もう一度言うが、PSIの基本は脳でイメージを構築することだ」

「ライズを覚えるには自分が強くなったイメージを探さなきゃ駄目よ」

「イメージねえ……」

「まあ、本当は殴らなくてもいいんだけど、実体験するのが一番いいんだよ」

「と言うことで、今日もやるぞ」

「俺かアゲハの顔に一撃いれたらクリアだぞ」

「お、おう」

S i d e 〉 アゲハ 〉 o u t

S i d e 〉 一夏 〉

「ゴハッ！」

アゲハたちにP S Iを教えられ始めて二週間ほど経った。
バーストはもう自分の形にはなっている。

プログラムについても聞いたから、それなりに応用もできるよう
なってきた。

今度俺のバーストをアゲハたちに見せよう。

そんな俺は今、ライズを教えられているんだが、今一イメージが固
まらないでいる。

「一夏、最近俺たちから受けた傷の治りが早くなったって感じてな
いか？」

傷の治り？

臍にほとんど治してもらってるから気づかなかったな。

「お前はP S Iを覚え始めてから、無意識にライズを使ってるんだ」

無意識に……？

「人それぞれに得手不得手はあるが、サイキッカーには少なからず
基本の三つは使える。あとは無意識に使っているライズを、意識
の表に引きずり出すだけだ」

無意識を意識する……。

「ヒリユー、交代だ」

「ああ」

「一夏、俺たちのパンチや蹴りを受けて、どうなりたいかは感じてきたんじゃないのか？」

「どうなりたいか……」

アゲハはスピードで俺を殴ってきている。

アゲハのなら何発かは耐えられる。

飛龍はスピードは無いが、耐久力がある。

俺の攻撃を受け止めてからの重い一撃には耐えられない。

アゲハを倒すなら、反応速度を上げるか、アゲハ以上の速さを求める。

飛龍を倒すならば、反応できないほどの速さを求めるか、飛龍のガードを打ち壊すほどのパワー。

俺の推測だところなる。

「どうやら、イメージが固まってきたみたいだな」

「おかげさまでな！」

「よし！ んじゃ、行くぜ！」

「くっ！」

やっぱり速いな……。

さすがに何度も受けれるほど、俺の身体は鍛えれていない……。

「ガッ！」

俺はアゲハのパンチを受けて倒れた。

「「「「一夏^{さん}あ！」」「」」」

なんだ、皆来てたのか……。

「アゲハ、やりすぎだ！」

「そうですわ！」

「一夏はPSIが使えるみたいだけど、ここまでやる必要は無いんじゃないの!？」

「……朧、一夏を治療してくれ。 続きをやる」

「任せてくれ」

「「「「アゲハ!!」」「」」」

「……皆、いい。 もう少しで、何か掴めそうなんだ」

「「「「一夏^{さん}……」」「」」」

「一夏、あまり無理しないでね」

「勝手に死ぬことは許さんぞ」

「……簡単にくたばって堪るか」

朧の治療はこれで何度目だろうな……。

「もういいよ」

「ありがとう朧」

「さて、続きをやるぞ」

「ああ……！」

S i d e 一夏 out

S i d e アゲハ

「どうした一夏。動きが遅くなってきたぞ」

「はぁ…はぁ……まだ、まだぁ!!」

一夏のイメージは固まってきたるようだが、まだみたいだな。

「ウラァ！」

「ガハッ! ゴハッ!」

「この程度か? だったらもう一回寝なっ!」

俺は一夏の顔に向けて拳をぶつけにかかる。

「「「「一夏^{さん}!!!!」」」」

「……やればできるじゃねえか」

一夏は崩した体勢から俺のパンチを避けやがった。

「……今、何したんだ……? 俺は……」

「一夏、漸くなってきたじゃねえか」

「天然のサイキッカーにしては才能の開花が早いわね」

「今の感覚を忘れるなよ」

「……え? あ、ああ……」

「臆、また頼む」

「これも一夏君の才能かな?」

「さっきの感覚を忘れる前にもう一度だ」

「お、おう!」

コイツは想像以上の戦力になるかも知れんな……。

S
i
d
e
↳
ア
ゲ
ハ
↳
o
u
t

C A L L . 3 4 ? 一夏の成長? (後書き)

夏休み偏は終わります。

アゲハと桜子の旅行話は、閑話休題として書くかもしれませんが、書かないかもしれません。

CALL. 35 ? 一夏のPSI? (前書き)

一夏のPSI登場です。

CALL. 35 ? 一夏のPSI?

Side 一夏

二学期初の実践訓練は、一、二組の合同で始まった。
そして今、俺と鈴の模擬戦だ。

「俺の新たな力の実験台第一号になってくれよ!」

「言ってくれるわね!」

俺の、俺だけのPSIは、アゲハたちにすら見せていない。

「『天使の羽』!」
エンゼル・ダスト

俺のISに白い光を放つ翼が生え、そこから複数の球形の光が周囲に舞う。

俺のPSIは『天使の羽』。
エンゼル・ダスト
アゲハみたいにバリエーションはないけど、防御には結構適している。

「行くぜ! 鈴!!」

「受けて立つわよ! 一夏!!」

「はあああああ!!」

結果は俺の勝ち。

鈴は初見だということと、能力を知らなかったことから、俺が圧倒した。

陰ながら練習しておいてよかったな。

「なんなのよ！ あれ！」

「あれが俺のPSIだ」

「『天使の羽』だったか。色々応用が出来そうだな」

「あ、そうだ。 アゲハ、また今度プログラムについて教えてくれ」
「わかった」

前にアゲハのPSIの技の多さについて聞いたときにプログラムつてのがあったんだよな。
あれを使えばまだ増えるかもしれない。

「あーやっぱり悔しいわねえ」

「いくら代表候補生とはいえ、サイキッカーを相手にするんだ」

「PSIに目覚めた一夏にはそう簡単には勝てないわよ」

羽を維持しながら戦うのはまだ慣れてないけど、羽は便利だからな。
羽を使ってるときは白式の数度も上がるし、防御も羽から放たれる
光球でできるし。

攻撃にはあまり使えないけど、バリエーションが増えれば攻撃用の
技も出来るだろう。

だけど、それだけじゃあアゲハたちには絶対に勝てない。

それは、俺はまだまだ未熟だし、そもそもアゲハたちとは圧倒的な
経験の差があるからな。

「俺たちもがんばらねえと先輩として立つ瀬がないな」

「確かにな。 望月と霧崎はともかく、俺とアゲハは駄目だろうな」

「そうね。 一夏の成長速度は異常だし、『天子の羽』。 あれは
相当なものになるわ」

「アゲハ君のが破壊の力だったら、一夏のは守りの力だね」

俺があ有能力になったのって、皆を守るための力になるようにイメージしてたらあの形になったんだよな。

「さて、次もアリーナだから行こう？」

「だな」

「やっぱり、この人数でも広いな」

「そりゃそうだろ。男子は五人しかいないんだからな」

「ほんと贅沢だよな」

「それは同感」

「そう言えばさ、お前の白式、セカンドシフトしてよりエネルギー消費激しくなったんじゃないか？」

「ああ、そうそう。雪羅が結構使うんだよ。スラスタも大型化してこっちもエネルギー食うし」

「それに比べてアゲハはエネルギーの心配ほとんどないもんな」

「暴王兵器で喰らったエネルギーを自身のエネルギーに変換するかな。一夏の間逆だな」

「羨ましいな、その能力」

「スペックだと最悪でもあるしな。ソードで斬られればエネルギーを奪われ、その奪ったエネルギーを大技に変えられて、ウィングでエネルギーを奪われれば、戻ったときにはエネルギーを回復されて、クロウだったら直接奪われる」

「鬼畜だな」

ソードならまだしも、クロウとウイングには警戒しないと、ほぼ確実に負けるとか、滅茶苦茶不利なんだよな。

しかもノヴァを使ったら、機動力とか跳ね上がるし、そんなスピードでやられたら堪ったもんじゃない。

「カブトも結構あれだぞ。　そもそも攻撃を逸らされるんだから」

「確かに。　攻撃当たんなかったら意味ないし」

俺たちは時間があつたので、駄弁っていた。

「……誰だ？」

「え？」

アゲハが急にそんなことを言い出した。

「まさかばれちゃうなんてね、予想外だったな」

出てきたのは二年生（リボンの色がそうだった）の女子生徒。
髪の色が水色の、不思議な感じの人だ。

「……俺たちに何のようだ？」

「うふふ、なんでしょうね？」

「アゲハ君、この人は放っておいて行かないと。　織斑先生に怒られるよ」

「もうそんな時間か。行くか」

「だな」

俺も立ち上がり、ロッカールームを出る。

「あまり俺たちに関わるな。殺すぞ」

アゲハは、その女子生徒に何かを言っていたが、俺は聞こえなかった。

S i d e 一 夏 〓 o u t

CAL. 35 ?一夏のPSI? (後書き)

天使の羽。

一夏のPSIを考えていたら、いつの間にかこんな能力になっていました。

翼とかいいなあとか、一夏なら守る能力かなって考えていたら、防御系の羽って言う結果になりました。

攻撃技も考える予定です。

CALL. 36

?殺氣立つ男たち? (前書き)

お久しぶりです、黒翼です。

他の作品を優先しているので、更新が遅くなっています。
よろしければ、他の作品も読んでくださると嬉しいです。

Side アゲハ

水色の髪的女子生徒に会い、PSYREN組以外の専用機持ちが模擬戦をした翌日。

SHRと一限目の半分を使つての全校集会が行われている。内容は今月中程にある学園祭についてらしい。

(うるさいな……)

全校集会。

つまり、IS学園にいる生徒が集まる場だ。

IS学園は元々女子校で、男はイレギュラーである、俺、ヒリユ、隼、カブト、一夏の五人だけ。

それ以外は全員女子。

女子がこっだけ集まると、騒がしいを通り越して姦しい。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会の役員であろう女子生徒がそう告げると、ざわつきが消えた。

「やあみんな。 おはよう」

「「「「!?!?!」」」」」

壇上で挨拶をしたのは、昨日、俺が忠告した女だった。

『なんか嫌な予感がするんだけど……』

『カブト、俺もだ』

『僕もだね。面白くなりそうなんだけど、気に入らない』

俺たちがテレパスで会話をしている。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

『この会長か。禄でもない事をしでかすだろ、アイツ』

俺もそう思う。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容と言うのは」

空間投影ディスプレイが浮かび上がる。

「名付けて、『各部対抗男子争奪戦』！」

ディスプレイには俺たちの顔写真がでかでかと映し出された。

『』『』『殺る！』『』『』

珍しくPSYREN組の男全員の意見が一致した。

ライズ！

タツ！　つと跳躍し、一步で会長の周りに立つ。

会長を逃がさないように、俺、臙、ヒリュー、カブトで囲う。

俺は暴王・円盤Verを出し、ヒリューは龍の尻尾を出している。見えてるのはこの場にはほとんどいない。

ちなみに、俺たちは殺気立っている。

珍しく臙も殺気立っている。

……爽やかな笑顔で。

「え、えーつと……」

「撤回しろ」

俺はそう告げる。

「昨日忠告したよな？　俺たちに関わると殺すと」

殺気をさらに込める。

「僕たちは君を殺したくない」

「今すぐ取り下げろ」

「君には死が見える」

冷や汗を流す会長。

顔も青くなっている。

「もう一度言う。撤回しろ」

「……それはできないかな」

考えてようだが、断った。
理由でもありそうだな。

「……一応、訳だけでも訊いておこうか」

「……あなたたちが部活に入らないから苦情が来てるの。だから
よ……」

「……用は俺たちが部活に入ればいいんだな？」

「……ええ、そうよ」

「だったら、部活を創ればいいんだよ。俺たち男子が全員入部すれば、これは意味を生さなくなる。そうだろう？」

部活に入らないから苦情が来るのなら、部活に入ればいい。
俺たちだけの部活をな。

「ならば、俺たちはこの場で部活を創る。部員は俺、ヒリユ、カブト、隼、一夏だ。これで文句はないよな？」

「……部活の内容は？」

「自身の力を磨く」

PSIを使って、俺たちだけの戦いを磨く為の部だ。

……会長はもう限界かな？

俺たちはずっと殺気を出しているからな。

特に怖いのは隼だ。

物凄いイケメンが、物凄い爽やかな笑顔で殺気を出してるんだからな。

「……わ、わかったから、その殺気を抑えてくれないかしら？
特に望月君」

やっぱり一番怖かったか。

いくら殺気に慣れてたとしても、俺たちの殺気は織斑先生以上だ。
それにプラスして、物凄い笑顔だからな。
恐ろしいったらありやしない。

「了解。　と言う事で、撤収！」

俺たちは殺気を消して、元いた場所へと戻った。

「……えー、と言う事で、『部活動対抗戦』はなくなりました。
残念ですが、諦めてください」

女子共はブーイングの嵐だ。

誰が女子だけの部活に入るってんだ。

そんなことしたら、桜子とアビスに殺される。

『一夏、聞こえるか？』

俺は一夏にテレパスをする。

P S I を覚えた一夏は、テレパスが苦手のようにだ。
現在習得中で、こちらからのテレパスは大丈夫だ。

『ああ、聞こえる』

『さっきは勝手に部活に入れたが、問題なかったか？』

『問題なんて何もない。むしろ助かった。ライズで聴力を上げて会話を聞いてたけど、PSIを強化したりする部活だろ？』

『ああ。俺たちはそこの人間とは次元が違う戦いをする。だから、部活に使わせてもらった。入部条件は、俺たちのうち、身の誰かに一撃を入れる事。要するに、PSIが仕えない奴以外は入れないってことだ』

俺たちサイキッカーに生身で一撃与えるのならば、相当な化物じゃないと無理だ。

例えば織斑先生とか織斑先生とか織斑先生とか。

『俺だけだったら絶対に無理だった。本当にありがとう！』

一夏に感謝された。

こうして、俺たちの部活の創設された。



同日、教室にて放課後の特別HR。

今はクラスごとの出し物を決めるため、わいわいと盛り上がっていた。

「えーと……」

俺たち男子は軽くフリーズしていた。

なぜなら内容が……

『五人しかいないISを扱える男子とホストクラブ』『五人しかいないISを扱える男子とツイスター』『五人しかいないISを扱える男子と王様ゲーム』

……………。

ちよつと桜子が殺気立っているのは気のせいではないだろう。
だからまあ、

「「「「却下」」」」

ええええええええ！ と、大音量でのブーイング。
ふざけるな。

「あ、アホか！ 誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「俺は絶対に嫌だ。 桜子に殺されるからな」

「俺たちには損しかないだろうが」

「こんなのは面白くない。 僕が面白くなくちゃ」

「こんなんだったら逃げるからな」

各々の意見を言う。

「私は嬉しいわね。 断言する！」

「そうだそうだ！ 女子を喜ばせる義務を全うせよ」

「男子は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

「「「「ふざけるな」」」」

最近よく同じ意見になるな。

「では、メイド喫茶なんかはどうだ？」

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつも通りの口調だが、何せ言ったのがラウラだったため、皆は理解に時間が掛かっていた。

あまり驚かないと自負している俺でも、驚いた。

「いいんじゃないかな？ 一夏たちは執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよね」

「執事！ それいい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうするの！？ 私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

一気に盛り上がっていく女子たち。
まあまださっきのよりかはマシか。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

「またもやそう言ったのはラウラ。
キャラ変わったな、本当に。」

「——ごほん。シャルロットが、な」

いきなり振られたシャルロットは困った顔をしていた。

「え、えっと、ラウラ？ それって、先月の……？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

不安げに言うシャルロットに『怒りませんとも！』と断言する女子たち。

一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』になった。
桜子の殺気は治まったが、不機嫌だった。

S
i
d
e
↳
ア
ゲ
ハ
↳
o
u
t

CALL. 36 ?殺氣立つ男たち? (後書き)

一夏は生徒会から外れました。

久しぶりなので、キャラが崩れてないかが不安です。
感想をくださると、嬉しいです。

CALL. 37 ?一夏VS会長? (前書き)

サイキッカードなった一夏と楯無さんの戦いですが、戦闘は短いです。

Side アゲハ

不機嫌になった桜子をなだめて、俺たちはPSIを使っていた。
ちなみに、一夏はいない。

一夏はクラス代表のため、織斑先生に報告に行っている。

「おらあ！」

「甘い！」

俺とヒリューはいつもの通り、ライズを使つての戦闘をしている。

朧とカブトは観戦している。

それから十分ほどしてからそれを中断した。

「お前らも見るのはいいけど、少しはやれよ。特に朧」

「わかつてるけどね。 ハーモニウス 生命融和はここでは使えないしね」

朧のPSI生命融和は、PSYREN世界で存在したイルミナを吸収し、自らの力に変える能力だったはずだ。

この世界にはイルミナが存在しないから、朧の生命融和は無意味になってしまっている。

「ライズって難しいね」

「あなたはCUREが使えるんだから、バーストとライズの素質はあるんだから、もう少しちゃんと練習してみれば？」

「うーん、そうだね、僕なりにやってみるよ。アゲハ君、また今度相手になってよ」

「わかった」

「で、カブトはどうなんだ？」

「幻視はライズのセンスとトランスの素質があるのよ。アゲハみたいにセンスで感覚を底上げして、瞬間的なストレンジスでのヒット&ump;ウェイのライズにしてみれば？」

「あーでも、イアン式ライズ覚えているから、間合いに入るくらいならできるぞ」

「間合いには入れても、お前自身の攻撃に威力が無ければ意味無いだろ」

「それもそうだな。アゲハー、感覚教えてー」

「俺は教えることは苦手だぞ。感覚は自分で掴め」

「うへー」

「いくら幻視で死が見えても、それに対処する術がなければ意味無いんだから」

「わ、わかったよ」

カブトがしっかりライズを覚えれば、死が付く戦いでは最強になる

だろう。

「にしても一夏遅いな。もう来てもいい頃だと思うんだけど」

「そう言えばそうだな」

「何かあったのかしら」

「ちょっとトランスで聞いてみる」

トランス覚えておいて正解だな、本当に。

『一夏、何してるんだ？』

『アゲハか。悪い、会長に捕まって生徒会室に連行された』

『またアイツか……！』

『今日行けるかわからねえ。会長にどこまで付き合わされるか不明だから』

『まあわかった。何か吹っかけられたら一応聞け。トランス一応できるようになっただろ？』

『何とかな。何かあったら教えるわ』

『おう。じゃあな』

トランスを終了させる。

「どうだった？」

「会長に捕まって生徒会室に連行されたいらしい」

「またあの人？ 気に入らない」

「臃がそこまで拒否するとは珍しいな。 まあ、俺も正直気に入らないんだが」

俺たちがあいつのことが気に入らないのは、今日の全校集会であった騒動のせいだ。
初見なのにかなり嫌った。

「はあ……一夏も面倒な事に巻き込まれるわね……」

「そういう星の元に生まれたんじゃないか？」

「そうかもな」

「まあ、臃とカブトのライズの練習でもするか」

「じゃあ俺がカブトを相手にする。 似たタイプの方がいいだろうからな」

「じゃあ臃は私たちとね。 あなたは呼吸を合わせるのが得意なんだから、潜り込んで一撃与える事を覚えなさい。 ストレングスはまだ未熟なんだから」

「わかってるさ」

俺たちはそれぞれ練習を始めた。

『アゲハアゲハ!』

それからしばらくしたら、一夏からトランスで声が聞こえた。

「カブト、一旦ストップ。一夏からだ」

カブトとの練習を中断する。

『何だ一夏。あいつがなんかやらかしたか?』

『ライズで楯無さんをボコボコにしているか?』

『ちょっと待て。どういう経緯だ?』

どうなったらそういう話になるんだ?

『何か、俺が弱いから鍛えてやるとか言い出してな。ついムカッ
となって乗ってしまった』

『……馬鹿だろ』

『返す言葉もございません……』

『まあ、あいつをボコボコにするのは賛成だ。で、場所はどこだ
?』

『畳道場』

『んじゃ、俺はお前がアイツをボコすところを見に行くでしょう』

『わかった。着替えたらやるみたいだから、急いだ方がいいぜ』

『わかった』

トランス終了。

「俺、今からアイツと一夏の決闘見に行くけど、お前らはどうする？」

「ライズの使用は？」

「勿論ありだ」

「行く」

アイツがボコられるのが見たいのだろう。
アイツ、とことん嫌われたな。

「んじゃ、行くか」

俺たちはライズを使って移動する。

移動くらいならカブトも臍も出来る。

俺たちが道場に着くと、一夏とアイツは向き合っていた。
どうやら間に合ったようだ。

「さて、勝負方法だけど、私を床に倒せれたら君の勝ち」

「え？」

「逆に君が続行不能になったら私の勝ちね。それでいいかな？」

「そんなんでいいんですか？」

「どうせ私が勝つから大丈夫」

「……………」

終わったな。

今の一夏はライズが使える。

いくらあいつが強くて、サイキッカーに勝とうだなんて無理な話だ。

「行きますよ」

「いつでも」

すり足移動。

そしてあいつの腕を取るが、一瞬にして返され、一夏は畳に投げ落とされた。

小手調べでライズを使わなかったな。

「まずは一回」

一夏は立ち上がり、再び構える。

「……楯無さん」

「何かしら？ 諦めて私の指導を受ける気になった？」

「あなたが強いのはわかりましたが、俺も本気を出させてもらいます」

ライズを使うか。

「出し惜しみなんてしないでよね」

「では、遠慮なく行かせてもらいます。……俺の動きについて来れますか？」

「え？」

一夏はストレンジスで上げた身体能力で動き出す。

「速い！」

その速度になんとか反応できたアイツは手を伸ばすが、センスで五感も上昇しているため見切り、あいつの腹に掌打を叩き込んだ。

「ぐっ」

掌打で怯んだ瞬間に、腕を掴み、足を払い、あいつを畳に叩きつけた。

「俺の勝ちですね」

「負けた……？」

あいつは何が起こったのか理解できていないようだ。

「一夏、反応されるんじゃないやまだまだな」

「アゲハか、わかってる。自分の未熟さは一番理解してるから」

「まあ、あそこまで出来れば上出来だ。本当にお前の成長速度には驚かせられるな」

「まったくよ。感染もしてないのになんでそこまで成長が早いのかかわからないわ」

「な、なんの話をしてるの？」

こいつの事、軽く忘れていたな。

「一つ言っておく。あんたじゃ俺たちには絶対に勝てない。ただの人間が俺たちに勝てるわけが無いだろう」

「私たちサイキッカーが、ただの人間に後れを取るわけないじゃない」

「そこまで強くない僕でも、君に勝てるよ」

「さ、サイキッカー？ あなたたちは何を言ってるの？」

ばれたところで変わらんから教えるか。

「俺たちは簡単に言う超能力者だ。ただの人間が勝てると思うなよ」

「超能力者……」

「じゃあな」

呆けたままの会長を放っておいて、俺たちは戻る。
一夏は着替えてから走ってきた。

S i d e 〉 ア ゲ ハ 〉 o u t

C A L L . 3 8

? 一夏の新技? (前書き)

一夏の攻撃技登場。

Side アゲハ

「よし一夏、殺るぞ」

「字が違う!？」

「だってお前があいつに結構反応されるから殺るんだぞ?」

「お前は俺と違ってスピードが出せるんだから、あいつのような手練れでももう少し反応されないようにしろ」

「あなたはまだPSIを覚えて日が浅い。それでもあなたは今以上の力を得なければならぬ。私たちと違いあなたは経験がない。だから、それを補えるだけの力が必要なの」

桜子の言うとおり。

一夏じゃあ臍やカブトにさえ勝つことはできない。

単純な力の差ではなく、圧倒的な経験の差。

一夏はこの平和すぎる世界で生きてきたが、俺たちは常に死と隣り合わせの世界で幾度もの死戦を乗り越えてきた。

俺たちが平和しか知らない一夏に負けるわけがない。

「僕たちは長く使ってるし経験も豊富。君はこの平和すぎる世界しか知らない。臨海学校のときにわずかに死を感じただけで、その程度じゃあW・I・S・Eと戦うなんて夢のまた夢だよ」

「だから、これからは今まで以上に殺しに行く。一夏、覚悟はい

いか？」

今の一夏の力では死に行くだけだ。

星将相手では確実に死ぬ。

だから、少しでもマシになるように死の恐怖に抗えるだけの力を身に付けさせる。

「……ああ。 やってくれ」

どうやら覚悟はあるようだ。

一夏の瞳がそう語っている。

「確かに俺は弱い。 まだ自分を守るかすらもわからないほどに。

こんなんじゃないや皆を守るなんて到底無理だ。 だから、俺は力が

欲しい。 皆を守るほどの力が」

「いい眼だ。 一夏、お前はライズ、トランス、バーストすべて使

っている。 俺はライズのみだ」

「わかった」

「準備はいいか？」

「ああ、大丈夫だ。 やってくれ」

「行くぞ」

俺は殺気を出しながら一夏に接近する。

「くっ！」

俺の殺気に気圧されたようだ。

「この程度の殺気に圧されるようじゃあまだまだだ。反応がいつもより鈍っているぞ」

殺気に慣れていないからだろう、若干反応が遅い。戦場ではその一瞬が命取りだ。

「いつも以上にイメージを鮮明にしろ。その程度では星将に瞬殺されるぞ」

「わかってる！ はあっ！」

「スピード上げるぞ」

「！ くっ！ 『天使の羽』！」
エンゼル・ダスト

一夏の背中から光の翼が生え、そこから光の球体が飛び出し、一夏は空に浮かんだ。

「はあ……はあ……」

「集中力を切らすな。簡単に息が上がりすぎだ」

「わかってるさ」

「続けるぞ」

「ああ。頼む」

ダツと地を蹴り、宙に浮かぶ一夏に殴りかかる。

だが、それは光の球により防がれた。

俺はその光の球を使い、宙を駆け、再び一夏に殴りかかる。
だがそれも光の球により防がれた。

「攻撃に反応して防御するようにしたのか」

「ああ。俺に迫る攻撃に対して反応し、防衛するようにプログラムしたんだ。防御に関しては高い性能を持つぜ」

「そうか。だが、それだけではまだ駄目だ」

さらに殺気を出し、スピードも上げる。

「俺だって守りだけに徹してるわけじゃないんだ！
『天使の槍』エンゼル・スピアー」

一夏の翼が光、光の球体が翼から次々と撃ち放たれた。

「！やるじゃん。だがまだ遅い」

俺は飛んでくる球体を見切り、それらを蹴って一夏に接近する。

「流石はアゲハ。この程度じゃ物ともしないか」

「だが、発想はいい」

「ありがとよ」

「終わりだ」

俺は一夏の肩に踵落しを決めて地面に叩き落した。
攻撃したときのあの技を使用した瞬間、宙に浮かんでいた光の球の動きが停止した。

おそらく、『天使の羽』と『天使の槍』の同時使用はまだできないようだ。

だからこそ、俺は一夏を叩き落すことができたのだ。

「痛てえ……」

「大丈夫か、一夏」

「あ、ああ、なんとか……。ライズ使って何とかダメージを減らせたけどな……」

「そうか。臃、一応キュア掛けてといってくれないか？」

「任せて」

臃は一夏の傍により、キュアを掛ける。

臃のキュアも成長し、毎回抱きつかなくてもよくなった。

なぜか俺の場合は抱きつこうとするのだが……。

「『天使の槍』か。一夏お前、わざとああいう風にしたのか？」

「そうだぞ、一夏。お前、あの球を鋭くできたんじゃないか？」

「まだ未完成なんだよ。前方に射出するまでは形にできたんだけど、光球の形まではまだなんだ」

「あれ完成すればかなり武器になると思うぜ、俺は」

カブトがそう言う。

まあ俺もそう思う。

「あれは前方だけだけどかなり広範囲攻撃できる。白式と同時使用するなら荷電粒子砲は使わなくてもいいし、あまり狙わなくても十分脅威になるからな。エネルギーの節約になるぜ」

「ああ。貫通力が合わさればかなりの武器になるはずだ。もっと速度を上げればさらにいいぞ」

「あれを全方位に放てれば、もしも囲まれても大丈夫ね。広範囲の殲滅に使えるわ」

それに加えて連射性に優れている。
完全にものにしたら絶対に武器になる。

「明日からその技の完成も含めて特訓するようにするからな。もっと強い殺気に当てられても大丈夫になれよ」

「一夏君、ちなみに言っておくと、アゲハ君が出してた殺気は本気の十分の一にも満たないからね」

俺の最高の殺気はノヴァ使用時だな。

ノヴァ使わなくてもそれなりの殺気は出せるぜ。

「マジかよ……」

一夏はこれからの訓練のことを考えたのか、テンションが下がっていた。

S i d e 一夏 ー o u t

CAL. 38

?一夏の新技? (後書き)

『天使の槍』。

前方に光球を高速射出する技。

今現在は未完成で、光球は鋭く、さらに速度を上げるのが一夏の目標。

広域殲滅に向いている。

こんな感じです。

Side アゲハ

学園祭当日。

一般公開はしてないので開始の花火などは上がらないが、生徒たちの盛り上がりは高かった。

「うそ!?! 一組で男性陣の接客が受けられるの!?!」

「しかも執事の燕尾服!」

「それだけじゃなくてゲームもあるらしいわよ?」

「しかも勝ったら写真を撮ってくれるんだって! ツーショットよ、ツーショット! これは行かない手は無いわね!」

一年一組の『ご奉仕喫茶』は大盛況で、朝から大忙しだった。男の俺らは特に忙しく、その中でも臃の指名が一番多かった。臃は黙っていればいい男なんだが、今は芝居が入っているのか接客は完璧だった。

ヒリユーは少し硬いが、とりあえず問題はない。

カブトはまあ、普段はふざけているが、問題はないだろう。

「いらっしやいませ。こちらへどうぞ、お嬢様」

臃は持ち前のルックスで、次々と客を虜にしていた。

「『ケーキセット』一つ」

「『ケーキセット』をお一つですね。少々お待ちください」

俺は俺で仕事を全うしていた。桜子が時々目を向けるんだが、その目が冷めていて背筋が冷たくなる。

「はい、どうぞ」

「どうも」

ちなみに、オーダーはブローチ型マイクで音声を通じているので、オーダーしてから出すまで時間が掛からない。

この辺りのこだわりは流石と言うところだろう。

ケーキセットはケーキとアイスティーのセットで、値段は300円とお値打ち？ 価格だ。

「お待たせしました、お嬢様」

「あ、ありがとう」

「では、お寛ぎください」

俺はセットを置き、別のテーブルへと向かう。

男の俺たちは指名が多すぎて困る。

どうにかならないものか。

どうせ訴えたところでどうにもならないだろうが。

「……アゲハ、デレたりしたら、わかってるわよね……？」

桜子もお怒りですし、本当にどうかして欲しい。

「あ、ああ、もちろんわかってるさ。だから殺気立つのは止めてくれ……。ひやひやするから……」

急に斬りかかってこないか、背筋が冷たくなる。

いくら人前でも、アビスの方の人格が出てきたら確実に殺られる。

「アゲハが他の女に目を眩ませたら、絶対に許さないんだからねっ！」

そういい去っていく桜子。

ほんのり頬が赤くなっていて、物凄く可愛かった。

あれは堪らない。

ついつい見惚れた。

「っと、惚けてる場合じゃねえな。仕事仕事」

それでも仕事は全うするつもりだ。
しばらくすると、目立つ客がいた。

「ん？ あれは……鈴か」

鈴はチャイナ服を着ており、かなり大胆なスリットが入っている。
その鈴は一夏の接客を受けていた。

……騒がしくなると感じるのは気のせいだろうか？

「（ゾクッ）っ！？」

突然背筋が凍り、冷や汗が止まらない。

恐る恐る振り返ると、俺に殺気を飛ばしている桜子がいた。
ここに来て一番の殺気だ。

『……アゲハ、何を見てるの？』

『さ、桜子……？』

『何を見てたの？』

『め、目立つ客いるから、どんな奴なんだと思って見たんだ。　り、
鈴がチャイナ服着てるだろ』

『あーあれね。　そんなにチャイナ服がいいの？』

『い、いや、そんなことはないぞ。　ただ、どんな奴が着てるのか
気になっただけで、別にやましい気持ちがあったわけではございま
せん！』

『……そう、それなら見逃してあげる』

助かった。

まだ死にたくはないからな。

『だけど、もし靡いたりしたら、どうなるかわかってるわよね……
？』

『わかってる！　わかってるから抑えてくれ！』

確実に殺されるでしょう。

恋人にこんな殺気ぶつけられるとか、心臓に悪いぞ……。

『俺が一番好きなのはお前だ！ 他の女に靡くことはないから殺氣飛ばすのは止めてくれ！』

『……信じていいのよね？』

『ああ。 もし破ったら煮るなり焼くなり好きにしてくれ』

俺が桜子以外に靡くことはありえない。
本能的にそう感じている。

『……わかった。 だけど、あまり他の女に見惚れないでよね！』

『わかってるさ』

「アゲハ、固まってないで動け。 お前に指名きてるぞ」

「悪い。 今行く」

トランスの会話で動きが止まっていたようだ。

『雨宮が怖いのはわからんではないが、仕事に専念してくれ』

流石はヒリユー。

俺が固まっていた訳がわかっていたようだ。

『わかってるさ。 まあ、なんかあったら、なるようになるさ』

『まあ、頑張れ』

『おう』

仕事に戻る前に、一つ聞きたいことがある。

「なんであいつがいるんだよ」

「知らねえよ。気づいたらいたんだよ」

そう、生徒会長がいたのだ。

……なぜかこのメイド服を着て。

「どうもー、新聞部でーす。話題の執事達を取材に来ましたー」

面倒なのも来た。

「はあ、どうして二年は面倒な奴ばかりなんだ？」

あいつに新聞部の黛。

俺たちに関わる面倒ごとのほとんどがこいつらによって引き起こされている気がする。

「俺が聞きたい。またなんかありそうだ……」

俺たちはそう思うと自然に溜息が出るのだった。

Side アゲハ out

C A L L . 3 9

?学園祭開幕? (後書き)

桜子のキャラ崩壊してる気が……。

Side アゲハ

会長が来てからいろいろあった。

休憩があったり、休憩時間に一夏と一緒にしようとするメンツでじゃんけん大会があったり、俺と桜子で学園祭デートをしたり、とにかくいろいろあった。

「じゃじゃん、楯無おねーさんの登場です」

『『『……………』』』

俺たちサイキッカーは無感情の目で見る。

そしてスルーする。

あいつに構うと大体碌な目にあわないことはわかりきっているからだ。

「あら? スルー?」

『『『……………』』』

それでも俺たちはそこにいないかのように振舞う。

筭たちはどうするか悩んでいるようだった。

「…………何か反応してくれないかしら? ここまでスルーされたことは初めてなんだけど?」

『『『……………』』』

それでも無視を続行する。

会長の目に光るものがあるのは気のせいだろう。

「えーつとなんのようですか？」

だが、流石にこの空気に耐えられなかったのか、それとも会長を哀れんだのか、それともシャルロットの良心が痛んだのか、シャルロットがようやく会長に話しかけた。

「あーうん、一夏君たちを生徒会の出し物に協力させようと思ってね」

「「「「断る！」「」「」」」」

「いいじゃない。ここを手伝ってあげたんだから」

確かにコイツは手伝った。だが、

「それはあんたが勝手にやったことだ」

「俺たちが一度でも手伝ってくれと言った訳ではない」

「だから、あんたがやったことはただのボランティア」

「故に、僕たちが従う理由はない」

「そういうことです。こちらだって仕事をやっているんです。営業妨害として、織斑先生に突き出しますよ」

PSYREN組の連携。

俺たちが言ってることは正論だ。

会長がどんな権限を持っていようと、織斑先生の前では無力だろうな。

現に顔を青くしているし。

「で、何をやるんだい？」

「朧？」

なぜか会長に問いかける朧。

何をするか気になったのか？

「演劇よ」

「どういった？」

「観客参加型演劇。 演目はシンデレラよ」

なにかおかしい。

「観客参加型演劇って何だよ。 初めて聞いたぞ」

「奇遇だな、俺もだ」

「だけど、自信を持って言えるのは……」

「「絶対碌なもんじゃない」「」

俺、ヒリユー、カブトの声が揃う。

「ふーん。僕は出てもいいかな」

「」「」「臃!？」」「」「」

コイツは何言ってるんだ!？

「お前、正気か!？」

「うん、僕は正気だよ」

「こいつが何をするのかわからないんだぞ!？」

「それもわかってる。 だけど……」

「だけど？」

なんか何を言うか思い当たる節が……。

「だって面白そうじゃないか」

やっぱりな……。。

コイツはそういう奴だったな……。。

「アゲハ、臃のストッパーなんだからお前もやれ」

「何言ってるんだ!？ 俺も巻き込む気か!？」

面倒だぞ。

「だったらお前らもやりやがれ。俺がやるくらいならせめて一夏は絶対に巻き込ませる」

「なんでだよ！」

「なんかお前だけは納得いかん」

「何その理由!？」

「と言うわけで、行きましょう」

「アゲハたちを連れて行かれると困るんですけど」

「ちょうどいいわね。雨宮ちゃん、あなたも来なさい」

「はい? ……そういうことですか」

トランス使ったな。

あいつの考えていることを見たな。

「わかりました。行きましょう」

桜子、何を見た!?

何がお前を動かした?

「あのー、先輩? 皆を連れて行かれるとこれに支障が出るんですけど……」

「あなたも来なさい。ドレス着せてあげるわよ?」

コイツは本当に何がしたいんだ？
桜子に訊いてもスルーされたし。
何を見たんだよ、まったく……。

「ど、ドレス……」

シャルロットは迷ってるな。

「じゃ、じゃあ、あの……ちょっとだけ」

「じゃあ、箒ちゃんとセシリアちゃんとラウラちゃんもゴーね」

なにが「じゃあ」だよ。

「「はっ!?!」」

まあ、聞き耳を立てていたんだよな、こいつら。

「全員、ドレスを着せてあげるから」

「そ、それなら……」

「まあ、付き合っても……」

「ふ、ふん。仕方がないな……」

なぜか知らんが結局専用機持ち全員が参加することになった。
なんでだよ……。

S
i
d
e
↳
ア
ゲ
ハ
↳
o
u
t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6607t/>

IS インフィニット・ストラトス～破滅を喰らう漆黒の月～

2011年12月3日16時53分発行